

あか さび すな やま  
**赤鎧砂山遺跡 第5次調査**

— 商業施設建設に伴う赤鎧砂山遺跡第3次発掘調査報告書 —



2019

新潟市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は新潟県新潟市西蒲区赤鉛字砂山 331-3 番地ほかに所在する赤鉛砂山遺跡（新潟市遺跡番号 778）第 5 次調査の発掘調査記録である。赤鉛砂山遺跡第 5 次調査は平成 29 年度に実施した。
- 2 調査は商業施設建設に伴い、株式会社原信から新潟市が受託した。調査は新潟市教育委員会（以下、市教委という）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部文化財センター（以下、市文化財センターという）が補助執行した。
- 3 平成 29（2017）年度に発掘調査と整理作業、平成 30（2018）年度に整理作業と報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第Ⅲ章に記した。
- 4 出土遺物および調査・整理作業に係る記録類は、一括して市文化財センターが保管・管理している。
- 5 本書の編集・執筆は立木宏明・澤野慶子・奈良佳子（市文化財センター）が行った。遺構図版の作成は澤野・立木が行つた。遺物図版の作成は奈良・立木が行い、遺構・遺物写真図版の作成は澤野・奈良が行つた。執筆分担は以下の通りである。
  - 1 第 I 章、第 II 章第 1・3 節、第 III 章第 2・3 節、第 V 章第 4 節 A、第 VII 章第 3 節を立木、第 II 章第 2 節、第 III 章第 1 節、第 IV 章、第 VI 章第 1 節、第 VII 章第 1 節を澤野、第 V 章第 1～3 節・第 4 節 B、第 VII 章第 2 節を奈良が行つた。
  - なお、第 VI 章第 2～4 節は株式会社古環境研究所、第 VI 章第 5 節は株式会社加速器分析研究所による分析報告を編集して掲載した。
- 6 本書に掲載した写真的撮影者は、写真図版 1 が米軍（国土地理院発行）、写真図版 2・3・8-4・17-2・19-3 が株式会社オリス、それ以外の遺構写真は立木・澤野、遺物写真は株式会社シン技術コンサルである。
- 7 遺物実測図のデジタルトレースおよび DTP ソフトによる各種版下の作成は有限会社不二出版に委託し、完成データを印刷業者へ入稿した。
- 8 今回の調査成果については、これまで現地説明会資料（平成 29 年 7 月 16 日）や平成 29 年度新潟市遺跡発掘調査速報（澤野 2018）で発表されている。報告書と齟齬のある場合は、本報告書をもって正とする。
- 9 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。

伊藤秀和・小熊博史・春日真実・亀井 功・桑原正史・小林昌二・土橋由理子・中島栄一  
新潟県教育庁文化行政課・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社原信

（所属・敬称略、五十音順）

## 例　　言

- 1 本書は新潟県新潟市西蒲区赤鉛字砂山 331-3 番地ほかに所在する赤鉛砂山遺跡（新潟市遺跡番号 778）第 5 次調査の発掘調査記録である。赤鉛砂山遺跡第 5 次調査は平成 29 年度に実施した。
- 2 調査は商業施設建設に伴い、株式会社原信から新潟市が受託した。調査は新潟市教育委員会（以下、市教委という）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部文化財センター（以下、市文化財センターという）が補助執行した。
- 3 平成 29（2017）年度に発掘調査と整理作業、平成 30（2018）年度に整理作業と報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第Ⅲ章に記した。
- 4 出土遺物および調査・整理作業に係る記録類は、一括して市文化財センターが保管・管理している。
- 5 本書の編集・執筆は立木宏明・澤野慶子・奈良佳子（市文化財センター）が行った。遺構図版の作成は澤野・立木が行つた。遺物図版の作成は奈良・立木が行い、遺構・遺物写真図版の作成は澤野・奈良が行つた。執筆分担は以下の通りである。  
第 I、第 II 章第 1・3 節、第 III 章第 2・3 節、第 V 章第 4 節 A、第 VII 章第 3 節を立木、第 II 章第 2 節、第 III 章第 1 節、第 IV 章、第 VI 章第 1 節、第 VII 章第 1 節を澤野、第 V 章第 1～3 節・第 4 節 B、第 VII 章第 2 節を奈良が行つた。  
なお、第 VI 章第 2～4 節は株式会社古環境研究所、第 VI 章第 5 節は株式会社加速器分析研究所による分析報告を編集して掲載した。
- 6 本書に掲載した写真的撮影者は、写真図版 1 が米軍（国土地理院発行）、写真図版 2・3・8-4・17-2・19-3 が株式会社オリス、それ以外の遺構写真は立木・澤野、遺物写真は株式会社シン技術コンサルである。
- 7 遺物実測図のデジタルトレースおよび DTP ソフトによる各種版下の作成は有隣会社不二出版に委託し、完成データを印刷業者へ入稿した。
- 8 今回の調査成果については、これまで現地説明会資料（平成 29 年 7 月 16 日）や平成 29 年度新潟市遺跡発掘調査速報（澤野 2018）で発表されている。報告書と齟齬のある場合は、本報告書をもって正とする。
- 9 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。  
伊藤秀和・小熊博史・春日真実・亀井 功・桑原正史・小林昌二・土橋由理子・中島栄一  
新潟県教育庁文化行政課・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社原信

（所属・敬称略、五十音順）

## 凡　　例

- 1 本書は本文・引用参考文献一覧・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約8度である。
- 3 掲載図面のうち、既存の地形図などを使用したものは、原図の作成者・作成年を示した。
- 4 本文中の挿図に用いた地形図、遺構・遺物図の縮尺は各図に示した。
- 5 本文中の注は各節の末尾に記した。引用文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した（但し、第VI章は同章の中で一括し、引用・参考文献一覧の末尾に記した）。
- 6 遺構番号は現場で付したものを用いた。番号は区ごとに分け、遺構の種別ごとに付さず、通し番号とした。遺構種別は、以下の略称を用いて表した。

井戸 (SE)	土坑 (SK)	性格不明遺構 (SX)	溝 (SD)	烟 (SN)	ピット (Pit, P)	掘立柱建物 (SB)
7 土層の土色および遺物の色調觀察は『新版 標準土色帖』(小山・竹原 1967) を用いた。						
8 遺物の注記の際は跡跡名を「赤鉛砂山」とし、出土地点や層位を続けて記した。第5次調査出土遺物は跡跡名の前に調査年度（西暦）の後半数字の「17」を付した。						
9 遺構の記述は、区ごとに、井戸 (SE), 土坑 (SK), 性格不明遺構 (SX), 溝 (SD), 烟 (SN), ピット (Pit), 掘立柱建物 (SB) の順に記し、同一調査区内の同種遺構については、想定時期の別にかかわらず、概ね番号順に記した。この順番は遺物の記述、別表、図面図版、写真図版に掲載した遺構・遺物の順番と概ね対応する。						
10 遺物番号は土器・陶磁器はまとめて通し番号とし、石製品・木製品については種別ごとに1から番号を付し、その番号を本文および観察表・図面図版・写真図版に共通して用いた。						
11 遺構計測表における（ ）付きの値は残存値を意味し、遺物観察表中における（ ）付きの値は、推定値を意味する。						
12 遺構計測表では、遺構の新旧関係を表現する際に「<」や「>」を用いた。例えば、SK1<SK2となる場合はSK1が古く、SK2が新しいことを示す。						
13 遺構平面図での切り合い関係のある遺構の上端・下端の表現について、切られている遺構の場合、上端の復元が可能ならば破線、下端は切っている遺構よりも深度が深ければ実線、浅くても復元可能であれば破線で示した。						
14 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外を白抜きとした。土器・石製品・木製品の実測図で使用したスクリーントーンについては、その都度図版中に凡例を示した。						
15 土器実測図で全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差があるため中軸線の両端に空白を設けた。						

## 目 次

第Ⅰ章 序 章	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3節 歴史的環境	7
第Ⅲ章 調査の概要	10
第1節 試掘・確認調査	10
第2節 本発掘調査	10
A 調査方法	10
B 調査経過	12
C 調査体制	13
第3節 整理作業	13
A 整理方法	13
B 整理経過	13
C 整理体制	13
第Ⅳ章 遺 跡	14
第1節 概 要	14
第2節 層 序	14
第3節 遺 構	14
A 1区の遺構	15
B 2区の遺構	21
第Ⅴ章 遺 物	22
第1節 概 要	22
第2節 古代の土器	22
A 土器の記述と分類	22
B 出土土器各説	25
第3節 中世以降の陶磁器	29
A 中世の陶器	29
B 近世・近代の陶磁器	30

第4節 石製品・木製品	30
A 石 製 品	30
B 木 製 品	31
<b>第VI章 自然科学分析</b>	<b>32</b>
<b>第1節 概 要</b>	<b>32</b>
<b>第2節 植物珪酸体（プラント・オパール）分析</b>	<b>33</b>
A はじめに	33
B 試 料	33
C 方 法	33
D 結 果	33
E 考 察	34
F ま と め	35
<b>第3節 花粉分析</b>	<b>35</b>
A はじめに	35
B 試 料	35
C 方 法	35
D 結 果	36
E 花粉分析から推定される植生と環境	38
F ま と め	38
<b>第4節 樹種同定</b>	<b>39</b>
A はじめに	39
B 試料と方法	39
C 結 果	39
D 所 見	40
<b>第5節 放射性炭素年代（AMS測定）</b>	<b>40</b>
A 測定対象試料	40
B 化学処理工程	40
C 測定方法	40
D 算出方法	40
E 測定結果	41
<b>第VII章 総 括</b>	<b>42</b>
<b>第1節 赤鎧砂山遺跡の遺構について</b>	<b>42</b>
<b>第2節 赤鎧砂山遺跡出土の古代土器について</b>	<b>43</b>
<b>第3節 赤鎧砂山遺跡の様相について</b>	<b>44</b>
<b>引用・参考文献</b>	<b>46</b>
<b>別 表</b>	<b>50</b>
<b>報告書抄録・奥付</b>	<b>卷末</b>

## 挿図目次

第 1 図 赤鉛砂山遺跡周辺の地形分類図	4	第 7 図 赤鉛砂山遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）	35
第 2 図 赤鉛砂山遺跡周辺の古代遺跡分布図	6	第 8 図 赤鉛砂山遺跡の花粉ダイアグラム	37
第 3 図 試掘・確認調査トレンチ位置図、土層柱状図	11	第 9 図 赤鉛砂山遺跡の花粉・孢子	38
第 4 図 古代土器分類図	24	第 10 図 赤鉛砂山遺跡の木材	39
第 5 図 赤鉛砂山遺跡自然科学分析サンプル採取地点	32	第 11 図 赤鉛砂山遺跡における暦年較正年代グラフ（参考）	41
第 6 図 赤鉛砂山遺跡の植物珪酸体分析結果	34		

## 表目次

第 1 表 赤鉛砂山遺跡調査履歴	2	第 6 表 赤鉛砂山遺跡における木材同定結果	39
第 2 表 赤鉛砂山遺跡周辺の古代遺跡一覧表	7	第 7 表 赤鉛砂山遺跡における放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	41
第 3 表 赤鉛砂山遺跡自然科学分析一覧表	32	第 8 表 赤鉛砂山遺跡における放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)	41
第 4 表 赤鉛砂山遺跡の植物珪酸体分析結果	34		
第 5 表 赤鉛砂山遺跡における花粉分析結果	37		

## 別表目次

別表 1 造構計測表	50	別表 4 石製品観察表	54
別表 2 据立柱建物計測表	50	別表 5 木製品観察表	54
別表 3 土器・陶磁器観察表	51		

## 図版目次

図版 1 周辺の旧地形図 (1/50,000)	1	図版 16 1 区 基本崩序、SE1、Pit47 実測図 (1/40)	1
図版 2 赤鉛砂山遺跡位置図 (1/25,000)	1	図版 17 1 区 SK4・49・50、SX2、SD37、Pit20・36 実測図 (1/40)	1
図版 3 赤鉛砂山遺跡周辺の地形分類図と古代の遺跡	1	図版 18 1 区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18)、 Pit7～9・14・21～26 実測図 (1/40)	1
図版 4 赤鉛砂山遺跡と周辺の遺跡 (1/10,000)	1	図版 19 1 区 Pit27～29・31～35・38～46・48・ 51～54 実測図 (1/40)	1
図版 5 赤鉛砂山遺跡調査区 (1/10,000)	1	図版 20 1 区 SB56 (Ph10-13-19-30) 実測図 (1/40)	1
図版 6 赤鉛砂山遺跡調査区 (1/5,000)	1	図版 21 2 区 基本崩序、SX1、Pit2 実測図 (1/40)	1
図版 7 赤鉛砂山遺跡調査区とグリッド設定図 (1) (1/10,000)	1	図版 22 出土遺物 1 土器・陶磁器 1	1
図版 8 赤鉛砂山遺跡調査区とグリッド設定図 (2) (1/5,000)	1	図版 23 出土遺物 2 土器・陶磁器 2	1
図版 9 赤鉛砂山遺跡調査区とグリッド設定図 (3) (1/2,500)	1	図版 24 出土遺物 3 土器・陶磁器 3	1
図版 10 造構全体図 (1/400)	1	図版 25 出土遺物 4 土器・陶磁器 4	1
図版 11 造構全体図 (1/250)	1	図版 26 出土遺物 5 土器・陶磁器 5	1
図版 12 造構平面部分図 1 (1/80)	1	図版 27 出土遺物 6 石製品 1	1
図版 13 造構平面部分図 2 (1/80)	1	図版 28 出土遺物 7 石製品 2・木製品	1
図版 14 造構平面部分図 3 (1/80)	1		
図版 15 造構平面部分図 4 (1/80)、小グリッド別包含層 出土土器重量分布図 (1/400)	1		

## 写真図版目次

写真図版 1	赤館砂山遺跡周辺空中写真	1 区 SD37 完掘状況（南東から）
写真図版 2	赤館砂山遺跡遠景（東から）	1 区 SB56 完掘状況（北東から）
	1・2 区 空中写真 1（北東から）	写真図版 9 1 区 Pit10 (SB56) 完掘状況（北西から）
写真図版 3	空中写真 2（北西から）	1 区 Pit13 (SB56) 土層断面（南東から）
	1・2 区 空中写真 3（南から）	1 区 Pit13 (SB56) 完掘状況（南東から）
写真図版 4	1 区 調査前現況（西から）	1 区 Pit19 (SB56) 土層断面（北西から）
	1 区 調査前現況（東から）	1 区 Pit19 (SB56) 完掘状況（北西から）
	1 区 基本層序 A（東から）	1 区 Pit30 (SB56) 完掘状況（南東から）
	1 区 基本層序 B（南から）	1 区 Pit7 土層断面（北から）
	1 区 基本層序 C（南から）	写真図版 10 1 区 Pit7 完掘状況（北西から）
	1 区 基本層序 D（南から）	1 区 Pit8 土層断面（北東から）
	1 区 基本層序 E（南から）	1 区 Pit8 完掘状況（北東から）
	1 区 基本層序 F（南から）	1 区 Pit9 土層断面（北から）
写真図版 5	1 区 基本層序 G（南から）	1 区 Pit9 完掘状況（北から）
	1 区 基本層序 H（南から）	1 区 Pit14 土層断面（西から）
	1 区 SE1 土層断面（西から）	1 区 Pit31 土層断面（西から）
	1 区 SE1 完掘状況（西から）	1 区 Pit32 土層断面（西から）
	1 区 SK4 土層断面（南東から）	1 区 Pit14・31・32 完掘状況（西から）
	1 区 SK4・Pit30 完掘状況（南東から）	写真図版 11 1 区 Pit21 土層断面（北東から）
	1 区 SK49 土層断面（東から）	1 区 Pit21 完掘状況（北東から）
写真図版 6	1 区 SK49 完掘状況（東から）	1 区 Pit22 土層断面（南東から）
	1 区 SK50 土層断面（南から）	1 区 Pit23 土層断面（南東から）
	1 区 SK50 完掘状況（南から）	1 区 Pit22・23 完掘状況（南から）
	1 区 SX2・Pit20 土層断面（東から）	1 区 Pit24 土層断面（北東から）
	1 区 SX2・Pit26 土層断面・完掘状況（南から）	1 区 Pit24 完掘状況（北東から）
	1 区 SX2・Pit20 完掘状況（東から）	1 区 Pit25・26 土層断面（南東から）
	1 区 SD3 土層断面（北西から）	写真図版 12 1 区 Pit25・26 完掘状況（南東から）
	1 区 SD16 土層断面（北西から）	1 区 Pit27・28 土層断面（南東から）
	1 区 SD5・6 土層断面（北西から）	1 区 Pit29 土層断面（南東から）
写真図版 7	1 区 SD5・16 土層断面（南から）	1 区 Pit27～29 完掘状況（南東から）
	1 区 SD11 土層断面（北西から）	1 区 Pit33 土層断面（西から）
	1 区 SD6・11 土層断面（南から）	1 区 Pit33 完掘状況（西から）
	1 区 SD12 土層断面（北西から）	1 区 Pit34 土層断面（東から）
	1 区 SD15 土層断面（北西から）	1 区 Pit34 完掘状況（東から）
	1 区 SD12・15 土層断面（南から）	写真図版 13 1 区 Pit35 土層断面（東から）
	1 区 SD17 土層断面（北西から）	1 区 Pit35 完掘状況（東から）
	1 区 SD18 土層断面（北西から）	1 区 Pit38 土層断面（東から）
写真図版 8	1 区 SD17・18 土層断面（南から）	1 区 Pit38 完掘状況（東から）
	1 区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況（南西から）	1 区 Pit39 土層断面（北から）
	1 区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況（北西から）	1 区 Pit39 完掘状況（北から）
	1 区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況（南から）	1 区 Pit40 土層断面（東から）
	1 区 SD37 土層断面 A（南から）	1 区 Pit40 完掘状況（東から）
	1 区 SD37 土層断面 B（南東から）	写真図版 14 1 区 Pit41 土層断面（東から）
		1 区 Pit41 完掘状況（東から）
		1 区 Pit42 土層断面（東から）
		1 区 Pit42 完掘状況（東から）
		1 区 Pit43 土層断面（東から）

	1区 Pit43 完掘状況（東から）	2区 調査前現況（西から）
	1区 Pit44・45 土層断面（南東から）	2区 基本層序 A（南から）
	1区 Pit44・45 完掘状況（南東から）	2区 基本層序 B（東から）
写真図版 15	1区 Pit46 土層断面（東から）	2区 基本層序 C（西から）
	1区 Pit46 完掘状況（東から）	2区 SX1 土層断面（西から）
	1区 Pit47 土層断面・完掘状況（南から）	2区 SX1 土層断面（南から）
	1区 Pit48 土層断面（南から）	2区 SX1 完掘状況（南から）
	1区 Pit48 完掘状況（南から）	写真図版 19 2区 Pit2 土層断面（南から）
	1区 Pit51 土層断面（南から）	2区 Pit2 完掘状況（南から）
	1区 Pit51 完掘状況（南から）	2区 完掘状況（北から）
	1区 Pit52 根検出状況（北から）	2区 完掘状況（南西から）
写真図版 16	1区 Pit52 土層断面（北から）	2区 完掘状況（西から）
	1区 Pit52 完掘状況 1（北から）	写真図版 20 出土遺物 1 土器・陶磁器 1
	1区 Pit52 完掘状況 2（北から）	写真図版 21 出土遺物 2 土器・陶磁器 2
	1区 Pit53 土層断面（北から）	写真図版 22 出土遺物 3 土器・陶磁器 3
	1区 Pit53 完掘状況（北から）	写真図版 23 出土遺物 4 土器・陶磁器 4
	1区 Pit54 土層断面（南から）	写真図版 24 出土遺物 5 土器・陶磁器 5
	1区 Pit54 完掘状況（南から）	写真図版 25 出土遺物 6 土器・陶磁器 6
	1区 木製品出土状況（北から）	写真図版 26 出土遺物 7 土器・陶磁器 7
写真図版 17	1区 完掘状況（東から）	写真図版 27 出土遺物 8 土器・陶磁器 8、石製品 1
	1区 完掘状況（北が上）	写真図版 28 出土遺物 9 石製品 2
写真図版 18	2区 調査前現況（東から）	写真図版 29 出土遺物 10 木製品

# 第Ⅰ章 序 章

## 第1節 遺跡概観

赤鎧砂山遺跡は、新潟市西蒲区（旧巻町）赤鎧字砂山 331-3番地ほかに所在する。平成28年度に新潟市教育委員会（新潟市歴史文化課（以下、市歴史文化課）が補助執行）が行った試掘調査により、古代の遺構・遺物が検出され遺跡として周知化された。

当該地は越後平野の西にあたり、西を西川、東側を旧鎧潟に流入する飛落川に挟まれた沖積地内の自然堤防上に所在する。西にそびえる角田山東麓からは約4kmの距離にあり、遺跡範囲はおよそ南北100m、東西250mに広がる。現地の標高は4～5mで、現況は水田及び農道である。調査地の北東約2kmには、昭和40年代初頭まで鎧潟が広がっていた。鎧潟は、昭和30年に農林省金沢農地事務局干拓事業所が旧巻町に設置されて干拓事業に着手し、同41年に潟面干拓を終了して姿を消している。

周辺では近年、複数の発掘調査が行われており、8世紀前半の新道遺跡（相田2015）、9世紀代の峰岡城山遺跡（立木・伊比ほか2013）、8世紀後半から9世紀前半の集落遺跡である峰岡上町遺跡（前山ほか2015）、7世紀後半から8世紀の島瀬瀬遺跡（遠藤・臨本ほか2016）、8世紀前半と9世紀後半を主体とする集落跡とされる下新田遺跡（黒田ほか2015）、平安時代の莊園関連と考えられる林付遺跡（相田ほか2012）などの調査成果がある。また、旧鎧潟西岸に位置する大島橋遺跡（山口・前山1984）では7世紀代の遺物が出土しており、飛鳥時代から平安時代にかけての遺跡が自然堤防上に点々と分布している。

## 第2節 発掘調査に至る経緯（第1表）

平成27年度に、新潟市西蒲区赤鎧地内における商業施設建設（仮称「巻ショッピングセンター」）の計画が株式会社原信より市歴史文化課に知らされた。市歴史文化課は株式会社原信と協議を重ね、現況が水田のため、平成28年度の水田稲刈後に約2.6haを対象とした試掘調査を行うことで合意した。試掘調査の依頼（平成28年5月12日付「新潟市取扱平成28年5月12日付新歴B第41号」）があり、それを受け平成28年9月26日から10月7日まで試掘調査（着手届 平成28年9月23日付新歴B第41号の2）を実施した（第1次調査）。調査の結果（終了報告 平成28年11月2日付新歴B第41号の3）、36か所のトレンチのうち18カ所で土師器・須恵器・珠洲焼・石製品・骨片などの遺物が出土し、溝・井戸・ピット・性格不明遺構が検出された。この結果から、「赤鎧砂山遺跡」として新遺跡の発見届を提出した（平成28年11月2日付新歴B第41号の7）。

その後、今回の商業施設計画の隣地で開発計画があり、試掘・確認調査を実施した（第2・3次調査）。その結果、第1次調査区の西側に遺跡範囲が広がり、南北100m、東西250mにわたる遺跡範囲が現時点で確定した（遺跡範囲の変更 平成28年12月28日付新歴B第225号の5）。

平成29年2月には商業施設建設に伴う工事のうち、集水桿を2か所に設置する工事内容が明らかになり、追加の確認調査（着手届 平成29年2月27日付新歴B第41号の18）を行った（第4次調査）。その結果（終了報告 平成29年3月21日付新歴B第41号の20）、2か所のトレンチのうち1か所で古代の土師器が1点出土した。

本発掘調査は、第1次調査の結果を受け、平成28年10月～12月に断続的に市歴史文化課と株式会社原信が協議を行い、平成29年度に調査を行うことが決定した。協議結果を基に株式会社原信より新潟市教育委員会教育長あてに、文化財保護法93条の届出（平成28年12月16日付）が提出された。これを受け、新潟市教育

委員会教育長から株式会社原信あてに、①市道巻1-307号線拡幅部（含　用水路）②貯水槽設置部を「事前に記録保存のため本発掘調査を実施する」旨の文化財保護法93条の通知文（平成29年1月4日付新歴B41号の12）が通知された。その他の工事部分については工事立会・慎重工事で対応とした。平成29年1月12日付で株式会社原信より本発掘調査依頼が提出された。この段階で工事箇所・工程等の具体化が未定のため、本発掘調査面積は未定とした。平成29年度に入り工事計画の具体化に伴い、本発掘調査面積は、市道巻1-307号線拡幅部分と貯水槽設置部分の約320m<sup>2</sup>と決定した。合意内容は「新潟市西蒲区赤鎧字砂山331-3ほか地内の店舗建設事業に伴う埋蔵文化財包蔵地（赤鎧砂山遺跡）の取扱いに関する協定書」として双方で締結（平成29年5月8日付）した。これらを受け、平成29年6月1日付新歴F第10号の4で新潟県教育委員会教育長あてに文化財保護法第99条の規定による埋蔵文化財の発掘通知を提出して本発掘調査を実施した（第5次調査）。

第1表 赤鎧砂山遺跡調査履歴

通算 調査 回数	西葉施設 設置に伴う発 掘調査回数	調査年次	調査 種別	調査原因	調査 主体	担当	調査面積 (1)は対象面積	トレンチ No.	文献	新潟市 調査番号	備考
1	1	H28(2016)年 9.26～10.7	試掘 調査	商業施設 建設	新潟市 新潟市歴史文化課 諫山えりか		324af (26,336.28af)	1～36T		2016186	古代の遺跡である新道遺跡（新潟 市道諫山番2丁7561）の南側約600m にある。試掘調査の結果、古代・中世の遺構。遺物が検出され、新 道跡として登録された。
2		H28(2016)年 12.19～ 12.21	試掘 調査	店舗建設	新潟市 新潟市歴史文化課 諫山えりか		49af (3,714m <sup>2</sup> )	1～8T		2016216	第1次調査地に隣接する別店舗建 設に伴い、則国道16号線の西側 で試掘調査を行った。その結果、 調査区域外のAT2より性別不明遺構 が確認された。これにより遺跡範 囲が内側に拡大した。
3		H29(2017)年 1.25	確認 調査	店舗建設	新潟市 新潟市歴史文化課 諫山えりか		4af (3,714m <sup>2</sup> )	9T		2016240	第2次調査地AT内側に再発見のた め9Tを追加調査した。その結果、 遺構は確認されず、確認調査の 範囲は拡大しないことが確認され た。
4	2	H29(2017)年 2.28	確認 調査	商業施設 建設	新潟市 新潟市歴史文化課 諫山えりか		8af (26,336.28af)	追加 1・2T		2016254	第1次調査地の追加確認調査で ある。調査地の中心部に2か所のト レンチを設けた。結果、追加2Tか ら古代の土師器が出土した。
5	3	H29(2017)年 6.1～7.31	本発 掘調 査	商業施設 建設	新潟市 立木宏明・通藤恭輔		240.64af (26,336.28af)	[澤野2018] [本音]		2017001	



調査風景



現地説明会

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

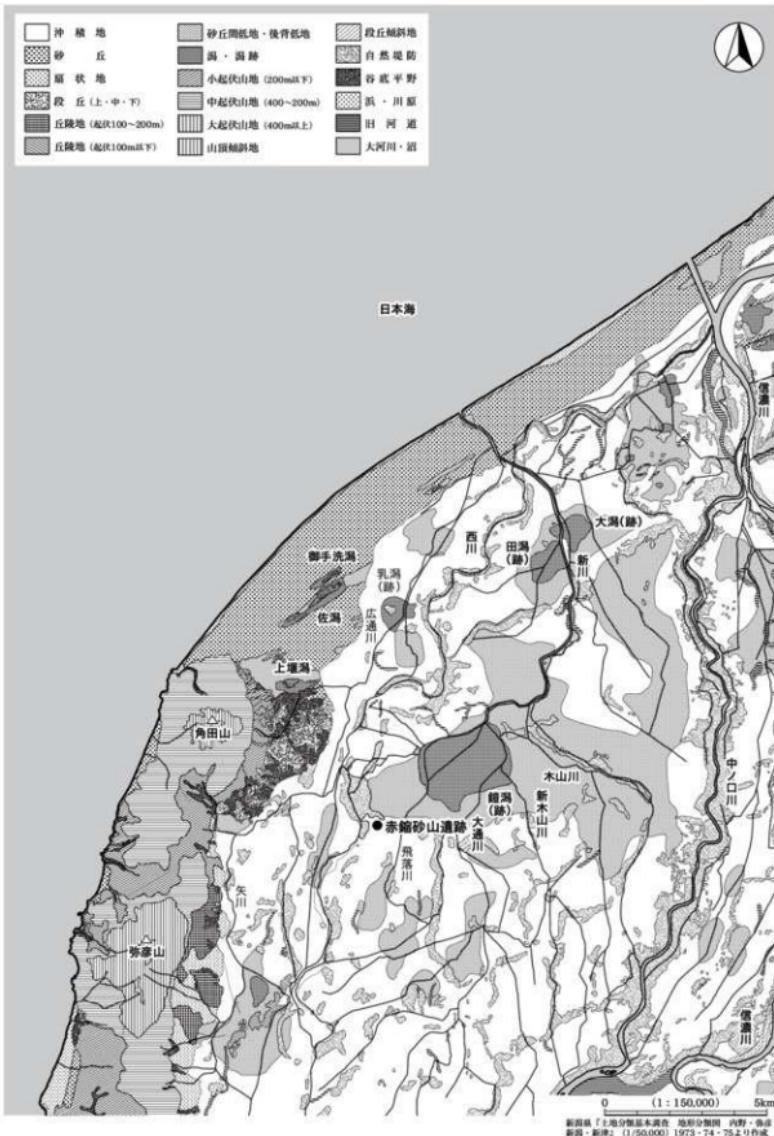
### 第1節 遺跡の位置と地理的環境（第1図、図版3）

新潟市は越後平野のほぼ中央に位置している。越後平野は海岸部の砂丘地帯、南西側の角田・弥彦山塊、南東側の新津丘陵に囲まれており、阿賀野川・信濃川などの大小の河川によって形成された沖積平野である。越後平野東側にある信濃川・阿賀野川の蛇行帯や、中央部にある信濃川支流の中之口川の蛇行帯には、自然堤防が発達しており、自然堤防に囲まれた後背湿地が広く分布する。これらの後背湿地には低い部分に湛水して大潟・田潟・鍋潟・田ノ潟・乳ノ潟・六字潟・佐潟・御手洗潟などの潟湖を形成した。内陸には日本海の砂丘列が沖積世以降に形成されており、内陸より新砂丘I・II・IIIに大別され、さらにそれぞれ4列・4列・2列に細分されている（新潟古砂丘グループ 1974）。

今回調査した赤館砂山遺跡は、越後平野中央部にある旧鍋潟の南西に広がる西川と飛落川の間に形成された微高地に、島状に広がる自然堤防上に位置している。鍋潟は、干拓前の1960年代はおよそ南北2.4km、東西3km、面積は約270haであったが、流入する河川が飛落川・新木山川・大通川の三川で、流出する河川が新川のみであったため、大雨の度に湛水して周囲に水害をもたらしたといわれている。その起源としては、平安時代中期の康平三（1060）年に作られたといわれている『康平絵図』にすでに「寄ふ潟」として記されており、この名称が鍋潟の古名である可能性が指摘されている（古俣1989）。また、鍋潟という名称は、寛延三（1750）年の『鍋八幡宮御由緒調査書』によれば、平安時代中頃の康平五（1062）年に源義家が鍋を遺跡から約4km北東に所在する鍋八幡宮に奉納した、という伝説に由来するものである。旧西川町の大島橋遺跡（山口・前山1984）の土器が潟湖内より出土していることから、7世紀後半には潟が十分に成立していない可能性がある。また、文化十二（1815）年に阿賀野市水原町の小田島允武によって著わされた『越後野志』によれば、「巻ノ東ニ在、古ヘ萱野ナリシガ、文祿以前洪水ノ時、三方ヨリ河水流入テ潟トナル」とあり、文祿年間（1593～1596年）以前の洪水の際に三方から水が押し寄せて、一夜にして成立したという説が紹介されているが、詳細は不明である。このように、度々水害をもたらした鍋潟であったが、江戸時代後期の文政三（1820）年に、「三潟悪水抜き」といわれる大潟・田潟・鍋潟をつなぐ新川を開削して日本海に流す事業が行われ、これ以降水害は激減し周囲の新田開発が進んだといわれている（斎藤1967・1968）。また、鍋潟は昭和30年代から10年の歳月をかけて国営事業として干拓工事が行われ、現在は水田となっている。遺跡周辺の景観は、昭和20～30年代に行われた耕地整理事業によって形成されたものである。現在は一面の田として利用されているが、1948年の米軍の写真などから微高地上に点々と畠が確認できる。また、今回の調査区と東西に並行する市道1・307号線の旧道沿いには、デワノトネリコ等を樹種に用いた、秋に稲わらの乾燥を行う「はさ木並木」が確認できる。

### 第2節 周辺の遺跡（第2図、第2表、図版3・4）

新潟市で周知化されている遺跡の数は743か所である（平成29年3月31日現在）。時代別の遺跡の分布は、旧石器時代では丘陵部、縄文時代には丘陵と縁辺の段丘を中心に分布し、砂丘上・沖積地にも散見される。弥生時代の遺跡分布も縄文時代のあり方と類似し、丘陵部と砂丘部に集中する。古墳時代になると沖積地に遺跡が進出し始め、奈良・平安時代には沖積地の遺跡が激増する。これは、水田を初めとした開発が広く沖積地に及んだことの表れである。第2図には赤館砂山遺跡周辺の古代遺跡の分布を示した。ここでは第2図の範囲を中心に、



第1図 赤鉛砂山遺跡周辺の地形分類図

縄文時代からの遺跡分布状況などについて概観する。

旧石器・縄文時代は前述のように、角田・弥彦山麓を中心に砂丘列に沿って分布する。旧石器時代の遺跡としては角田山南麓に位置するケカチ堂遺跡（54）で尖頭器・石刃などが採集されている。縄文時代の遺跡の分布は弥彦・角田山麓に集中しており、縄文時代において活動領域の中心地であったことがうかがえる。丘陵上では草創期・早期から遺跡が確認されるが、前期には定住集落が成立し、南赤坂遺跡（47）・豊原遺跡（60）といった長期継続型集落が営まれるようになる。遺跡数は中期がピークで、以降減少傾向となる。砂丘地では前期の段階で角田山北東側の砂丘列上に布目遺跡等が点在し、中期には定口遺跡（25）・イタチバラ遺跡（27）などの小規模な遺跡が分布する。沖積地での遺跡の確認例はわずかではあるが、中ノ口川左岸沿いの味方排水機場遺跡では、排水機場建設工事の際に縄文時代後期の土器が地下約19m地点から出土しており、越後平野の地盤沈降を示す事例として注目されている〔寺崎・高瀬ほか2000〕。

弥生時代の遺跡は少なく、縄文時代と同様に丘陵部と砂丘を中心に分布する。丘陵上では角田山東南麓の御井戸A・御井戸B遺跡（90・91）、北東麓の台地上に立地する大沢遺跡が確認され、砂丘上では四十石遺跡（2）・さかしの遺跡（38）などが分布する。このほか、第2回範囲外ではあるが、四十石遺跡の北東側に広がる内陸砂丘に立地する六地山遺跡・緒立遺跡なども主要な遺跡として挙げられる。

古墳時代には遺跡数はやや増加する。分布の中心は角田山麓丘陵地帯にあり、南麓の矢川流域に山谷古墳・東麓に菖蒲塚古墳が造営され、越後平野周辺における前期古墳の中核的な地域をなしている。集落遺跡としては丘陵部の御井戸A・御井戸B遺跡（90・91）・南赤坂遺跡（47）、砂丘地の四十石遺跡（2）・緒立遺跡が主要な遺跡である。沖積地では浦田遺跡（36）が確認できる。ただ、これらの遺跡はいずれも古墳時代前期が主体で、中期以降の古墳・群集墳は確認されていない。また、集落の動向も不明確な状況である。角田山麓に位置する御井戸B遺跡（91）でも古墳時代後期で集落が途絶える状況が推測されている〔前山・相田2004〕。

古代に入ると、遺跡の立地は丘陵部に須恵器窯跡や製鉄遺跡などの生産遺跡が集中し、砂丘上や沖積地に集落遺跡が広く分布するようになる。丘陵上の生産遺跡としては、須恵器窯跡の前平野須恵器窯跡（44）・重稻場窯跡（51）、製鉄遺跡の伏部道下遺跡（46）が確認されている。丘陵部には集落遺跡も分布しており、炉を持たない小規模な竪穴住居とともに煮炊具主体の土器群が出土した南赤坂遺跡（47）〔前山・相田2002〕や、3棟の掘立柱建物と複数の焼土遺構が確認された峰岡上町遺跡（58）〔前山ほか2015〕などがある。

砂丘地の遺跡としては四十石遺跡（2）が挙げられる。総柱建物を含む居住施設とともに帶留金具や「津」と記された墨書き土器が出土し、内水面交通の要所として機能した拠点的な集落跡と考えられている〔渡邊・奈良ほか2012〕。また、四十石遺跡から北東約8kmにある的場遺跡・緒立C遺跡は官街闇連遺跡と位置付けられており、漁撈・水産加工基地とその管理・運営の場所と指摘されている〔坂井1996・2008ほか〕。

一方、赤輪砂山遺跡周辺の沖積地では、大島橋遺跡（79）や燕市大橋遺跡（122）などの遺跡で飛鳥時代の遺物が確認されており、早い段階からの低地利用が窺える。大島橋遺跡（79）は昭和35年の鍬渕干拓に伴う飛落川の付け替え工事の際に発見された遺跡で、地表面下約0.6mで須恵器・土師器、その下約1.3mで土師器のみが出土したと報告されており〔山口・前山1984〕、7世紀の飛鳥時代の集落と考えられる。奈良時代になると遺跡数は増加し、島澤瀬遺跡（82）や茶院A遺跡（86）・新道遺跡（94）などが出現する。島澤瀬遺跡は比較的安定した自然堤防上の沖積微高地に所在し、明確な住居跡等は検出されなかったが、8世紀の須恵器・土師器が出土した。確認面が0.2～0.3mと比較的浅く、遺跡形成時からの地形変化が少なかったことが窺える遺跡である〔遠藤・脇本ほか2016〕。新道遺跡は平成25年度の試掘調査で発見された遺跡で、地表下約2mで8世紀前半の土師器が一定量出土している〔相田2015〕。このほかの奈良時代の遺跡としては、第2回範囲外ではあるが、島澤瀬遺跡から南東約3kmの地点に下新田遺跡・仲歩切遺跡が分布している。下新田遺跡では奈良時代を主体とした土器のほか、円筒型土製品や『和名類聚抄』に記載された郷名と一致する「日置」と記された墨書き土器が出土している〔龍田ほか2015〕。また、仲歩切遺跡は平成26年度に実施した確認調査で8世紀を主体とする土器のほか、



第2図 赤館砂山道跡周辺の古代遺跡分布図

焼骨埋納土坑や柱根の残る柱穴が検出されている〔龍田 2016〕。平安時代には遺跡はさらに増加する。下新田遺跡のように奈良時代から継続する遺跡のほか、林付遺跡（83）・高畠遺跡（77）・長所天神遺跡（98）や、燕市中組遺跡（109）・江添 C 遺跡（133）など、新たに成立する遺跡も多い。林付遺跡（83）では、9世紀を主体とする土器群に、石帶や椎状錐、「川合（川井）」・「館」などの墨書き土器、2間×6間で2面廂を持つ大規模な掘立柱建物跡などが見つかっており、中核遺跡の一つであることが判明している〔相田ほか 2012〕。また、燕市に位置する中組遺跡（109）では縄目陶器や「池津」と記された墨書き土器が出土しており、拠点的な集落であった可能性が高い〔春日 2000〕。平安時代の沖積地ではこのような中核遺跡の周辺に小規模な遺跡が点在している様相が想定される。

第2表 赤鎧砂山遺跡周辺の古代遺跡一覧表

No.	名 称	時 代	No.	名 称	時 代	No.	名 称	時 代	No.	名 称	時 代
1	赤鎧町	平~室	45	鶴城跡	平~中世	89	日高東	平	131	日高東	平~中世・近世
2	西ノ山	鶴・古墳・古・平	46	伏見道下	平	90	御井戸A	古墳・古墳・古・中世	132	御井戸	平~中世
3	大字	鶴・古墳	48	伏見道上	平	91	御井戸B	古墳・古墳・古・中世	133	御井戸	平~中世・近世
4	七谷子C	鶴・古	49	小堀	平	92	日向古墳跡跡	平	134	5人塚	平~中世・近世
5	本郷	鶴・古・平	50	天王C	平	93	新作	鶴・古・古墳	135	天城	平
6	弓削	鶴・古	51	赤堀城跡跡	平	94	新作	金	136	木戸川	平
7	前川	鶴・古墳・古~室~江	52	ヤマシロ	鶴・古・羅	95	高畠	金	137	笠置	平
8	弓削町	鶴・古代	53	大瀬崎	古代	96	高畠	金	138	木戸川	平
9	ソラズA	平	54	大瀬崎	古代	97	高畠	金	139	木戸川	平
10	弓削町B	平	55	大瀬崎	古代	98	高畠	金	140	木戸川	平~室
11	赤堀寺	平	56	大瀬崎	古代	99	高畠	金	141	木戸川	平~室
12	瓦屋日	平	57	高畠	平	100	御田	平	142	瓦屋神	平
13	小坂神明社	平	58	高畠上町	鶴・古代	101	御田東	平・羅	143	野原東大寺	平~中世
14	鶴城跡	平	59	七戸町	鶴・平	102	西原	平	144	万口	平
15	上白内B	平	60	野原	鶴・平	103	西原	平	145	山手	平~中世・近世
16	上白内A	平	61	御田	平	104	五ヶ所	金	146	保久	平
17	大字	鶴・古	62	御田	平	105	御田	金	147	大木	平
18	人跡	鶴・古代・中世	63	御田今野	平	106	御田B	平	148	御田	平~中世
19	北郷B	平・中世	64	高畠	鶴・平	107	御田A	平	149	御田	平
20	北郷A	鶴・平	65	森久入	古代	108	野原野	平・室・江	150	神水	平
21	南付	鶴・平~江	66	自船	平	109	中城	平	151	野舟	平~中世
22	解付	鶴・平	67	御城	平	110	中城	平	152	吉見	平
23	清水木	平	68	天城	平	111	御城	平	153	金城	古代・近世
24	我那	鶴・古・室	69	天城	平	112	御城	平	154	御城	古代・近世
25	大字	鶴・平	70	天城	平	113	御田	平	155	御城	平~室
26	長堀	鶴・古	71	天城	平	114	御城	平	156	御城	平
27	イタチバタ	鶴・平	72	天城	平	115	御城	平	157	御田A	古代
28	梅木	鶴・平	73	おおやま	古代	116	万弓寺	平・羅	158	万弓寺	平
29	代代河原	平	74	白石神社	平	117	御城	平	159	中城	平・中世
30	人跡	平	75	北郷荒田	平	118	御城	平	160	宇野	平
31	山田河原	平・羅	76	北郷荒田	平	119	御城	平	161	中城	平
32	人跡	鶴・古	77	御城	平	120	御城	平	162	御城	平
33	人跡	鶴・中世	78	なみき	平・金	121	御城	平	163	御城	平
34	町歩	平	79	大瀬崎	鶴・金	122	大瀬	古墳・羅~平・中世	164	天水	平
35	中平	鶴・金	80	西ノ瀬	平	123	御城	古代	165	御城	平
36	御田	古墳・平	81	御田	平	124	御城	平・中世	166	御城	古代
37	酒立	鶴・平	82	鳥居	古墳・古・平	125	御城	平・中世	167	中城	平・中世
38	さきの	鶴・平	83	鳥居	平	126	御城	平	168	天城	平・中世
39	解付	鶴・平	84	御城	平	127	御城	平	169	天城	古代
40	解付	鶴・平	85	元六	平・羅	128	御城	平	170	御城	古代
41	弓削A	平	86	御城A	平・江	129	北郷山	平・羅	171	板谷山	鶴・古代・中世
42	弓削	平	87	御城	平	130	北郷山	平・中世・近世			
43	丸山	平	88	桂丸	平・江						
44	白石御城跡	平									

赤鎧砂山遺跡周辺の沖積地では、近年、調査例が増加し、越後平野において確認例が乏しい飛鳥時代から奈良時代の遺跡が比較的多く分布することがわかつてき。遺跡の多くは埋没した自然堤防上に立地しており、未発見の遺跡が地中深くに存在する可能性は高く、今後、新たな遺跡の発見が期待される。

中世の遺跡は山麓の台地、砂丘上、沖積平野の微高地に分布しており、集落跡や城館跡、塚や墳墓跡などが確認されている。砂丘上の遺跡としては前田遺跡(7)・大蔵遺跡(18)がある。大蔵遺跡(18)では12世紀末から16世紀末までの遺物が出土しているほか、墓域が確認されている。丘陵上には山城が主に分布しており、角田山東麓支丘陵端部に上城跡と下城跡がある。また、峰岡城山遺跡(45)が下城跡と同一丘陵にあり、中世の遺物が微量であるが出土している【立木・伊比(ほか2013)】。一方、沖積地の自然堤防上には集落跡や城館跡が分布している。赤鎧砂山遺跡周辺では館ノ腰遺跡や和納館跡等がみられる。また、燕市(旧吉田町)の米納津地区周辺では天神堂城跡や小瀬訪前B遺跡(126)など、多くの遺跡が分布している。沖積地に立地する城館跡は前述の山城と連携していたものと思われる。

### 第3節 歴史的環境

律令以前、日本海側の地域は広く越國と称されていた。大化三(647)年に渟足権、翌年に磐舟権が相次いで設置され、漸次北方の整備が図られていたと考えられる。越後国は、当初これら二権の位置する阿賀野川以北の沼垂郡・岩船郡より北を指していたようである。越後国の領域の確定は、大宝二(702)年に越中国4郡(頸城・古志・魚沼・蒲原)を割いて越後国に編入『続日本紀』し、和銅五(712)年にそれまで越後国に属していた出羽郡を分割して出羽国を建国したことによる。その後、天平十五(743)年に佐渡国を越後国に合併し、ほぼ現在の新潟県と同一の領域となった。しかし、天平勝宝四(752)年には、渤海朝貢使節の来島により、朝廷による直接把握を目的として佐渡国は復置されている。天平宝字五(761)年に造営が始まった佐渡国分寺には、小泊

窯で製作された瓦が大量に運ばれており、古代越後国に膨大な須恵器の供給をもたらす小泊窯操業の契機としてとらえられよう。

角田山麓を含む地域は、古代の蒲原郡に属していた。現在の北蒲原郡を除いた三条市から阿賀野川までの範囲に比定される古代の蒲原郡には、承平年間（931～938）に撰進された『和名類聚抄』に桜井・勇礼・青海・小伏・日置の5郷が見られる。角田山麓は日置郷と推定されている説がある（桑原1994）。本遺跡から南東に6.5kmに所在する下新田遺跡（農田ほか2015）から「日置」と書かれた墨書土器が出土しており、日置郷がこの周辺にあつた可能性がある。

古代の蒲原郡には、宝亀十一（780）年の『西大寺資財流記帳』によって、鶴橋荘・槐田荘という荘園が施入されていた事が知られている。これらの西大寺領荘園は、神護景雲三（769）年の『越後国水田并墾田地帳』などから、8世紀中葉以降には確実に成立していたと考えられる。西大寺領荘園は早くに衰退したと推定されている。その理由として、東大寺領荘園に比べ野地の確保が遅れたために、開発や經營が困難な地域に占地せざるをえず、さらには支援者であった道鏡が失脚したためとの指摘がある（桑原前掲）。

角田山東麓の低台地上では須恵器生産が行われていた。重畠窯跡と前平野窯跡があり、両窯跡とも鉢渦干拓に伴う採土工事により壊滅している。採集された遺物から操業期間は8世紀後半から9世紀前半であり、窯の規模も小規模であったと考えられている（春日2000）。そのため生産量が少なく西蒲原全城に多くは供給されず、代わりに同じ蒲原郡に属する新津丘陵窯跡群と古志郡に属する西古志窯跡群からの流通が凌駕していたようである。しかしながらこれらの窯は佐渡小泊窯跡群からの供給量の激増により生産が衰退して行く。

前述の初期荘園は10世紀中頃には衰退し、中世においては、角田山麓一帯は寄進地系荘園である弥彦荘に含まれていたようである。弥彦荘の成立時期は明確ではないが、11世紀後半～12世紀後半に至る院政期であり、その期間内において初見資料の『大方広仏華嚴經』の奥書卷16と卷19に「大治四年」・「弥彦御庄下条」と記されており、弥彦荘が1129年（大治四年）以前に成立していた可能性が指摘されている。さらに「下条」が旧巻町付近との考察がなされている（桑原前掲）。

南北朝時代では、刈羽郡小国保から天神山城（旧岩室村）に本拠を移していた、南朝方の小国政光の支配下にあった。東麓の支丘陵先端部に位置する下城（竹野町）は、出土遺物から、隣接する上城とともに南北朝期の戦の砦であった可能性が高く、小国氏との関連性も示唆されているが（桑原前掲）。詳細は不明である。

14世紀前半の南北朝の動乱に際しては、弥彦荘付近での動向は不明であるが、蒲原津を軍事的に占拠し中・下越地方を制圧しようとした南朝軍と、阿賀野川を挟んで対峙した北朝軍との、蒲原津から新津丘陵周辺での攻防が「羽黒義成軍忠状写」に記されており、小国氏の活躍もみられる。この動乱を経て、越後国は守護上杉氏・守護代長尾氏により、室町幕府の統治下によって領國支配が推進されることとなる。

15世紀の弥彦荘についてはいくつかの史料が残る。『毛利安田氏文書』では、応永三三（1426）年守護上杉房朝より長尾景虎（邦景）に対し、弥彦荘の下条（旧巻町）と船越条（旧岩室村）を栗田の替地として、刈羽郡安田（柏崎市）を本拠とする毛利道元に打渡しが命じられている。また、『鰐川家古文書』の長禄三（1459）年12月の「高師長本領注文案」には、弥彦荘は高氏の本領であったが、実際は二本松（福島県）の畠山氏が支配していたとの記載がある。当時の蒲原郡代は山吉氏であり、さらに地元の小国氏の勢力下の可能性も考えられ、弥彦荘は様々な支配下に置かれていたと考えられる（桑原前掲、吉田町2000）。

16世紀になると守護上杉氏と守護代長尾氏の対立が激化し、越後国内での内乱が勃発するようになる。永正の乱では、永正四（1507）年9月7日に猿ヶ馬場（弥彦村）にて、永正六（1509）年6月2日には黒滝城（弥彦村）にて戦があり、弥彦・角田山塊周辺も戦場と化したようである（桑原前掲、吉田町前掲）。

「享禄・天文の乱」期（1530～1551）の当地の様相は明確でない。天文十九（1550）年には、蒲原郡などの国人たちを帰順させていた長尾景虎（上杉謙信）が越後国主となつたが、天正六（1578）年3月、上杉謙信が急逝すると、養子である景勝・景虎の間で後継地位をめぐる「御館の乱」がおこり、国内領主層の分裂をもたらした。

弥彦・角田山塊周辺は、景勝の阿賀野川以南制圧にとって重要な地となっていたようである。黒滝城（弥彦村）の山岸氏、天神山城（旧岩室村）の小国氏、木場城（旧黒崎町）の山吉氏らが景勝方につき、和納館（旧岩室村）等の景虎方の砦を落とし、天正八（1580）年三条城神余氏の落城を最後として景勝方が勝利した。この際、上城・下城（竹野町）が落城したという伝説が残っており、両城が当期まで存続し、しかも景虎方の砦であった可能性を示唆しているが、詳細は不明である〔桑原前掲、吉田町前掲〕。

御館の乱鎮定後、新発田重家が織田氏と組んで景勝と対抗する「新発田の乱」が起きる。その際、三条城主甘糟長重が景勝の側近である泉沢久秀にあてた書状（天正十二年3月16日）の中に、「真木之地」として旧巻町の地名が登場し、小国氏の支配下であったことが記されている〔『越佐史料』卷六〕。寛政元（1789）年5月の『御巡見様御案内手控帳』にも、巻館は小国氏家臣の西山左衛門が城主として居住していたという記載がある。慶長五（1600）年の『巻村内検地帳』によれば、館に接して町場が形成されており、館を中心として発展していくようである。天正十五（1587）年には羽柴氏と手を結んだ景勝は重家を討ち滅ぼした。新発田の乱平定後、景勝の命により小国実賴は大國と改め、『文禄三（1594）年定納員数目録』によれば、景勝家臣団の最上土層である「侍中」に大國氏と黒滝城の山岸氏の名が見られ、その功績が窺える。しかし、慶長三（1598）年に豊臣秀吉の命により越後國主上杉景勝が会津へ国替えさせられることとなり、諸代の家臣から地下の土豪まで隨從し、故郷の地を離れることとなった〔桑原前掲、吉田町前掲〕。

景勝の移封に伴い、堀秀治と配下の村上勝頼・溝口秀勝が入封した。秀治自身は春日山城を居城とし、村上頼勝を岩船郡本庄（村上市）に、溝口秀勝を新発田に置き下越後を統治させた。旧巻町周辺の統治は、上述の『巻村内検地帳』の検地が三条城に置かれた堀監物直政の配下の者により行われており、堀氏の統治下にあったことが分かる。関ヶ原の戦いの際に会津国境付近より起きた「越後一揆」が画期となり、堀氏は支配を確立し、兵農分離が推進されることとなった〔桑原前掲、吉田町前掲〕。

その後、旧巻町周辺は長岡藩に編入される。牧野忠成から明治廃藩まで存続する牧野氏長岡藩体制下においては、中世まで遡っていた治水事業・新田開発に力が注がれ、藩領の開発が進められた。特に鍛潟・田潟・大潟の治水による新川掘削工事は領内の庄屋等の力により推進され〔桑原前掲〕、現在でもその恩恵を授かっている。遺跡周辺の現景観の基礎はこの時期に固まつたものと推察できるが、治水が推進されても洪水などの水害は繰り返されており、その後の度重なる復旧を経て現景観が形成されたと考察されよう。

本遺跡の所属する赤館は、元和四（1618）年の長岡藩知行目録に「あかさひ村」とみえ、高491石9斗余りとある。安政五（1858）年の旧長岡城主牧野家領地七ヶ組村名・反別・個数一覧表に戸数75戸で長岡藩領とされることから、近世を通じて一貫して長岡藩領の村である。近代に入り、明治22（1889）年までは赤館村、同年の町村制施行により同村と近隣の潟頭村・河井村・柿島村・山島村新田が合併し潟南村となった。明治34（1901）年に赤館が含まれる潟南村と馬堀村・佐渡山村の一部と漆山村が合併し、戸数781戸、人口5,276人の漆山村となつた。現代に入り、昭和24（1949）年に巻村が町制を施行し巻町になった際に、漆山村の赤館を編入した。昭和30（1955）年には巻町が周辺の峰岡村、角田村、漆山村、松野尾村、浦浜村と合併した。巻町はその後、平成17（2005）年10月10日に新潟市に編入し、新潟市西区の一地域となり、現在にいたる。

## 第III章 調査の概要

### 第1節 試掘・確認調査（第3図、第1表、図版25・26・28）

当該地では商業施設建設に伴う試掘・確認調査を2回実施した（第1表 調査番号2016186・2016254）。トレチ配置図・土層柱状図は第3図に示した。調査はバックホウで表土から徐々に掘削した後、人力による精査を行い、遺構・遺物の有無と土層堆積状況を記録した。トレチの大きさは概ね $2.5 \times 3.0 \sim 4.0\text{m}$ である。

第1次調査は平成28年9月26日から10月7日の実質9日間行った。対象面積は約2.6haで、トレチは36か所設定した。調査の結果、現地表面下0.5～1.7mで黒褐色粘土層の遺物包含層相当層（VI層）が確認され、調査対象範囲の南側17か所のトレチで遺物が出土した。第3図には各トレチ出土の遺物を一覧にして示した。古代の土師器・須恵器を中心に、中世の珠洲焼や磁石などが出土している。主体となるのは8世紀の土師器煮炊具である。主な遺物については第V章第2節に詳細を記した。このほかに、3・13・20・24・29Tで出土した近世陶磁器についても参考資料として記載している（第V章第3節）。遺構は6か所のトレチで検出した。現地表下0.8～1.3mのVI層で確認されており、遺構確認面の標高は調査範囲の南西側で最も高くなっている。検出した遺構は井戸1基、溝状遺構1条、性格不明遺構2基、ピット2基である。以上の結果から、調査対象地の南側を新たに赤館砂山遺跡として周知化した。

第2次調査は第1次調査の追加調査として、平成29年2月28日に行った。集水樹設置予定地の2か所にトレチを設定した（第3図「追加1T」・「追加2T」）。調査の結果、遺物包含層相当層（VI層）の残存が認められ、追加2Tでは現地表下1.45mのVI層で古代の土師器が1点出土した。

以上の調査結果を踏まえ協議を行ったところ、当該地の南側に設置される貯水槽部分について本発掘調査を行い、それ以外の部分については工事立会・慎重工事で対応することとなった。また、当該地の開発に伴って市道の拡幅工事が行われることになっており、それが赤館砂山遺跡の範囲内であることから、この道路拡幅部分について、貯水槽範囲と合わせて記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

### 第2節 本発掘調査

#### A 調査方法

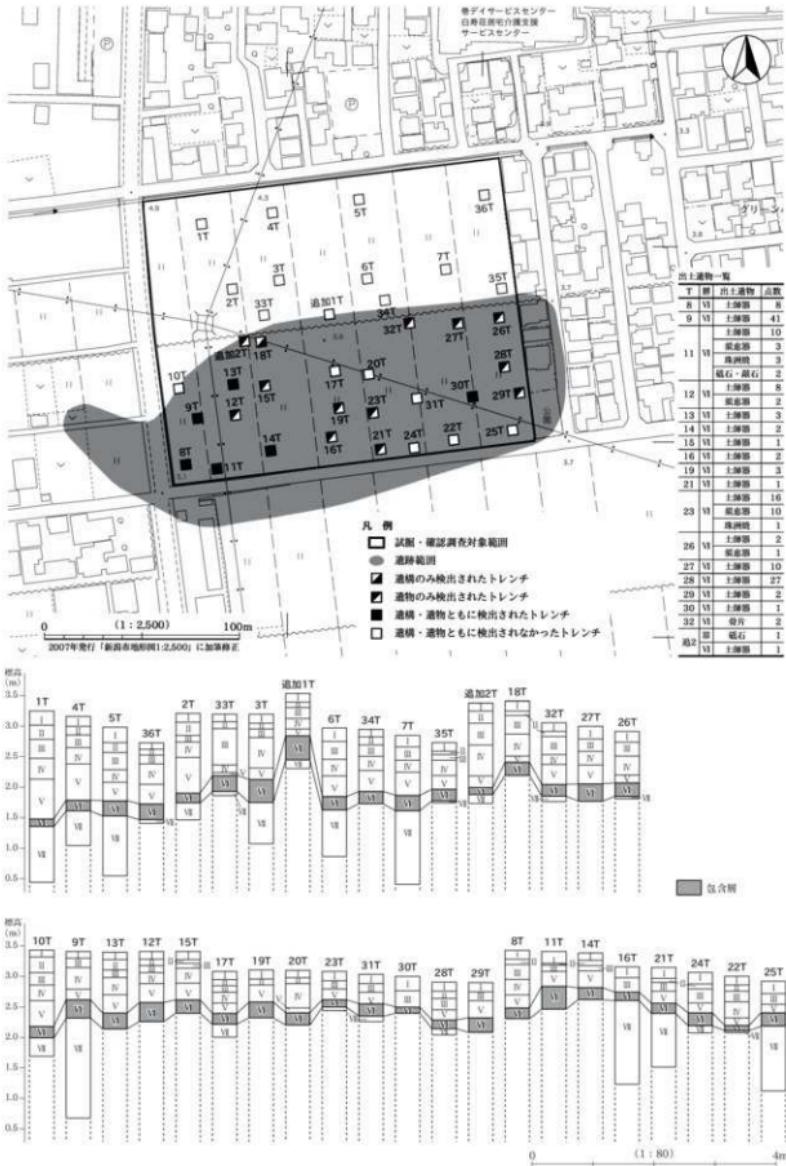
##### 1) 調査前の状況

調査範囲の大半は、水田耕作地中の農道として利用されていた。農道は、昭和23年の米軍撮影写真（写真図版1）によれば水田耕作地として利用されていた。現標高は4～5mである。

##### 2) グリッドの設定（図版7～9）

グリッドを設定するにあたっては、今後の赤館砂山遺跡周辺の開発事業の展開に備えて、今回の調査地点の約260m北西を調査基準点として1A-1A杭とした。1A-1A杭は、X座標：194,600.000、Y座標：34,400.000、緯度：北緯37°45'11.1102"、経度：東経138°55'09.0546"（測地成果2011）である。また、基準点に対して国土地理院の第VII系座標軸を用いて100mの方眼を組み、これを大々グリッドとした。

大々グリッドの名称は北西隅の1A-1A杭を起点として南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。この大々グリッドに10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドも大々グリッド同様の表示方法とした。大グリッドは、さらに2m方眼に区分して1から25の小グ



第3図 試掘・確認調査トレーン位置図、土層柱状図

リッドに分割し、「3B-2H1」のように呼称・表示した。基準杭の打設は測量業者に委託した。

発掘調査区の座標は次のとおりである。

#### 1区

3B-2H (X座標: 194,390.000, Y座標: 34,570.000, 緯度: 37° 45' 04.2215", 経度: 138° 53' 32.3052")

3B-2H 杭で長軸方向を座標北の0度0分0秒とし、座標北は真北に対して0度14分25秒東偏し、磁北は真北に対し8度10分西偏する。

#### 2区

3C-2D (X座標: 194,390.000, Y座標: 34,630.000, 緯度: 37° 45' 04.2134", 経度: 138° 53' 34.7563")

3C-2D 杭で長軸方向を座標北の0度0分0秒とし、座標北は真北に対して0度14分26秒東偏し、磁北は真北に対し8度10分西偏する。

#### 3) 調査方法

①表土掘削: これまでの試掘・確認調査の成果から、遺構形成面がVI層以下にあることが判明していたため、I層（旧水田表土）、II層（水田耕作層）、III～V層（漸移層等）まで重機（バックホウ）により除去した。耕土は調査区南側の農道上に仮置きした。また、湛水防止のため、表土掘削と並行して調査区の西壁から20cmほど離して幅20cm程度の土側溝を掘削し、2時のポンプで強制排水を行った。

②包含層掘削・遺構検出・発掘: 重機で表土除去の後、ジョレン等を用いて人力で精査を行い、包含層（VI層）の掘削・遺構の検出にあたった。耕土は人力で調査区外に搬出した。

③実測・写真: 実測図は断面図を1/20で作成した。平面図や各種測量点は測量業者に委託してトータルステーションを用いて作成し、あわせて俯瞰写真を撮影した。写真撮影は35mm版、6×7版のフィルムカメラおよびデジタル一眼レフカメラを用い、白黒フィルム・カラー・ポジフィルムを適宜併用した。

④遺物取り上げ: 包含層出土遺物は小グリッドを単位として取り上げた。遺構出土遺物は点数が少ない地点が多く、層位ごとに一括で取り上げた。また、遺物密集地点や重要遺物についてはトータルステーションを併用して点取りした。

⑤自然科学分析: 植物珪酸体分析・花粉分析・樹種同定・放射性炭素年代測定(AMS法)の科学分析を行った。

#### B 調査経過

平成29年5月30日から諸準備を開始した。同日に遠景・近景写真を撮影し、6月1日から準備工を開始し、敷鉄板の搬入・設置、プレハブ・機材倉庫・トイレを搬入・設置、重機・クローラーダンプ搬入等を行い、6月13日に現地事務所に調査担当・調査員が移動し諸準備を行った。

6月15日から重機によって表土を除去する作業を1区調査区西側より開始し、基本層序を確定した。調査区東端までを6月19日までに行った。2区は同日に表土掘削を終了した。重機掘削と並行して、作業員約6名で排水路掘削・法面仕上げおよび遺構検出準備作業を開始した。6月20日より、調査区北側から包含層掘削および遺構検出作業を開始した。遺構の掘削・写真撮影・計測は6月22日より開始した。

7月6日までにほぼ遺構の精査を終了し、ローリングタワーによる撮影および空撮に備えた清掃作業を同日行い、7月7日にローリングタワーによる撮影、7月9日にラジコンヘリコプターによる調査区全体の撮影を行った。全景撮影後は、7月13・18日に下層確認のための深掘り等、調査の補足・測量調査を行った。7月16日に地元対象の現地説明会を行い、116名の参加があった。7月31日までに機材等の撤収作業を行った。

最終的な発掘調査面積は、1区上端面積212.88m<sup>2</sup>、下端面積176.23m<sup>2</sup>、2区上端面積27.76m<sup>2</sup>、下端面積18.74m<sup>2</sup>、合計面積は上端面積240.64m<sup>2</sup>、下端面積194.97m<sup>2</sup>である。

## C 調査体制

平成 29 年度 赤鎗砂山遺跡第 5 次調査本発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査・整理期間	平成 29 年 6 月 1 日～平成 29 年 7 月 31 日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 (課長：藤井希伊子 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当係長：朝岡政康) 新潟市文化スポーツ部文化財センター (所長：外山孝幸 所長補佐：渡邊明和 福地康郎 主幹：遠藤恭雄)
調査担当	立木宏明（市文化財センター 主査）平成 29 年 6 月 1 日～平成 29 年 7 月 16 日 遠藤恭雄（市文化財センター 主幹）平成 29 年 7 月 17 日～平成 29 年 7 月 31 日
調査員	澤野慶子（市文化財センター非常勤嘱託）

## 第3節 整理作業

### A 整理方法

#### 1) 遺物

遺物量はコンテナ（内径 54.5×33.6×10.0cm）にして 10 箱である。奈良・平安時代の土器・石製品などの遺物がある。

遺物の整理作業は次の手順で行った。①洗浄 ②注記 ③包含層：種別ごとグリッド別に重量計測 ④造構：遺物の器種別の重量・個体数計測 ⑤接合 ⑥報告書掲載遺物の抽出 ⑦実測図・観察表作成 ⑧トレース図作成 ⑨仮割付作成 ⑩版下作製。このうち⑧と⑩は測量業者に委託してデジタル編集をした。

#### 2) 遺構

平面図を作成するにあたっては、まず測量業者に委託した 1/20 の造構平面図と手取り断面図との校正作業を行った。報告書の 1/80 と 1/40 の造構平面図は測量業者が作成し、デジタルデータとした。

### B 整理経過

発掘調査と並行して整理作業を行った。出土遺物の水洗・注記・計測・接合・実測作業と写真・図面整理を行い、併せて測量業者に委託した造構平面図の校正作業を行った。造構平面図は測量業者作成のデジタルデータを用いた。整理担当および調査員は、遺物写真の撮影、図版のレイアウト、報告書の執筆・編集にあたり、平成 30 年度に報告書を刊行した。

## C 整理体制

平成 30 年度 赤鎗砂山遺跡第 5 次調査整理作業の体制は以下のとおりである。

調査・整理期間	平成 30 年 5 月 1 日～平成 31 年 3 月 29 日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 (課長：小沢昌己 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当係長：朝岡政康) 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター (所長：渡邊明和 主幹：天野泰伸 遠藤恭雄)
整理担当	立木宏明（市文化財センター 主査）
調査員	澤野慶子・奈良佳子（市文化財センター非常勤嘱託）

## 第IV章 遺 跡

### 第1節 概 要

赤鉛砂山遺跡は、西を西川、東側を飛落川に挟まれた沖積地内の自然堤防上に立地する。現在の遺跡全体の標高は現水田面で3.4～2.9mを測り、西から東にかけて緩やかに下がっていく。今回の調査地点は赤鉛砂山遺跡の南西側に位置する。現地表面から遺構確認面までの深さは東側が浅く、西側が深くなっている。現況とは逆に東から西に向かい下がっている。遺構確認面の標高は2.6～2.2mを測る。本発掘調査地は道路幅部分と貯水槽部分に分かれており、それぞれを1区、2区とした。

出土遺物は発掘調査終了時でコンテナ(内寸54.5×33.6×10.0cm)換算で10箱となる。内訳は古代の土器7箱、石製品1箱、木製品2箱である。

### 第2節 層 序 (図版16・21、写真図版4・5・18)

基本層序についてはI～VII層に大別した。調査区は東西に長く、また、1区と2区に分かれており色調に若干の相違が生じているが、共通認識のもとに分層した。I層は現水田耕作土、II層が現水田床土である。III～V層は旧耕作土、洪水堆積層、漸移層等と考えられる。VI層は古代の包含層で、奈良・平安時代の遺物が出土した。VII層はいわゆる地山である。VII層については、遺構調査終了後に3B-2G11付近の北壁を標高1.9mまで掘り下げたが、土層の変化はなかった。遺構確認面までの深度は、最も浅い2区東側で現地表面から下0.4m、最も深い1区西側で現地表面下1.1mである。

I層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト 粘性ややあり、しまりあり。黄褐色粒子混じる。基本的に現代の水田耕作土で、層厚は5～12cmである。

II層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト 粘性ややあり、しまり強い。茶褐色粒子混じる。現代の水田床土で、層厚は4～10cmである。

III層 黒褐色(10YR3/2)シルト 粘性ややあり、しまりあり。褐色シルト混じる。層厚は8～40cmである。

IV層 灰色(5Y4/1)シルト 粘性ややあり、しまりあり。茶褐色粒子混じる。層厚は10～34cmで、2区では検出しなかった。

V層 灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト 粘性あり、しまりややあり。層厚は10～36cmで、2区では検出しなかった。

VI層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト 粘性あり、しまりあり。φ1～2mmの炭化物少量混じる。遺構の主な埋土及び古代の遺物包含層で、層厚は7～28cmである。

VII層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト 粘性あり、しまり強い。暗灰色シルトがブロック状に少量混じる。基盤層。分層はしていないが、下層に行くと砂質が強くなる。

### 第3節 遺 構

遺構の番号は調査区ごとに遺構の種別に関わらず通し番号を付した。記述は調査区で分け、1区、2区の順に行う。遺構の平面形態及び断面形態、堆積状況については和泉A遺跡での分類(加藤・荒川1999)を参考にして

いる。遺構平面形は円形・楕円形・方形・長方形・不整形に分類し、断面形状は台形状・箱状・弧状・半円状・U字状・V字状・階段状とした。埋土堆積状況については確認できたものを本文に示した。調査区が狭小のため遺構全体を調査できず、一部の調査に限られているものが多い。

## A 1 区 の 遺 構

1区は長さ約60m、幅約4mで、西から42.2m付近で窄まる。遺構確認面は東側から中央部までほぼ平坦な地形で、標高は2.4mを測る。3B-2G14付近から徐々に下がっており、基本層序Dより西側は標高2.2mで、ふたたび平坦な地形となる。検出された遺構数は掘立柱建物(SB)1棟、井戸(SE)1基、土坑(SK)3基、性格不明遺構(SX)1基、溝(SD)10条、ピット(Pit)39基である。調査区東側で検出された溝状遺構群9条を烟跡(SN)とした。遺物を伴う遺構が少なく、所属時期を確定する資料には乏しいが、包含層からは古代の遺物のみが出土していることから、遺構も概ね古代に比定されると考える。詳しい遺構の計測値等は別表1・2に示した。遺構の分布としては調査区中央から東側に集中する。一方、調査区西側は標高が低く、遺構は確認されていない。以下、種別ごとに遺構の概要について記す。

### 1) 井 戸 (SE)

SE1 (図版13・16、写真図版5)

3B-2H14・15・19・20に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。南側半分が調査区外へ伸びているが、平面形は楕円形と推定される。調査区南壁に接しており、深く掘削すると調査区の壁が崩落する危険があると判断されたため完掘は行わなかったが、深さ0.25mまで掘り進め、4層の埋土を確認した。主軸方向はN-81°-Wである。規模は長軸2.42m、短軸は現存部で1.23mを測る。遺物は出土していない。

### 2) 土坑 (SK)・性格不明遺構 (SX)

SK4 (図版14・17、写真図版5)

3B-2I8に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。SD16、SB56を構成するPit30を切る。平面形は楕円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-36°-Eである。規模は長軸0.80m、短軸0.59m、深さ0.11mを測る。遺物は出土していない。

SK49 (図版13・17、写真図版5)

3B-2H16に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。排水用の土側溝で南側が壊されているが、平面形は楕円形、断面は弧状と推定される。埋土は単層で、主軸方向はN-88°-Eである。規模は現存部で長軸1.04m、短軸0.55m、深さ0.12mを測る。遺物は出土していない。

SK50 (図版13・17、写真図版6)

3B-2G14に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。北側半分が調査区外へ伸びているが、平面形は楕円形と推定される。断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-84°-Eである。規模は現存部で長軸1.08m、短軸0.28m、深さ0.16mを測る。黒色土器無台椀、土師器長甕が出土した。

SX2 (図版13・17、写真図版6)

3B-2I6～8・11・12に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。SD3、Pit20・36を切る。北側が調査区外へ広がるため、全体の様相は不明である。平面形は不整形とした。断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-49°-Wである。規模は現存部で長軸3.25m、短軸2.75m、深さ0.07mを測る。遺物は出土していない。

### 3) 溝 状 遺 構 (SD)

SD3 (図版13・14、写真図版6)

3B-2I7・8・13に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。北西側をSX2に切られ、南東側は調査区外へ伸びる。また、SB56を構成するPit19を切る。断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-42°-W

である。検出した範囲での規模は長さ 2.10m、幅 0.40m、深さ 0.05m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する歓間の溝で、SD3 はその西端に位置する。

#### SD5 (図版 14・18、写真図版 6・7)

3B-219・14・15 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。SB56 を構成する Pit10 を切っており、両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-35°-W である。検出した範囲での規模は長さ 3.37m、幅 0.49m、深さ 0.25m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する歓間の溝である。

#### SD6 (図版 14・18、写真図版 6・7)

3B-2110・15、2J6・11 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。SB56 を構成する Pit13 を切っており、両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-40°-W である。検出した範囲での規模は長さ 3.41m、幅 0.50m、深さ 0.18m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する歓間の溝である。

#### SD11 (図版 14・18、写真図版 7)

3B-2110、2J6・7・11・12 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-45°-W である。検出した範囲での規模は長さ 3.30m、幅 0.52m、深さ 0.26m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する歓間の溝である。

#### SD12 (図版 14・18、写真図版 7)

3B-2J7・12・13 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-37°-W である。検出した範囲での規模は長さ 2.47m、幅 0.50m、深さ 0.20m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する歓間の溝として、土壤の自然科学分析を行った(第 VI 章第 2・3 節参照)。

#### SD15 (図版 14・18、写真図版 7)

3B-2J7・8・13 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-35°-W である。検出した範囲での規模は長さ 1.96m、幅 0.44m、深さ 0.20m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する歓間の溝である。

#### SD16 (図版 14・18、写真図版 6)

3B-218・13・14 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。SK4 に切られており、両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-38°-W である。検出した範囲での規模は長さ 3.46m、幅 0.33m、深さ 0.14m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する歓間の溝である。

#### SD17 (図版 14・18、写真図版 7・8)

3B-2J8・9・14 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-24°-W である。検出した範囲での規模は長さ 1.37m、幅 0.67m、深さ 0.18m を測る。土師器長甕が出土した。SN55 を構成する歓間の溝である。

#### SD18 (図版 14・18、写真図版 7・8)

3B-2J9・10 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-27°-W である。検出した範囲での規模は長さ 1.16m、幅 0.36m、深さ 0.22m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する歓間の溝で、SD18 はその東端に位置しているが、SN55 はさらに調査区外に広がっている可能性もある。

#### SD37 (図版 13・17、写真図版 8)

3B-217・8・13 に位置する遺構で、北西側は調査区外へ伸びる。断面は半円状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-50°-W である。検出した範囲での規模は長さ 0.90m、幅 0.30m、深さ 0.31m を測る。調査区北

壁で層序を確認したところ、遺構確認面はVI層上面であった。このため他の遺構より新しいと考えられるが、遺物が出土していないことから時期は不明である。

#### 4) 畑 跡 (SN)

##### SN55 (図版 14・18、写真図版 8)

3B-2I7 ~ 10・13 ~ 15、2J6 ~ 14 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出しており、SB56 を切る。畝と畝間の溝 (SD3・5・6・11・12・15・16・17・18) によって構成される。畝の上面を平面的に検出することはできなかつたが、調査区壁面で溝の間に高さ 0.08 ~ 0.14m、幅 0.8 ~ 1.2m の畝状の高まりが 7 か所確認された。主軸方向は N-45° -W で、検出した範囲での規模は幅 13.72m を測る。SN55 を構成する SD17 からは土師器長甕が出土している。土壤の自然科学分析を行つたところ、アブラナ科の栽培や、陸稻による稻作が行われていた可能性が指摘されている（第VI章第 2・3 節参照）。

#### 5) ピ ッ ト (Pit)

1 区では 39 基のピットが確認された。中央部分に多く分布する。これらは主に掘立柱建物や柵、柱列を構成するものと推察されるが、実際には掘立柱建物が 1 棟確認できたのみで、ピットで構成されるほかの遺構は検出できなかつた。

##### Pit7 (図版 13・18、写真図版 9)

3B-2H12 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は円形、断面は階段状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-29° -E である。規模は長軸 0.29m、短軸 0.26m、深さ 0.12m を測る。遺物は出土していない。

##### Pit8 (図版 13・18、写真図版 10)

3B-2H12 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は長方形、断面は階段状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-72° -W である。規模は長軸 0.34m、短軸 0.22m、深さ 0.30m を測る。遺物は出土していない。

##### Pit9 (図版 13・18、写真図版 10)

3B-2H17 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は方形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-7° -E である。規模は長軸 0.22m、短軸 0.21m、深さ 0.10m を測る。遺物は出土していない。

##### Pit10 (図版 14・20、写真図版 9)

3B-2I14・15 に位置する古代の遺構である。SB56 を構成するピットで、VII層上面で検出した。SD5 に切られる。平面形は円形、断面は U 字状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-48° -W である。規模は長軸 0.31m、短軸 0.26m、深さ 0.22m を測る。土師器無台碗が出土した。

##### Pit13 (図版 14・20、写真図版 9)

3B-2I10 に位置する古代の遺構である。SB56 を構成するピットで、VII層上面で検出した。SD6 に切られる。平面形は楕円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-60° -E である。規模は長軸 0.27m、短軸 0.20m、深さ 0.10m を測る。遺物は出土していない。

##### Pit14 (図版 13・18、写真図版 10)

3B-2H13 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。排水用の土側溝で壊されているため北側は遺存していないが、平面形は楕円形と推定される。断面は U 字状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-20° -E である。規模は現存部で長軸 0.27m、短軸 0.23m、深さ 0.24m を測る。遺物は出土していない。

##### Pit19 (図版 13・14・20、写真図版 9)

3B-2I13 に位置する古代の遺構である。SB56 を構成するピットで、VII層上面で検出した。SD3 に切られる。平面形は円形、断面は U 字状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-5° -W である。規模は長軸 0.25m、

短軸 0.23m、深さ 0.26m を測る。遺物は出土していない。

**Pit20** (図版 13・17、写真図版 6)

3B-217 に位置する古代の遺構である。SX2 の底面で検出した。排水用の土側溝で壊されているため東側は遺存していないが、平面形は円形と推定される。断面は半円状を呈し、埋土は 3 層に分かれる。主軸方向は N-52°-W である。規模は現存部で長軸 0.25m、短軸 0.24m、深さ 0.15m を測る。遺物は出土していない。

**Pit21** (図版 13・18、写真図版 11)

3B-2H25 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-22°-W である。規模は長軸 0.21m、短軸 0.18m、深さ 0.03m を測る。遺物は出土していない。

**Pit22** (図版 13・18、写真図版 11)

3B-2H15 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は円形、断面は U 字状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-23°-W である。規模は径 0.14m、深さ 0.13m を測る。遺物は出土していない。

**Pit23** (図版 13・18、写真図版 11)

3B-2H15、2I11 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-25°-W である。規模は長軸 0.25m、短軸 0.23m、深さ 0.12m を測る。遺物は出土していない。

**Pit24** (図版 13・18、写真図版 11)

3B-2H15、2I11 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-65°-W である。規模は長軸 0.25m、短軸 0.23m、深さ 0.08m を測る。遺物は出土していない。

**Pit25** (図版 13・18、写真図版 11・12)

3B-2I11 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。Pit26 を切る。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-29°-W である。規模は長軸 0.21m、短軸 0.20m、深さ 0.08m を測る。遺物は出土していない。

**Pit26** (図版 13・18、写真図版 11・12)

3B-2I6・11 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。Pit25 に切られる。平面形は方形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-77°-E である。規模は長軸 0.22m、短軸 0.17m、深さ 0.08m を測る。遺物は出土していない。

**Pit27** (図版 13・19、写真図版 12)

3B-2I11 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。Pit28 を切る。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-56°-E である。規模は長軸 0.20m、短軸 0.18m、深さ 0.08m を測る。遺物は出土していない。

**Pit28** (図版 13・19、写真図版 12)

3B-2I11 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。Pit27 に切られる。平面形は楕円形、断面は半円状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-9°-E である。規模は長軸 0.30m、短軸 0.23m、深さ 0.13m を測る。遺物は出土していない。

**Pit29** (図版 13・19、写真図版 12)

3B-2I11 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-10°-W である。規模は長軸 0.18m、短軸 0.17m、深さ 0.05m を測る。遺物は出土していない。

**Pit30** (図版 14・20、写真図版 5・9)

3B-218 に位置する古代の遺構である。SB56 を構成するビットで、SK4 を完掘した際に遺構底面で検出した。平面形は円形、断面は U 字状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-66°-W である。規模は径 0.22m、深さ 0.28m を測る。遺物は出土していない。

**Pit31** (図版 13・19、写真図版 10)

3B-2H13 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は円形、断面は台形状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-15°-W である。規模は長軸 0.18m、短軸 0.16m、深さ 0.09m を測る。遺物は出土していない。

**Pit32** (図版 13・19、写真図版 10)

3B-2H14 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は楕円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-67°-E である。規模は長軸 0.20m、短軸 0.17m、深さ 0.04m を測る。遺物は出土していない。

**Pit33** (図版 13・19、写真図版 12)

3B-2H14 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は円形、断面は V 字状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-11°-W である。規模は長軸 0.23m、短軸 0.21m、深さ 0.13m を測る。遺物は出土していない。

**Pit34** (図版 13・19、写真図版 12)

3B-2H16 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-49°-W である。規模は長軸 0.17m、短軸 0.15m、深さ 0.12m を測る。遺物は出土していない。

**Pit35** (図版 13・19、写真図版 13)

3B-2H17 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-6°-W である。規模は径 0.20m、深さ 0.11m を測る。遺物は出土していない。

**Pit36** (図版 13・17、写真図版 6)

3B-216 に位置する古代の遺構である。SX2 を完掘した際に、底面で検出した。北側が調査区外へ伸びており、平面形は円形と推定される。断面は箱状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-4°-W である。規模は現存部で長軸方向 0.16m、短軸方向 0.24m、深さ 0.15m を測る。遺物は出土していない。

**Pit38** (図版 13・19、写真図版 13)

3B-2G13 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。排水用の土側溝で壊されているため北側は遺存しないが、平面形は楕円形と推定される。断面は U 字状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-48°-W である。規模は現存部で長軸 0.32m、短軸 0.25m、深さ 0.38m を測る。遺物は出土していない。

**Pit39** (図版 13・19、写真図版 13)

3B-2G14・19 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は方形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-10°-E である。規模は径 0.22m、深さ 0.10m を測る。土師器長甕が出土した。

**Pit40** (図版 13・19、写真図版 13)

3B-2G19 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-9°-W である。規模は長軸 0.14m、短軸 0.13m、深さ 0.05m を測る。遺物は出土していない。

**Pit41** (図版 13・19、写真図版 14)

3B-2G19・20 に位置する古代の遺構である。VII 層上面で検出した。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-85°-W である。規模は長軸 0.22m、短軸 0.20m、深さ 0.10m を測る。遺物は

出土していない。

**Pit42** (図版 13・19、写真図版 14)

3B-2G15 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-4°-W である。規模は長軸 0.10m、短軸 0.09m、深さ 0.09m を測る。遺物は出土していない。

**Pit43** (図版 13・19、写真図版 14)

3B-2G20 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-50°-E である。規模は長軸 0.15m、短軸 0.14m、深さ 0.05m を測る。遺物は出土していない。

**Pit44** (図版 13・19、写真図版 14)

3B-2G20 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-38°-E である。規模は長軸 0.15m、短軸 0.13m、深さ 0.04m を測る。遺物は出土していない。

**Pit45** (図版 13・19、写真図版 14)

3B-2G20 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-60°-W である。規模は長軸 0.16m、短軸 0.15m、深さ 0.03m を測る。遺物は出土していない。

**Pit46** (図版 13・19、写真図版 15)

3B-2G15 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は長方形、断面は半円状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-1°-E である。規模は長軸 0.24m、短軸 0.22m、深さ 0.18m を測る。遺物は出土していない。

**Pit47** (図版 13・16、写真図版 15)

3B-2H10 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。北側が調査区外に伸びており、平面形は円形と推定される。断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-7°-W である。規模は現存部で長軸 0.16m、短軸 0.21m、深さ 0.13m を測る。遺物は出土していない。

**Pit48** (図版 14・19、写真図版 15)

3B-2I8・9 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は方形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-3°-E である。規模は長軸 0.24m、短軸 0.20m、深さ 0.08m を測る。遺物は出土していない。

**Pit51** (図版 12・19、写真図版 15)

3B-2G12 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は円形、断面は階段状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-23°-W である。規模は長軸 0.31m、短軸 0.28m、深さ 0.11m を測る。石製品(台石)が出土した。

**Pit52** (図版 13・19、写真図版 15・16)

3B-2G19 に位置する遺構である。包含層(VI層)掘削時に柱根の上部を検出したため、柱根を中心周辺 70cm 程度の範囲を VI 層ごと残した。島状に残した上面を精査したがピットの平面形が不明瞭であったため、北側に幅 1m のトレンチを設定し、掘り下げた。断面を確認したところ、Pit52 は VI 層にも掘り込まれており、確認面は VI 層よりさらに上層である可能性もある。平面形は楕円形と推定され、断面は U 字状、埋土は現存部で 2 層に分かれる。主軸方向は N-10°-W である。規模は現存部で長軸 0.41m、短軸 0.32m、深さ 0.30m を測る。柱根の樹種同定を行ったところ、ヤナギ属であることが判明した。新潟県内では律令期以降に柱などの建築部材としてのヤナギ属の利用は少ないとされる(第VI章第4節参照)。また、放射性炭素年代測定(AMS 測定)を行つ

たところ、15世紀後半～17世紀前半（1488～1626calAD）の年代が示された（第VI章第5節参照）。試掘調査でも中世から近世以降の遺物が出土していることから（第V章参照）、赤館砂山遺跡の存続時期を考える上で重要な資料である。柱根のほかに土師器無台椀・長甕が出土している。

#### Pit53（図版13・19、写真図版16）

3B-2G18に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-51°-Wである。規模は長軸0.20m、短軸0.19m、深さ0.07mを測る。遺物は出土していない。

#### Pit54（図版13・14・19、写真図版16）

3B-2I12に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-12°-Wである。規模は長軸0.26m、短軸0.24m、深さ0.12mを測る。遺物は出土していない。

### 6) 据立柱建物(SB)

#### SB56（図版14・20、写真図版8・9）

3B-2I12～10・13～15に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。主軸方向はN-25°-Eである。調査区が狭小のため全体像は確認できなかったが、現存部で梁間1間（2.70m）×桁行2間（3.64m）、床面積は9.83m<sup>2</sup>である。柱穴の規模は径0.22～0.31mで、深さ0.10～0.28mを測る。柱間隔は梁間2.70m、桁行1.67～2.11mである。柱根は検出しなかった。SB56を構成するPit10からは土師器無台椀が出土している。切り合い関係は、SK4、SD3・5・6に切られている。このうちSD3・5・6はSN55を構成していることから、SB56の廃絶後に、SN55が構築されたと考える。

## B 2 区の遺構

2区は1区から北東方向に約20mの位置にあり、長さ約9.8m、幅約2.9mの範囲である。遺構確認面はほぼ平坦で、西側は標高2.5m、東側で標高2.6mを測る。性格不明遺構（SX）1基、ピット（Pit）1基を検出した。遺物を伴う遺構はなく、1区同様、所属時期を確定する資料には乏しいが、包含層からは古代の遺物のみが出土していることから、遺構も概ね古代に比定されると考える。詳しい遺構の計測値等は別表1に示した。

#### 1) 性格不明遺構（SX）

##### SX1（図版15・21、写真図版18）

3C-1C6～9・11～13に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。北側が調査区外に伸びており、平面形は不整形とした。断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-85°-Eである。規模は現存部で長軸5.33m、短軸0.88m、深さ0.20mを測る。遺物は出土していない。

#### 2) ピット（Pit）

##### Pit2（図版15・21、写真図版19）

3B-1C11に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は円形、断面は台形状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-10°-Wである。規模は長軸0.17m、短軸0.16m、深さ0.07mを測る。遺物は出土していない。

## 第V章 遺物

### 第1節 概要

本発掘調査では土器・石製品・木製品が出土した。終了報告時の総量はコンテナ（内寸 54.5×33.6×10.0cm）で 10 箱、内訳は古代の土器 7 箱、石製品 1 箱、木製品 2 箱である。試掘・確認調査では古代・中世・近世の遺物が出土した（第Ⅳ章第 1 節参照）が、本発掘調査地点では土器については古代のもののみであった。

以下では種別ごとに全体の出土状況・抽出・図化した個々の遺物について詳細を述べる。また、試掘・確認調査の出土遺物の主要なものについても合わせて報告する。

### 第2節 古代の土器（図版 22～26 写真図版 20～27）

小片が多く完形を知り得るものは少ないが、土師器にはロクロを使用していないハケメ調整が主のものと、ロクロを使用するものとがあり、量的には前者が多く多様性がある。黒色土器はロクロ使用のもののみである。個々の遺物の詳細な観察内容は別表 3 に示した。

#### A 土器の記述と分類

土師器については器形の全体を知り得るものは多くないが、口縁部形態が明らかなるものは比較的多かった。分類をおこなった場合、形態・手法による分類はアルファベット大文字を用い、細分する場合はアルファベット小文字・算用数字の順に用いた。法量による分類はローマ数字を用いて大きい方から I・II…としている。また、成形・調整の表現は『細池寺道上遺跡 VI・VII』（立木・奈良ほか 2017、同 2018）にならって以下のようにした。

1. ロクロ回転を利用したナデを「ロクロナデ」、そのほかのものは「ナデ」とした。
2. ロクロ回転を利用したケズリを「ロクロケズリ」、利用しないものは「ケズリ」とした。
3. ロクロ回転を利用した刷毛目を「カキメ」、利用しないものは「ハケメ」とした。
4. 黒色土器無台椀・土師器無台椀などにみられるヘラ磨きは「ミガキ」とした。
5. 須恵器甕・横瓶・土師器長甕・鍋などの外側にみられる叩き具を用いた成（整）形痕を「タタキメ」とし、対応して内面に当たられた当て具の痕跡を「当て具痕」とした。

叩き具・当て具の文様については、細池寺道上遺跡での分類（立木・奈良ほか 2017、同 2018）に準じ、平行線文を H 類、同心円文を D 類、格子文を K 類、放射状文を S 類、扇形文を C 類とし、無文のものがあるのでそれを N 類とする。平行線文タタキメは、刻まれた線に対する木目の現れ方で 3 種類に分かれている（直交：Ha 類、右上がり斜交：Hb 類、左上がり斜交：Hc 類）。今回出土の須恵器では外側 Ha 類または Hc 類で内面 D 類のもの、外側 K 類で内面は D 類に H 類が加わるもの、外側 Hc 類で内面 N 類のものがある。土師器鍋に外側 H 類内面 H 類のものが 1 点ある。

須恵器の胎土については『山三賀 II 遺跡』（坂井ほか 1989a）、『越後阿賀北地域の古代土器様相』（春日ほか 2004）で提示されている分類を参考に以下のように分類した。

A 群 胎土そのものが相対的に粗く、石英・長石・雲母を多く含む。器面はざらついたものが一般的で、小縫が露出する。阿賀北地方の窯跡の須恵器と推定される一群である。

B 群 胎土そのものが精良で、白色粒子を多く含む。器面に黒色の斑点、吹き出しがみられる。佐渡の小泊窯

跡群の須恵器と推定される一群である。

C群 胎土そのものは比較的精良であり、石英・長石の小粒子を少量含む。器面は滑らかである。新津丘陵窯跡群の須恵器と推定される。

D群 A～C類ではないもの。

### 1) 須恵器

食膳具（無台杯、有台杯、杯蓋）、貯藏具（壺・瓶類、甕）がある。

無台杯 厚手で丸底のもの（2）と薄手平底で体部が直線的に開くもの（69～71・75）がある。

有台杯 口縁不明だが平底で断面方形の大ぶりな高台が底部周縁に張り付けられるもの（5）と、外端接地の断面方形の高台が平底の周縁より中心よりに貼り付けられる深いものがある（6）。

杯 蓋 直径の半分ほどの天井部からなだらかに口縁部に至り、明瞭な稜を形成して端部を下方に折り曲げるものの、擬宝珠形のつまみをもつものが1点出土している（8）。

壺・瓶類 肩の張る体部の小片（22）と長頸になるか短頸になるか不明の底部がある（81）。

甕 呼き成形による体部があるが、それらの口縁部とみられるものは認められなかつた。

### 2) 土師器

食膳具（無台杯、無台椀、鉢）、煮炊具（長甕、小甕、鍋、瓶？）がある。

無台杯 完形品がなくあまり判然としないものが多いが、ロクロ不使用で、3類に分けた。

A類 口縁端部に水平な平坦面をもつもの（9）

B類 丸底風のもの（10）

C類 直線的に外傾して開くもの（11～15）。口径大小あるようである。

無台椀 ロクロ使用で、口縁部が玉縁風になるものが1点ある（52）ほかは、口縁部不明の糸切りの底部がある。（53・54・76）

大型の杯または鉢または壺？ ロクロ不使用のもので、直線的に外傾して大きく開くもの（16）、外反して開くものでやや深い器形になると推定されるもの（17・18）があり、杯または鉢、瓶などである可能性があるか。

長甕 ロクロ不使用のものと、ロクロ使用のものがある。ロクロ不使用のものは、2種に分類した。

A類 体部からくの字形に屈曲して外反する口縁部をもち底部は尖り気味の丸底となるもの（30）。口縁端部は丸くおさめられる。

B類 体部からなだらかに外反する口縁部をもつもの（28）。口縁端部は断面方形に近いものや丸くおさめるものなどがある。

体部片の多くは体部中位に最大径をもつと推定されるもので、底部片は平底ばかりなので、B類は平底のものが主であると考えられる。

ロクロ使用のものについては口縁部形態で以下のように分類した。

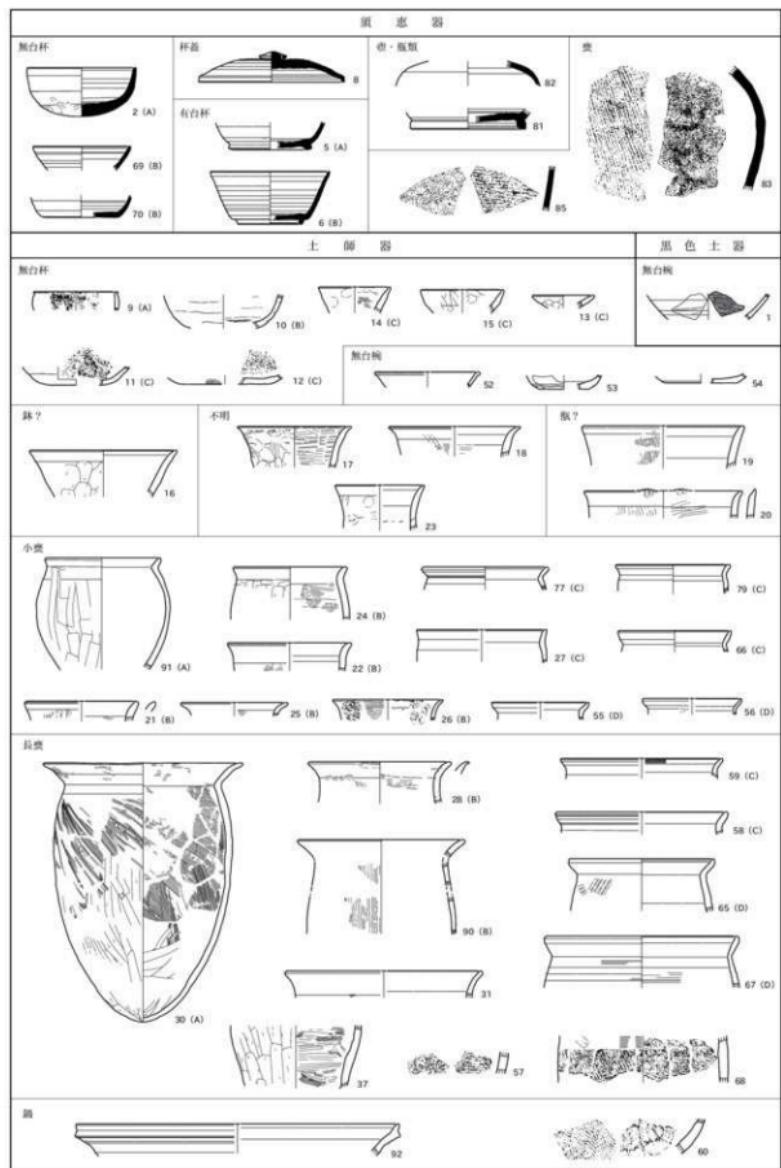
C類 体部からなだらかに屈曲して口縁部が外反して短く開く（58・59）。

D類 体部から「く」字状に屈曲して直線的に口縁部がのび、断面三角形の端部は上方につまみだす（65・67）。

小甕 口径15cm程度になると推定されるもの。ロクロ不使用のものでは、中位のふくらみが大きい体部からくの字形に屈曲して直線的に開く口縁部をもつもの（91）と、なだらかに外反する口縁部のものがある。ロクロを使用するものでは、直線的に外傾する口縁部をもつもの（66・67・79）と受け口状に開き端部を小さく上方につまみだすものがある。

鍋 ロクロ使用で、断面三角形の口縁端部が上方に大きくつまみだされるもの（92）、呼び抜法による丸底の底部（60）が各1点ある。

瓶？ 体部にくびれや屈曲がなく直立する口縁部のものや大きく開く鉢形のものの中には瓶が含まれる



第4図 古代土器分類図 (S=1/6)

かもしれない。

### 3) 黒色土器

無台椀の小片が1片出土した。

無台椀 体部の小片のため、口縁部形態や口径・底径などは不明であるが、内面を磨いて黒色処理したものである。

## B 出土土器各説

### 1) 本発掘調査出土土器

#### a 造構出土土器

1 区 SK50 から黒色土器無台椀が1点出土している。1は体部のみの小片であるが、内面ミガキ黒色処理。

#### b 包含層出土土器

2は須恵器無台杯で1区3B-2G18出土。丸底で口縁部が直立する厚手のものである。底部は手持ちヘラケズリにより調整されている。古墳時代の蓋杯の蓋にも似ているが、口径、深さがあり厚手であることなどから金属器模倣の流れにある無台杯の一種と考えておきたい。白色に近い色調で、焼成は甘く軟質である。内面見込みは磨滅が認められる。産地はよくわからない。

3は須恵器無台杯で1区13B-2H12と3B-2H16から同一個体が出土した。厚みのある口縁部で、白色を呈し焼成は甘く粉をふいたようになっている。焼成や色調は2に近い印象だが、底部への屈曲が認められるので丸底にはならないと考えられる。新津産か。

4は須恵器無台杯で1区3B-2G17出土。3よりは薄いが厚手の口縁部小片で、焼成は甘くやや軟質である。内面が淡い橙色、外側は灰色を呈しており、内面が完全に還元されていない。内面下端にわずかな屈曲が認められることから、すぐに底部に移行する浅い器形となるか、途中に稜を形成する器形である可能性もある。佐渡小泊窯産とは異なるように思われる。

5・6は須恵器有台杯で、5は1区3B-2F19・3B-2F20出土のものが接合し、ほかに同一個体が2F19から2片出土している。底部がやや丸みをもち幅広の高台が底部周縁近くに張り付けられる。内面は全体に降灰しており部分的に緑色の自然釉に近いものもみられる。外側体部から高台の外側～底面は残存部分で見る限り、降灰はあるものの内面ほどではなく、光沢のある暗色を呈する。高台内の底部のみ光沢も降灰もない状況である。このことからは少なくとも正位で置かれて上に覆うものなく、底部は隠されるが高台底面まで降灰が及ぶような台にのせられていたという焼成方法が想定される。

6は1区3B-2G18・3B-2G19出土のものが接合し、ほかに同一個体3片が両グリッドから出土した。口縁部片と体～底部片を合成して図示している。平底で深いタイプのものである。5に比べて薄手で軽い焼成である。体部は口縁端部にむかって先細りになっていく。断面方形の高台は外端で接地する。外側全体に降灰がみられ光沢があるが、内面には一切降灰がないことから、逆位で重ねて焼成されたものと考えられる。微細な白色粒を多量に含む佐渡小泊窯産であろう。

7は須恵器甕部片で1区3B-2G16出土。外側平行線文タタキ文（木目左上がり斜交）、内面同心円文（木目円周方向）で具痕を残す。小粒の石英や長石などを多く含み薄手で堅練な焼成であり、小泊窯とは異なる産地か。

8は須恵器杯蓋で1区3B-2E25出土。口縁端部はわずかしかないが、全体の4分の1ほどが残る。口縁端部はシャープに角をつけて折り曲げられ、やや外側に向く。焼成は堅練である。擬宝珠形のつまみは周縁部が細かく打ち欠かれている。また口縁端部も細かく打ち欠かれているように見える。外側は全体に降灰して暗い色調で、内面口縁端部から1cmほど中心側まで外側と同様の色調を呈することから、身と重ねて正位で焼成されたもので、身の口径が蓋より2cm程度小さかったことを示すのである。つまみの打ち欠かれた部分をみると鉤状の部分の中に調整が施されているようであり、天井部をヘラケズリする際に中央を低い円柱状に削り残した上にか

ぶせるようにしてつまみを作っている可能性がある。また、つまみ下端部は半径の3分の1ほど内側まで細い工具で調整されていて、山形の円盤が浮いているように見えるのも特徴的であり、生産地を考える手がかりになると思われる。

9は土師器無台杯であろうか。1区3B-2E25出土。体部は内湾し、端部には水平な平坦面が作り出されている。ロクロ不使用で、内外面ヨコハケ調整である。

10は土師器で、平底から丸みをもって立ち上がる無台杯になるものと思われる。1区3B-2E25出土。ロクロ不使用で外面はナデ、内面は残りが悪いがヨコハケがみられる。薄手で成形時の粘土の繼ぎ目がならされずに残る。

11は土師器で、平底から丸みをもって立ち上がり体部が外傾する無台杯と思われる。1区3B-2E25出土。ロクロ不使用で、内面は（ヨコ？）ハケメ調整がみられる。外面には粘土の繼ぎ目が残る。

12は土師器で、平底から外傾して立ち上がる無台杯か。1区3B-2E20出土。ロクロ不使用で、外面にはわずかにヨコハケが残り、内面は目の粗いハケメが不定方向に施されている。底部にはハケメと木葉痕のような痕跡がある。

13は土師器で、大きく外傾して聞く浅い器形の無台杯か高杯になるものであろうか。1区3B-2G16出土。ロクロ不使用で、外面はケズリ？、ヨコナデ、内面はヨコナデである。

14は土師器で、小型で直線的に外傾して聞く深さのある無台杯の口縁部と思われる。1区3B-2F22出土。ロクロ不使用で、外面ともヨコナデと指頭圧痕が認められる。

15は土師器で、口縁部が断面方形を呈し、体部には稜をもつ無台杯。1区3B-2F16出土。ロクロ不使用で、外面ヨコナデとヘラケズリ、内面は指頭圧痕とヨコナデである。

16は土師器で、大きく聞く無台杯あるいは鉢というべきかもしれない。1区3B-2E24出土。ロクロ不使用で、外面ヘラケズリとヨコナデ、内面はヨコナデである。

17は土師器で、直立気味の体部から緩やかに聞いて口縁部は小さく外反する小甕か瓶の可能性も考えられる。1区3B-2E24出土。ロクロ不使用で、外面は指頭圧痕、タテやナナメのハケメ、内面は口縁部近くまでヨコハケが施されている。

18は土師器で、直立ぎみの体部から小さく外反する口縁部はヨコナデで先細りになる。小甕か。1区3B-2E20出土。ロクロ不使用で、外面ナナメハケ、内面ヨコハケである。

19は土師器で、厚手で直線的な体部から口縁部は丸くおさめられている。瓶か。1区3B-2E20・3B-2E25出土。ロクロ不使用で、外面はタテ・ナナメのハケメ、内面はヨコナデである。

20は土師器で、直立する体部から口縁部は小さく外反する瓶か。1区3B-2F16出土。ロクロ不使用で、体部は外面タテハケと指頭圧痕、内面ヨコ・ナナメハケである。

21は土師器小甕か。やや外反する口縁部で、端部内側に角をもつ部分もある。1区3B-2G16出土。ロクロ不使用で、外面タテハケ、内面ナナメハケである。

22は土師器小甕か。厚みのある直立する体部から口縁部が小さく外反する。1区3B-2E25出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテハケ、内面ヨコハケである。

23は土師器（小）甕か。などらかに外反して口縁部に至るもので、ややくびれた壺のような形になるか。1区3B-2E24出土。ロクロ不使用で、体部外面は指頭圧痕とヘラケズリ、ナデが認められ、内面はヨコナデである。

24は土師器小甕。体部中位に最大径をもって口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。1区3B-2G15出土。ロクロ不使用で、体部は外面タテ方向のケズリ、内面はヨコハケである。

25は土師器で、大きく外反して聞く小甕口縁部とみられる。1区3B-2E20出土。ロクロ不使用で、内面にはヨコナデの前にナナメハケが施されている。

26は土師器で、やや薄手でなどらかに外反する口縁部。23に近い形の小甕になるか。1区3B-2E25出土。

ロクロ不使用で、外面はヨコハケ、内面はヨコナデか、粘土の継ぎ目が残る。

27は土師器小甕か。ややふくらみのある体部から内面に明確な稜を形成して口縁部となり、口縁部は外反しない。1区3B-2E20出土。内外面とも横方向にナデられていると思われるが、ロクロ使用か不使用か判然としない。

28は土師器長甕で、あまりふくらみのない体部から口縁部が比較的大きく外反して開く。1区3B-2F19出土。ロクロ不使用で、体部外面はナナメハケ、内面はヨコハケである。口縁部内面には粘土の継ぎ目が残る。

29は土師器小甕か。大きく外反する口縁部である。1区3B-2G17出土。ロクロ不使用で、体部はハケメ調整かと思われる。

30は土師器長甕で、本発掘調査で出土したなかでは最も残存率が高く、ほぼ完全な形をうかがい知ることのできる唯一の個体である。1区3B-2G15・3B-2G14からすべての破片がまとめて出土した。底部の先端までは接合しなかつたが、底部に相当するとみなせる破片の形状から、やや尖りぎみの丸底になると考えられる。ロクロ不使用で、体部内外面とも上半は特徴のある明瞭なハケメが左上がりの斜め方向に長い単位で施され、下半はタテまたはナナメのケズリ、またはナデによって尖り気味の丸底が作り出されている。体部内面にはくびれ部のやや下から体部の高さ約4分の3に及ぶ縱長の明瞭な黒斑が認められる。

31は土師器長甕口縁部片で、外反して口縁端部はつまみ出すというほどではないが、やや方形に近い断面形を呈する。1区3B-2E25出土。ロクロ不使用で、体部外面はヨコまたはナナメハケ、内面はナナメハケが施される。

32は土師器長甕か。体部から口縁部へ移行する部分で大きく屈曲する。1区3B-2G1出土。ロクロ不使用で、体部外面はナナメハケ、内面はヨコハケである。

33は土師器長甕体部で、体部中位に最大径がある形になると思われる。1区3B-2F20出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテハケ・ケズリ、内面はヨコハケ。内面には粘土の継ぎ目が残っている。内面にオコゲあり？

34は土師器小甕体部で、1区3B-2E25出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテハケ、内面はヨコナデである。内面には粘土の継ぎ目が残っている。

35は土師器長甕体部で、あまり大きいふくらみはもたないようである。1区3B-2E25出土。ロクロ不使用で、外面タテハケ、内面ヨコナデである。

36は土師器小甕体部で、35よりはふくらみが大きく薄手である。1区3B-2G16出土。ロクロ不使用で、外面ヘラケズリ、内面ヨコナデである。

37は土師器長甕体部で、体部中位に最大径をもつ器形になると思われる。1区3B-2E24出土。ロクロ不使用で、外面はタテ方向のヘラケズリ、内面ヨコハケである。

38は土師器長甕体部で、体部中～上位に最大径をもつ器形であろう。1区3B-2F18出土。ロクロ不使用で、外面はケズリか、内面はヨコハケ・ナデである。

39は土師器長甕体部で、1区3B-2G17出土。ロクロ不使用で、外面はタテ・ナナメのケズリ、内面はタテ方向を基調とするハケメが明瞭に残り、部分的にナデが施される。

40は土師器長甕体部で、1区3B-2G17出土。ロクロ不使用で、外面はタテ方向基調のケズリ、内面もヨコ方向のケズリである。

41は土師器長甕下部～体部で、体部中位に最大径がある器形と思われる。1区3B-2F23出土。ロクロ不使用で、外面は残りが悪くはつきりしないがケズリと思われる。内面はヨコナデである。

42は土師器小甕の体部下端かと思われる小片である。1区3B-2G16出土。ロクロ不使用であろう。

43～51は平坦な底部と思われるものである。43は直径5cm程の平底をもつ土師器小甕で、1区3B-2F19出土。ロクロ不使用で、外面ナナメハケ、内面はナデであろうか。

44は土師器小甕体部～底部で、直径8.3cm程の平底は低い円盤状に突出しており、底部と体部の境は明瞭な

段になる。1区 3B-2G17・3B-2F17出土。ロクロ使用か。外面ロクロナデ・ケズリ？内面ロクロナデ・ナデで底面には切り離し後なんらかの敷物？か棒？の圧痕が認められる。

45は土師器長甕か。1区 3B-2G18出土。直径 9.2cm の全く平坦な底部にはナデと木葉痕が認められる。ロクロ使用の可能性もあるか。

46は底径 9.0cm の土師器長甕で、1区 3B-2E25出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテ方向のケズリ、内面にはナデと指頭圧痕、底部外面はケズリとナデで調整されている。

47は底径 7.6cm 程と推定される土師器小甕か、1区 3B-2F21出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテ・ナナメハケ、内面には指頭圧痕がみられる。

48は底径 5.8cm 程の土師器小甕体部～底部で、1区 3B-2E25出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテ・ナナメハケ、内面には指頭圧痕、底部外面はハケメがみられる。

49は土師器小甕？底部片で、1区 3B-2E25出土。ロクロ不使用で、外面はケズリ？内面ナデ。

50は土師器長甕？底部片で、1区 3B-2F16・3B-2F22出土。中央が最も厚みがある。ロクロ不使用で、外側調整は残りが悪く不明、内面はナデである。

51は土師器小甕？底部片で、1区 3B-2G17出土。ロクロ不使用で、内面はナデ？外面はケズリが施されていると思われる。

52はロクロ使用の土師器無台椀または有台皿の口縁部で、1区 3B-2J6出土。端部が玉縁風になるもので、器面はなめらかに調整されている。

53はロクロ使用の土師器無台椀底部片で、1区 3B-2G14出土。底部は糸切りで切り離しの際に糸が体部下端に巻き付いた跡がある。内面は 54 に比べると凹凸があるが小甕よりはなめらかに仕上げられている。残存部からすると体部はそれほど開かない器形であると推定する。

54はロクロ使用の土師器無台椀底部片で、1区 3B-2J6・3B-2J7出土。底径は 9cm 近く大ぶりの深い器形のものと推定する。内面はなめらかに調整されており、両面赤彩されていた可能性あり？

55はロクロ使用の土師器小甕口縁部で、1区 3B-2H12出土。端部はやや先細りになり外方にやや聞く。

56はロクロ使用の土師器小甕口縁部で、1区 3B-2G16出土。口縁部はやや内湾して端部は上方に向く。

57は叩き技法で整形した土師器長甕の体部片で、1区 3B-2F18・3B-2F16から 1 点ずつ同一個体が出土した。外面は長方形格子文タタキメ、内面はハケメが施されており當て具痕は不明である。叩き技法を用いているので成形はロクロ使用であろう。

58はロクロ使用の土師器長甕口縁部で、1区 3B-2G20出土。反りは強くなく、端部直下を強くなれてややつまみだすように整えている。

59はロクロ使用の土師器長甕口縁部で、1区 3B-2E25出土。58 に比べるとやや薄手で反りが強い。端部は丸くおさめるのみである。

60は叩き技法で丸く整形した土師器鍋の底部片で 1 区 3B-2G16出土。外面は平行線文タタキメ、内面は當て具痕の上からハケメ？が施される。成形にはロクロを使用したものであろう。

## 2) 試掘調査出土土器

65はロクロ使用の土師器長甕で、9T VI層出土。体部外面には平行線文タタキメが認められる。

66はロクロ使用の土師器小甕で、9T VI層出土。体部からくの字形に屈曲し、口縁部は肥厚して丸くおさめる。

67はロクロ使用の土師器長甕で、9T VI層出土。体部からくの字形に屈曲して口縁部は肥厚し、端部は断面方形に近いが、やや内側につまみだしている。体部は内外面ともカキメが施される。

68はロクロ使用の土師器長甕体部で、9T VI層出土。外面上半はカキメとケズリ、下半は平行線文タタキメ、内面上半はロクロナデ、下半は平行線文當て具痕がみられる。厚手である。

69は須恵器無台杯口縁部で、11T VI層出土。

- 70 は須恵器無台杯底部～体部下半で、11T VI層出土。底部はヘラ切り無調整。
- 71 は須恵器無台杯底部で、11T VI層出土。底部はヘラ切り無調整。69～71は佐渡小泊窯産であろう。
- 75 は須恵器無台杯口縁部で、12T VI層出土。灰白色を呈し焼成はやや軟質である。小泊窯産？
- 76 はロクロ使用の土師器無台椀底部～体部で、12T VI層出土。底部糸切り無調整か。
- 77 はロクロ使用の土師器小甕で、13T VI層出土。口縁部は体部からくの字形に屈曲して延び、端部は肥厚する。
- 79 はロクロ使用の土師器小甕で、19T VI層出土。体部からのくびれはあるが強くなく、端部は丸くおさめられている。
- 81 は須恵器壺・瓶類の底部とみられる。23T VI層出土。薄手の平坦な底部の端に断面方形の高台が貼り付けられている。高台径は外端部で 14.6cm ほどになる。高台内側の底部外面には爪形の圧痕がめぐっている。
- 82 は須恵器壺・瓶類の肩部で、23T VI層出土。肩の張りは強く、外面には降灰がみられる。
- 83 は須恵器甕肩部で、23T VI層出土。肩の張りは強い器形になると推定される。外面は平行線文タタキメ（木目左上がり斜交）の後カキメが施され、内面は球面をもつものを押し当てる浅いくぼみの連続がみられる。明確な文様と呼べるものは見いだせないが、部分的に直線的な凹凸がある。本来無文の原体にキズが生じたものかあるいはごく部分的な刻みをもつて具痕であると考えられる。
- 84 は須恵器甕体部の小片で、23T VI層出土。非常に厚みがあり、外面は平行線文タタキメ（木目左上がり斜交）内面は無文？當て具痕やナデが見られる。外面のタタキメは 83 よく似ており、83 の同一個体かもしれない。
- 85 は須恵器甕体部の小片で、23T VI層出土。外面は斜格子文タタキメ（木目不明）の後ごく目の細かいカキメ、内面は同心円文當て具痕の上に平行線文當て具痕が見られる。84 に比べると非常に薄手である。
- 86 は須恵器甕体部の小片で、23T VI層出土。灰白色を呈し焼成は軟質である。外面は平行線文タタキメ（木目直交）、内面は同心円文當て具痕がみられる。
- 89 は須恵器甕体部の小片で、26T VI層出土。外面は平行線文タタキメ（木目直交）の上からカキメが施され、内面は同心円文當て具痕がみられる。
- 90 は土師器長甕で、27T VI層出土。同一個体の各部位を用いて図上で復元した。体部中位に最大径がある器形と思われる。口縁部は比較的長く弱く外反する。ロクロ不使用で、体部外面は目の粗いタテハケで、内面調整は残りが悪く不明である。
- 91 は土師器小甕で、28T VI層出土。試掘・確認調査出土品のなかでは最も残りがよい個体で、底部を除き口縁～体部の半分近くが残存している。中位に最大径がある体部からくの字形に屈曲して短い口縁部が直線的に延びる。端部は丸くおさめられるのみである。ロクロ不使用で、体部外面は全体が縱方向のケズリで調整されている。内面調整は器面の残りが悪く判然としない。
- 92 はロクロ使用の土師器鍋口縁部で、29T VI層出土。断面三角形の端部が上方に大きくつまみだされる。

### 第3節 中世以降の陶磁器（図版 25・26 写真図版 25～27）

#### A 中世の陶器

試掘・確認調査で珠洲焼が出土している。11T では珠洲焼の片口鉢（72）、甕体部（73）、壺または甕の底部（74）、23T では壺頸部（87）がある。

72 は珠洲焼片口鉢口縁部で、11T VI層出土。端部は断面三角形を呈する。吉岡編年 II 期ごろか。割れ口の 2 片が磨滅しており、砥石に転用されている。

73 は外面平行線文タタキメ、内面無文當て具痕をもつ珠洲焼の体部小片で、厚みからは甕と思われる。11T VI層出土。割れ口の一辺に部分的に磨滅がみられ、砥石に転用したとみられる。

74 は珠洲焼壺 T 種または甕体部下端の鉢形の部分で、11T VI層出土。外傾の度合いから壺であろうか。外

面にはロクロナデのち左上がりに傾く平行線のタタキメがみられる。内面はロクロナデが認められるのみで当具痕はない。残存部の上端が接合部にあたっており、内面上端に縫ぎ目をなでつけた跡がある。

87は珠洲焼煮T種の口縁部下端～肩部。23T VI層出土。外表面は剥落が多く、内表面は敲打されたように荒れているが、外面は横方向に平行線の刻み目が並ぶタタキメ、内面当具痕はほぼ無文に見えるが、ごく浅い同心円文かもしれない。

## B 近世・近代の陶磁器

試掘・確認調査において出土したものである。基本層序の形成年代などの参考資料として掲載する。3Tでは磁器碗、皿、陶器擂鉢があり4点図化した。13・20・24・29Tからも磁器碗・皿が出土している。

61は磁器碗で、3T VI層出土。染付で草花か輪状の文様が描かれている。肥前か。

62は磁器碗で、3T VI層出土。高台外面に染付で2重の圓線がめぐらされる。

63は磁器皿で、3T VI層出土。染付により松葉文が描かれている。18世紀の肥前系か。

64は陶器擂鉢で、3T VI層出土。全面に褐釉がかけられている。口縁端部近くから施した卸目を幅広くナデ消している。19世紀のものか。

78は小ぶりな磁器碗で、13T VI層出土。染付で外面は線描きの文様、内面には口縁直下に2重の圓線がめぐらされる。

80は磁器皿で、20T VI層出土。見込み蛇の目釉剥ぎで、外面腹部から下は露胎である。18世紀の肥前系か。

88は磁器碗で、24T VI層出土。外面には染付で網目状文が描かれる。

93は磁器碗で、29T I層出土。外面は染付で團線と曲線的な文様が描かれている。

## 第4節 石製品・木製品

### A 石 製 品 (図版27・28 写真図版27・28)

本発掘調査では全9点(敲石+砥石1点、敲石2点、磨石1点、台石2点、軽石製石製品1点)。出土遺構はPit51のみ。その他に礫7点(38g)が出土している。試掘・確認調査出土3点(砥石2点、敲石1点)も報告する。石材は、角田山塊に産出する、敲打具には在地石材の安山岩・流紋岩・凝灰岩・片岩系の石材が用いられ、砥石は緑色凝灰岩・凝灰岩が用いられている。本発掘資料は古代の所産、確認調査資料は古代あるいは中世の可能性がある。

#### 1) 本発掘調査出土石製品(1~8)

1は梢円形の礫を用いた敲石+砥石である。端部に敲打痕を残し、正面および側面の2面に線状痕が残る砥面がある。一部被熱している。削面は新しい可能性がある。2は細長い礫を用いた敲石である。上下端に敲打の痕跡が残る。3は梢円形の礫の端部に敲打痕が剥離状に残る。4は円形礫を用いた摩石である。微細な擦痕が両端に残る。5は円礫を用いた比較的小形の台石である。被熱しており、火を受けた後にその影響で、分割して削れた可能性がある。6は大形の円礫を用いた台石である。意図的に周辺を剥離している。被熱が著しく炭化物も付着する。台石としての役割が終わった後に、炉材として用いられたと考えられる。7は流紋岩製の石核である。縄文時代の石器に見られる剥離痕が正面に1面見られる。8は軽石製石製品である。擦痕は見られないが、何らかを擦るなどの用途が考えられる。軽石はおそらく阿賀野川水系の沼沢火山起源の可能性が高く(立木2014)、阿野川流域から搬入されたと考えられる。

#### 2) 確認調査出土石製品(9~11)

9は長方形の礫を用いた砥石である。断面形は長方形である。砥面が5面確認される。法量的に置砥石として用いられたと考える。10は分割した礫あるいは大形の剥片を用いた砥石である。砥面が5面観察される。上端

部が折断されている。砥面はよく使いこまれ、下端部の方は相当磨り減っている。手持砥石として用いられたと考えられる。11は不正形の礫を用いた敲石である。下端に敲打痕が残る。

### B 木 製 品 (図版28 写真図版29)

木製品は本発掘調査1区でのみ出土した。2点あり、2点図化した。計測値などは別表5に記した。いずれも樹種同定を行っており、その詳細は第VI章第4節に掲載している。

1は1区Pit52に残存していた柱根で、樹種はヤナギ属と同定された。表皮直下とみられる面が残る丸材である。2は包含層出土の板状の製品で、スギ材を用いている。長方形で厚さが49mmある厚手のものである。用途は不明。

面にはロクロナデのち左上がりに傾く平行線のタタキメがみられる。内面はロクロナデが認められるのみで当て具痕はない。残存部の上端が接合部にあたっており、内面上端に縫ぎ目をなでつけた跡がある。

87は珠洲焼煮T種の口縁部下端～肩部。23T VI層出土。外表面は剥落が多く、内表面は敲打されたように荒れているが、外面は横方向に平行線の刻み目が並ぶタタキメ、内面当て具痕はほぼ無文に見えるが、ごく浅い同心円文かもしれない。

## B 近世・近代の陶磁器

試掘・確認調査において出土したものである。基本層序の形成年代などの参考資料として掲載する。3Tでは磁器碗、皿、陶器擂鉢があり4点図化した。13・20・24・29Tからも磁器碗・皿が出土している。

61は磁器碗で、3T III層出土。染付で草花か輪状の文様が描かれている。肥前か。

62は磁器碗で、3T III層出土。高台外面に染付で2重の圓線がめぐらされる。

63は磁器皿で、3T III層出土。染付により松葉文が描かれている。18世紀の肥前系か。

64は陶器擂鉢で、3T III層出土。全面に褐釉がかけられている。口縁端部近くから施した卸目を幅広くナデ消している。19世紀のものか。

78は小ぶりな磁器碗で、13T III層出土。染付で外面は線描きの文様、内面には口縁直下に2重の圓線がめぐらされる。

80は磁器皿で、20T II層出土。見込み蛇の目釉剥ぎで、外面腹部から下は露胎である。18世紀の肥前系か。

88は磁器碗で、24T I層出土。外面には染付で網目状文が描かれる。

93は磁器碗で、29T I層出土。外面は染付で圓線と曲線的な文様が描かれている。

## 第4節 石製品・木製品

### A 石 製 品 (図版27・28 写真図版27・28)

本発掘調査では全9点(敲石+砥石1点、敲石2点、磨石1点、台石2点、軽石製石製品1点)。出土遺構はPit51のみ。その他に礫7点(38g)が出土している。試掘・確認調査出土3点(砥石2点、敲石1点)も報告する。石材は、角田山塊に産出する、敲打具には在地石材の安山岩・流紋岩・凝灰岩・片岩系の石材が用いられ、砥石は緑色凝灰岩・凝灰岩が用いられている。本発掘資料は古代の所産、確認調査資料は古代あるいは中世の可能性がある。

#### 1) 本発掘調査出土石製品(1~8)

1は梢円形の礫を用いた敲石+砥石である。端部に敲打痕を残し、正面および側面の2面に線状痕が残る砥面がある。一部被熱している。削面は新しい可能性がある。2は細長い礫を用いた敲石である。上下端に敲打の痕跡が残る。3は梢円形の礫の端部に敲打痕が剥離状に残る。4は円形礫を用いた摩石である。微細な擦痕が両端に残る。5は円礫を用いた比較的小形の台石である。被熱しており、火を受けた後にその影響で、分割して削れた可能性がある。6は大形の円礫を用いた台石である。意図的に周辺を剥離している。被熱が著しく炭化物も付着する。台石としての役割が終わった後に、炉材として用いられたと考えられる。7は流紋岩製の石核である。縄文時代の石器に見られる剥離痕が正面に1面見られる。8は軽石製石製品である。擦痕は見られないが、何らかを擦るなどの用途が考えられる。軽石はおそらく阿賀野川水系の沼沢火山起源の可能性が高く(立木2014)、阿野川流域から搬入されたと考えられる。

#### 2) 確認調査出土石製品(9~11)

9は長方形の礫を用いた砥石である。断面形は長方形である。砥面が5面確認される。法量的に置砥石として用いられたと考える。10は分割した礫あるいは大形の剥片を用いた砥石である。砥面が5面観察される。上端

## 第VI章 自然科学分析

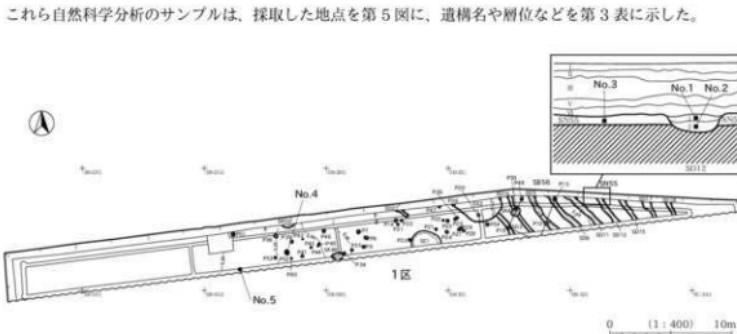
### 第1節 概 要

赤館砂山遺跡では、検出された遺構や出土遺物の状況に合わせ、自然科学分析を実施した。遺跡や遺構の性格、遺物の年代、遺跡周辺の自然環境や植生等を効果的に把握することを念頭に置き、内容を検討した。それぞれの概要と具体的な目的については下記の通りである。

今回の調査では、連続した9条の溝状遺構が検出された。この溝群は古代の烟跡と推定されることから、農耕の可能性を検討するため、植物珪酸体分析と花粉分析を行った。耕作が行われていた場合、これらの分析によって栽培されていた植物の特定も期待された。また、植物珪酸体分析と花粉分析については赤館砂山遺跡周辺の植生と環境の復元も目的とした。試料採取地点は歎間の溝と思われるSD12と、連続する歎としたSN55のうちSD12に隣接する地点である。いずれも調査区北壁から土壤サンプルを採取した。

このほか、本製品の分析も行った。Pit52で柱根が、3B-2G22のVI層からは板状木製品が出土している。これらの木製品について、当時の木材利用の状況と周辺植生を検討するため、樹種同定を行った。Pit52で出土した柱根は、遺構の実年代の把握のため放射性炭素年代測定も行った。

植物珪酸体・花粉分析については、分析対象となる遺構の断面実測図に採取した土壤サンプルの位置を記録した。また、デジタルカメラにて採取状況や採取後の断面などの写真撮影も行った。樹種同定・放射性炭素年代測定試料は、出土した木製品を洗浄後、実測に支障のない範囲を5mm角程度に切り取り、分析試料とした。



第5図 赤館砂山遺跡自然科学分析サンプル採取地点

第3表 赤館砂山遺跡自然科学分析一覧表

試料 No.	区	遺構	層位	グリッド	時代	分析種別・分析機関			
						第2節 植物珪酸体	第3節 花粉	第4節 樹種	第5節 $^{14}\text{C}$
1	1	SD12	1	3B-237	古代	○	○		
2	1	SD12	2	3B-237	古代	○	○		
3	1	SN55	1	3B-236	古代	○	○		
4	1	Pit52	1	3B-2G19				○	○
5	1	-	VI	3B-2G22				○	

## 第2節 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

### A はじめに

古環境研究所 松田隆二

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山 1984）。

赤錆砂山遺跡の発掘調査では、奈良時代から平安時代とされる溝状遺構が検出され、当時の烟跡の可能性が想定された。そこで、当該遺構における農耕の可能性を検討する目的で、植物珪酸体分析を行うことになった。

### B 試 料

分析試料は、1区 SD12 の1層と2層、1区 SN55 の1層より採取された3点である。遺構の時期は奈良時代から平安時代の層準である。試料採取箇所は第5図に示した。

### C 方 法

植物珪酸体分析は、ガラスピーブ法（藤原 1976）を用いて、次の手順で行った。

- (1) 試料を  $105^{\circ}\text{C}$  で 24 時間乾燥（絶乾）する。
- (2) 試料約 1g に直徑約  $40\mu\text{m}$  のガラスピーブを約 0.02g 添加する。
- (3) 電気炉灰化法 ( $550^{\circ}\text{C} \cdot 6$  時間) により脱有機物処理を行う。
- (4) 超音波水中照射 ( $300\text{W} \cdot 42\text{kHz} \cdot 10$  分間) により分散する。
- (5) 沈底法により  $20\mu\text{m}$  以下の微粒子を除去する。
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作製する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が 500 以上になるまで行った。これはほぼブレバラーート 1 枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料 1g 中の植物珪酸体個数（試料 1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは 1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： $10^5\text{g}$ ）を乗じて、単位面積で厚層 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山 2000）。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は 2.94（種実重は 1.03）、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、スキ属（スキ）は 1.24、メダケ節は 1.16、チマキザサ節は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である（杉山 2000）。

### D 結 果

同定された植物珪酸体は、イネ、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、シバ属型、タケアシ科ササ属（メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を第4表、第6図に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を示す（第7図）。以下に、植物珪酸体の検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

## 1) 1区 SD12: 1層、2層

1層では、相対的にはススキ属型がやや多く、イネ、キビ族型、ヨシ属、シバ属型、メダケ属型、チマキザサ属型およびミヤコザサ属型が認められた。密度的にはいずれの分類群も低い値である。2層では、ヨシ属、ススキ属型、メダケ属型およびミヤコザサ属型が検出されているが、いずれの分類群も低い密度である。

## 2) 1区 SN55: 1層

ヨシ属がやや高い密度である。イネ、キビ族型、ススキ属型、メダケ属型、チマキザサ属型およびミヤコザサ属型が検出されているが、いずれの分類群も低い密度である。

## E 考 察

## 1) 農耕の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものは、イネ、ムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクヒエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。本遺跡では、これらのうちイネのみがSD12の1層とSN55の1層で検出された。植物珪酸体密度は、いずれも600個/gと低い値である。植物珪酸体分析では、通常、試料1gあたり5,000個以上の密度でイネの植物珪酸体（プラント・オバール）が検出さ

れた場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断される（杉山2000）。こうしたことから、これらの地点で水田稻作が行われていた可能性を積極的に否定することはできない。ただし、上記基準値は水田稻作を前提としたものであり、連作を行えない畠稻作ではこの限りではない。調査地が溝状遺構であること、さらに第3節の花粉分析の結果も踏まえると、稻作の系統（陸稲）による稻作が行われていた可能性も否定できない。なお、イネ以外の栽培植物に由来する植物珪酸体は未検出であることから、ヒエ、アワ、キビ、ムギ類等の雜穀の栽培については言及できない。

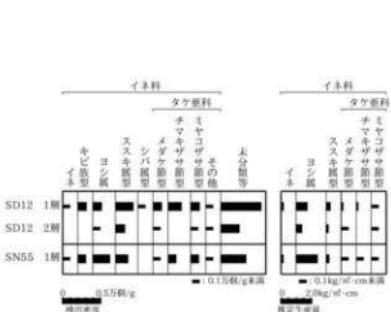
イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、キビ族型などその他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

## 2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ属型、チマキザサ属型、ミヤコザサ属型などが検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、SD12の1層とSN55の1層では量的には少ないものの、おむねヨシ属が優勢である。これらの結果から、SD12の1層、SN55の1層の

第4表 赤鎧砂山遺跡の植物珪酸体分析結果

分類群（和名・学名）	検出密度（単位：×100個/g）		
	SD12 1層	SD12 2層	SN55 1層
イネ科	Gramineae (Grasses)		
イネ	<i>Oryza sativa</i>	6	6
キビ族型	<i>Panicene type</i>	12	11
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	12	23
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	24	13
シバ属型	<i>Zoysia type</i>	6	
タケ科	Bambusoideae (Bamboo)		
メダケ属型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	12	6
チマキザサ属型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	18	11
ミヤコザサ属型	<i>Sasa sect. Crassimodi</i>	12	6
その他	Others	6	6
未分類等	Unknown	54	25
植物珪酸体総数		162	62
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/af-cm）			
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.18	0.17
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.76	0.40
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.30	0.16
メダケ属型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.14	0.07
チマキザサ属型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.14	0.09
その他	<i>Sasa sect. Crassimodi</i>	0.04	0.02

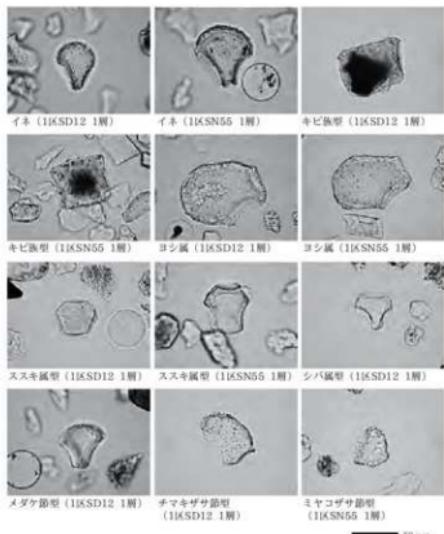


第6図 赤鎧砂山遺跡の植物珪酸体分析結果

堆積当時は、ヨシ属が生育するような比較的湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはササ属（メダケ節、チマキザ節など）やススキ属が生育していたと推定される。なお、SD12 の 2 層についてはいずれの植物珪酸体も低密度であることから、イネ科草本植物の生育には適さない環境であったか、土壌の堆積速度が速く、短期間に堆積した可能性が考えられる。

## F まとめ

植物珪酸体分析の結果、SD12 の 1 層と SN55 の 1 層でイネが少量検出された。このことから、当時は調査地の周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形でイネの植物珪酸体が混入した可能性が考えられた。なお、溝状遺構であることから畑稲作（陸稲）の可能性も積極的ではないが認められた。また、これらの層では、調査地はヨシ属が生育するような比較的湿潤な環境であり、周辺の比較的乾燥したところにはササ属（メダケ節、チマキザ節など）やススキ属が生育していたと推定された。



第 7 図 赤錦砂山遺跡の植物珪酸体（プランクト・オ・パール）

古環境研究所 金原正子

## A はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。しかし、風媒花や虫媒花などの散布能力などの差で、庭園などの狭い範囲の植生に由来する結果が得られるなど、陸上の堆積物が分析に適しないわけではない。

赤錦砂山遺跡では、発掘調査において奈良時代から平安時代とされる溝状遺構が検出された。ここでは、当該遺構における植生と環境の推定、さらに農耕を検討する目的で花粉分析を実施した。

## B 試 料

分析試料は、1 区 SD12 の 1 層と 2 層、1 区 SN55 の 1 層より採取された 3 点である。試料採取箇所は第 5 図に示した。

## C 方 法

花粉の分離抽出は、中村（中村 1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

(1) 試料から  $1\text{cm}^3$  を採量

- (2) 0.5% リン酸三ナトリウム (12水) 溶液を加え 15 分間湯煎
- (3) 水洗処理の後、0.25mm の篩で裸などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- (4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- (5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理 (無水酢酸 9 : 過硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎) を施す
- (6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- (7) 清洗にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- (8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉 [島倉 1973]、中村 [中村 1980] を参照して行った。イネ属については、中村 [中村 1974, 1977] を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

## D 結 果

### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 13、樹木花粉と草本花粉を含むもの 1、草本花粉 12、シダ植物胞子 2 形態の計 28 である。これらの学名と和名および粒数を第 5 表に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 8 図に示す。主要な分類群の顕微鏡写真を第 9 図に示す。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

#### [樹木花粉]

ツガ属、マツ属複雑管束亞属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亞属、ニレ属-ケヤキ、ニシキギ科

#### [樹木花粉と草本花粉を含むもの]

#### クワ科-イラクサ科

#### [草本花粉]

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラン科、セリ亞科、タンボボ亞科、キク亞科、ヨモギ属

#### [シダ植物胞子]

#### 單条溝胞子、三条溝胞子

### 2) 花粉群集の特徴

#### a 1 区 SD12:1 層、2 層

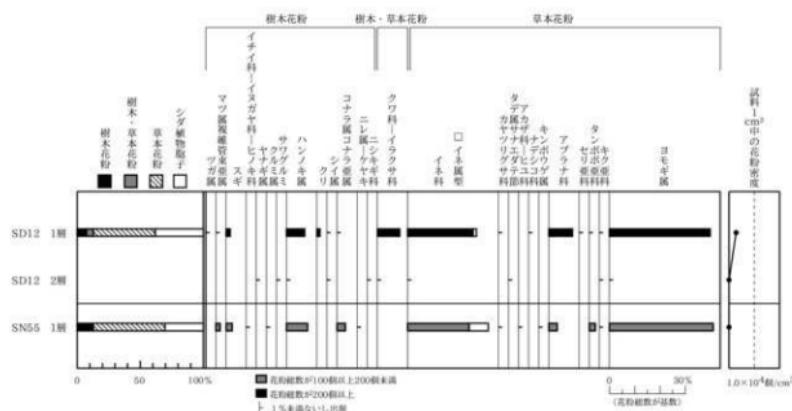
下部より、2 層では密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、樹木花粉のハンノキ属、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科、草本花粉のヨモギ属、イネ科がわずかに出現する。また、シダ植物单条溝胞子がやや多い。上部の 1 層は、樹木花粉が 7%、草本花粉が 49%、シダ植物胞子が 38% を占める。樹木花粉は少なく、ハンノキ属を主に、スギやクリなどが出現する。草本花粉では、ヨモギ属が優占し、次いでイネ科 (イネ属型を含む) の出現率が高く、アブラン科が伴われる。他に樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が比較的多い。

#### b 1 区 SN55:1 層

樹木花粉が 13%、草本花粉が 57%、シダ植物胞子が 30% を占める。樹木花粉は少なく、ハンノキ属、コナラ属コナラ亞属、スギ、マツ属複雑管束亞属が出現する。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科 (イネ属型を含む) の

第5表 赤館砂山遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	SD12		SN55
			1周	2周	1周
ArboREAL pollen	樹木花粉				
Tsuga	ツガ属		1		
Fir subgen. <i>Diplophyllo</i>	マツ属複葉系亜属		1		2
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		4		3
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科				1
<i>Salix</i>	ヤマモモ属			1	
<i>Juglans</i>	クルミ属				1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サルガム属			1	
<i>Aleurites</i>	パンノキ属		17	2	10
<i>Castanea crenata</i>	クリ		3		
<i>Castanopsis</i>	シタ属		1	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コラガ属コナラ属		1		4
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属ケヤキ				1
Celastraceae	ニジギヤ科			1	
ArboREAL・NonarboREAL pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科イクラクサ科		21	3	
NonarboREAL pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科		61	3	29
Oryza type	イネ属		3		9
Cyperaceae	カヤツリグサ科		1		1
<i>Polygonum</i> sect. <i>Pericarpio</i>	タデ属サンニテ節			1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科ヒユ科				1
Caryophyllaceae	ナデシコ科		1		
Ranunculus	キンポウゲ属				1
Cruciferae	アブラナ科		22		4
Aipoideae	セリ科		1		
Lactuceoideae	タンポポ科		2		3
Asteroidae	キク科		1	1	1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属		94	4	49
Fern spore	シダ植物孢子				
Monocolate type spore	単孔孢子		142	38	49
Trilete type spore	三孔孢子		3	2	3
ArboREAL pollen	樹木花粉		28	6	22
ArboREAL・NonarboREAL pollen	樹木・草本花粉		21	3	0
NonarboREAL pollen	豆形花粉		186	9	98
Total pollen	花粉總數		235	18	120
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度		$1.4 \times 10^3$	$1.1 \times 10^3$	$9.9 \times 10^2$
Unknown pollen	未定花粉		6	1	5
Fern spore	シダ植物孢子		146	40	62
Holmehit eggs	寄生虫卵		(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞		(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣		(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片		(+)	(+)	(+)
樹脂植物遺体 (Charcoal・woods fragments)	( $\times 10^3$ )		0.6		
未分解遺体片			18.5	5.0	28.4
分解質遺体片					1.7
炭化遺体片 (微細炭)					



第8図 赤館砂山遺跡の花粉ダイアグラム

出現率が高く、アブラナ科、タンボボ亜科が低率に伴われる。イネ属型の占める割合はやや高い。

### E 花粉分析から推定される植生と環境

#### 1) 1区 SD12: 1層、2層

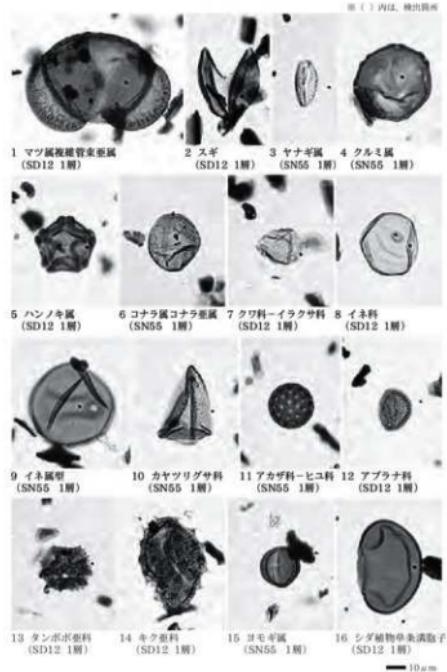
周囲は樹木が少なく、草本が優勢である。乾燥した畑地や路傍に生育するヨモギ属を主にイネ科が多く、栽培植物を含むアブラナ科もやや多いため、周囲には畑地が分布し、アブラナ科の栽培植物などが栽培されていたと推定される。SD12周辺は、イネ科やカナムグラやイラクサ科などの雑草が生育していたと考えられる。水生植物に乏しく、季節的や引水時にのみ流れる溝の可能性が示唆される。樹木はやや遠方に、ハンノキ属が湿地林または湿地性の二次林として分布し、周辺山地にはスギ林が分布していたと推定される。

#### 2) 1区 SN55: 1層

周囲は樹木が少なく、乾燥した畑地や路傍に生育するヨモギ属を主にイネ科が多く、イネ属型、栽培植物を含むアブラナ科もやや多いため、周囲には畑地と水田の分布が推定される。アブラナ科が散布性のない虫媒花植物であることから、近隣に畑地が分布し、やや遠方に水田の分布が推定されるが、田畠輪換であった可能性もある。周辺山地にはスギ林が分布するが、やや遠方でコナラ属コナラ亜属、マツ属複管束亜属の二次林もやや増加していた。ハンノキ属は湿地林または湿地性の二次林として分布していたと考えられる。

### F まとめ

赤鎧砂山遺跡の1区 SD12: 1層、2層と1区 SN55: 1層で花粉分析を行った結果、両地点の花粉群集は比較的一致し、周囲は草本が優勢で、畑地と水田の分布が示唆された。畑地はヨモギ属、イネ科、アブラナ科が生育し、アブラナ科の栽培植物（アブラナ、ダイコン、カブなど）が栽培されていたと推定された。SD12周辺にはカナムグラやイラクサなどのクワ科ーイラクサ科の雑草が分布していた。周辺山地にはスギ林が分布するが、コナラ属コナラ亜属、マツ属複管束亜属、クリの二次林もやや増加し、ハンノキ属の湿地林または湿地性の二次林が低地部に分布していた。



第9図 赤鎧砂山遺跡の花粉・胞子

## 第4節 樹種同定

### A はじめに

古環境研究所 金原美奈子・金原裕美子

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、赤鉛砂山遺跡より出土した木製品について樹種同定を行い、当時の木材利用ならびに周辺植生について検討する。

### B 試料と方法

試料は、赤鉛砂山遺跡より出土した柱根(Pit52)、板状木製品(3B-2G22 VI層)の2点である。遺跡の時期は奈良時代から平安時代である。試料の詳細を第6表に記す。

樹種同定の方法は次のとおりである。試料からカミソリを用いて新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(極目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40~1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

### C 結 果

第6表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す(第10図)。以下に同定根拠となった特徴を記す。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 柱根(Pit52)

小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2~3個放射方向に複合し散在する散孔材である。道管の穿孔は單穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の特徴からヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。材は軽軟で、耐朽性、保存性は低く、建築、器具などに用いられる。

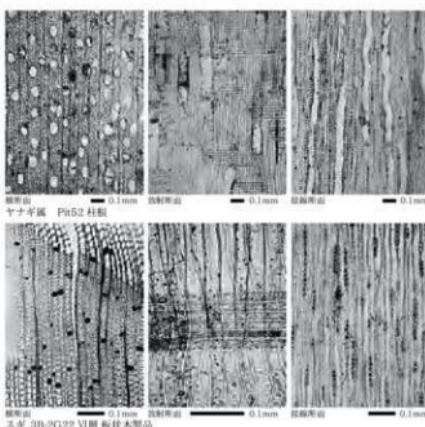
スギ *Cryptomeria japonica* D.Don

スギ科 板状木製品(3B-2G22 VI層)  
仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~14細胞高ぐらいたる。樹脂細胞が存在する。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本

第6表 赤鉛砂山遺跡における木材同定結果

試料No.	遺構名	種類	結果(学名/和名)
4	Pit52	柱根	<i>Salix</i> ヤナギ属
5	3B-2G22 VI層	板状木製品	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ



第10図 赤鉛砂山遺跡の木材

特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

## D 所 見

同定の結果、赤錆砂山遺跡の木製品および柱根は、スギとヤナギ属であった。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材で、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。日本海側では古くからスギが多用される傾向にある。ヤナギ属は、柱根に利用されている。ヤナギ属は耐朽性・保存性は低く、切削・加工の容易な材である。新潟県内では、青田遺跡や藏ノ坪遺跡で縄文時代から古墳時代にかけてヤナギ属が柱材として用いられる例がみられるが、律令期以降は柱などの建築部材としての利用は少ない。律令期以降では、ヤナギ属が柱材として利用された例は極めてめずらしい。スギは温帯に広く分布し、特に温帯中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹で、肥沃で温潤な土壤を好む樹木である。ヤナギ属は流路沿いや湿地、川辺などの水辺に分布する落葉高木である。どちらの樹木も、遺跡周辺ないし周辺地域に生育し、比較的容易にもたらされたと推定される。

## 第5節 放射性炭素年代（AMS測定）

### A 測定対象試料

(株) 加速器分析研究所

新潟県新潟市に所在する赤錆砂山遺跡の測定対象試料は、Pit52から出土した柱根の残存する最外年輪から採取された木片1点である(第7表)。

### B 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第7表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### C 測 定 方 法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とパックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### D 算 出 方 法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からの差を千分偏差(%)で表した値である(第7表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を

基準年 (0yrBP) として選ばれた年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 $\delta^{13}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 7 表に、補正していない値を参考値として第 8 表に示した。 $\delta^{13}\text{C}$  年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 $\delta^{13}\text{C}$  年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の  $\delta^{13}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $\delta^{13}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい ( $\delta^{13}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 ( $\delta^{13}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を第 7 表に、補正していない値を参考値として第 8 表に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の  $\delta^{13}\text{C}$  濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $\delta^{13}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 $\delta^{13}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma=68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma=95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $\delta^{13}\text{C}$  年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下 1 桁を丸めない  $\delta^{13}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13 データベース [Reimer et al. 2013] を用い、OxCalv4.3 較正プログラム [Bronk Ramsey 2009] を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 8 表に示した。历年較正年代は、 $\delta^{13}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## E 測定結果

測定結果を第 7・8 表に示す。

試料の  $\delta^{13}\text{C}$  年代は、 $350 \pm 20$  yrBP、历年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、1488~1626 cal AD の間に 2 つの範囲で示される。試料の炭素含有率は 57% のおおむね適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第 7 表 赤鎧砂山遺跡における放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正あり)

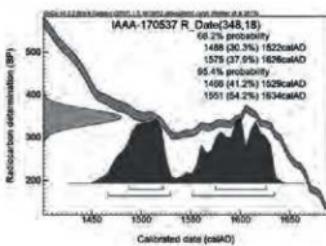
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					(AMS)	Libby Age (yrBP)	
IAAA-170537	No.4	IHK_Pn52_1層 3B-2G19	木片 (柱材)	AAA	-28.52 ± 0.24	350 ± 20	95.76 ± 0.22

[IAA登録番号 : #8604]

第 8 表 赤鎧砂山遺跡における放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正、历年較正用  $\delta^{13}\text{C}$  年代、較正年代)

測定番号	試料名	採取場所	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし	历年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 年代範囲	$2\sigma$ 年代範囲
			Age (yrBP) pMC (%)			
IAAA-170537	No.4	IHK_Pn52_1層 3B-2G19	410 ± 20 95.07 ± 0.21	348 ± 18	1488calAD - 1523calAD (30.3%) 1575calAD - 1626calAD (37.9%)	1466calAD - 1529calAD (41.2%) 1551calAD - 1634calAD (54.2%)

[参考値]



第 11 図 赤鎧砂山遺跡における历年較正年代グラフ (参考)

## 第VII章 総括

### 第1節 赤鎧砂山遺跡の遺構について

赤鎧砂山遺跡1区では、調査区東側で北西から南東方向に伸びる溝群が検出された。溝群は西からSD3・16・5・6・11・12・15・17・18の9条で、ほぼ等間隔で連続している。この範囲の調査区壁面を精査したところ、溝と溝の間に歓状の高まりが確認されたため、これら一帯を烟跡(SN55)とし、溝群は歓間の溝とした。調査区が狭小のため烟跡の規模については不明な点が多いが、現況で最も長いSD6が長さ3.41mで、両端がさらに調査区外に伸びていることから、ほかの溝もSD6と同様の長さ以上になると推測される。烟跡の幅はSD3からSD18まで13.72mで、東側は調査区外に続く可能性もある。それぞれの溝の幅は0.4m前後、深度は0.2m前後で、断面形は弧状を呈する。溝と溝の間隔は約1mで、歓は高さ0.08～0.14mを測る。

この烟跡を重複して掘立柱建物跡を検出した。切り合いによる両者の構築順は不明瞭であるが、溝完掘後に掘立柱建物跡の柱穴を検出できた例もあり、烟跡が新しいと推定される。いずれも古代の土器が出土しており、掘立柱建物廃絶後、それほど期間を置かず煙が作られたと考える。

また、烟跡における栽培植物を検討する目的で、SD11-12間の歓とSD12の埋土で土壤の自然科学分析を行ったところ、イネの植物珪酸体が検出された。しかし、検出密度が低く、稻作を行っていると積極的に肯定できない値とされた。ただし、これは「水田稻作」を基準とした数値で、連作を行えない「畑稻作(陸稻)」の場合は明確な基準がないとのことである(第VI章第2節)。同地点の花粉分析ではイネ科花粉の出現率が高いことが示されている(第VI章第3節)。これらの結果を踏まえると、稻作による稻の栽培が行われていた可能性は十分に考えられる。また、花粉分析ではイネ科のほかにアブラナ科の花粉が検出された。アブラナ科は散布性のない虫媒花植物であることから、分析試料を採取した歓でアブラナ科が栽培されていた可能性は高いと言える。

SN55では畑稻作(陸稻)が行われていた可能性が積極的ではないが認められた。また、アブラナ科の栽培も推定されている。陸稻が連作を行えないことを考慮すると、アブラナ科の栽培植物(アブラナ・ダイコン・カブなど)と輪作していた可能性も考えられる。

周辺の遺跡では下新田遺跡や林付遺跡で烟跡が確認されている。下新田遺跡(龍田・長澤ほか2015)では水田跡とともに烟跡を検出した。調査区は赤鎧砂山遺跡同様、狭小であるが、調査区壁面に連続して20条以上、約40mに渡り歓が確認された。同じ調査区の低地部分では水田跡群が7条も確認されていることから、水田と畑が広範囲に広がっていることが想定される。一方、林付遺跡(相田ほか2012)では上層で大型の掘立柱建物に隣接して烟跡が検出された。確認された畑は幅約2m、長さ約8mで、2条の小溝で構成されている小規模なものであった。これに井戸や土坑が伴って集落が構成されている。また、下層では平均して幅約8m、長さ約15mの烟跡が複数確認されており、一部に小型の掘立柱建物が伴っている。

発掘調査での烟跡の検出形態としては、「水田とともに広がる大規模な畑」と「集落内に散在する小規模な畑」の2つのタイプが確認されている(奈良文化財研究所2010)。下新田遺跡は前者、林付遺跡は後者の様相を示している。赤鎧砂山遺跡については、調査区の西側が低地で烟跡は微高地の縁辺に位置しており、居住域からは離れた地点であると推察される。規模については、畑の幅が13m以上あり、林付遺跡よりも大きい単位で確認されている。よって、赤鎧砂山遺跡は下新田遺跡に近い様相を示しているといえる。下新田遺跡と同じタイプとすれば、今回の調査では畦畔などの遺構は確認できなかったが、赤鎧砂山遺跡周辺の低地でも水田が分布していた可能性はあると考えられる。

## 第2節 赤鎧砂山遺跡出土の古代土器について

**出土量と構成比** 古代の土器には須恵器・土師器・黒色土器がある。本発掘調査では1区・2区それぞれから出土したが、2区では包含層から土師器が破片数で5点、2.0g出土したのみで、大部分が1区出土である。1区では破片数660点、7140.0gの出土であり、1・2区合計した総破片数は665点、総重量7142.0gとなる。

1・2区総破片数、総重量について遺構出土と包含層出土に分けてみると、遺構9点(1.4%)、47.0g(0.7%)、包含層656点(98.6%)、7095.0g(99.3%)であり、大部分包含層出土である。次に種別ごとにみてみると、須恵器24点(3.6%)、595.0g(8.3%)、土師器640点(96.2%)、6535.0g(91.5%)、黒色土器1点(0.2%)、12.0g(0.2%)となり、点数比、重量比ともに土師器が9割を超える。

機能別にみると、食膳具47点(7.1%)、672.0g(9.4%)、煮炊具614点(92.3%)、6419.0g(86.1%)、貯蔵具4点(0.6%)、51.0g(0.7%)となる。口縁部残存値みると食膳具24%、煮炊具76%で約1:3の比率になる。底残値では食膳具61.0%、煮炊具39%で逆転するが、食膳具は底部残存値の方が大きい値を示すので底残値をとり、煮炊具は口残値をとることにすると、食膳具41%、煮炊具59%、逆にともに小さい方をとると、偶然かもしれないが、食膳具42%、煮炊具58%ではほぼ等しい値になる。この約2:3という比率がこの中では実態に近い値ではないだろうか。

**出土分布** 試掘・確認調査での古代土器の出土状況をみると、点数が最も多かったのは9Tで土師器のみ41点、23・28Tがともに27点でそれに次ぐが、23Tでは須恵器が4割弱を占めるのに対し28Tは土師器のみである。以下11T13点、12・27Tがともに10点で11・12Tでは須恵器が約2割である。その他のトレーニングでは6点以下の出土であった。

9・11・12Tは近接しており、8Tも含めるとこれら4トレーニングで試掘・確認調査出土古代土器の半数が出土している。また、27・28Tからもある程度まとめて出土していることから、遺跡範囲の西よりと北東よりに古代土器分布の中心があり、西側のほうが規模が大きいと言える。須恵器の出土しているのは11・12・23・26Tで、須恵器は中央から西側に多い。このうち11T・12Tでは9世紀の須恵器無台杯が主体だが、23Tでは須恵器壺瓶類や甕が多く、器形にも多様性がある。

図版15に本発掘調査における小グリッド別の包含層出土土器重量分布図を示したが、1区の3B-2G15に最も集中し、そこを境に調査区の西側に多く、東側は少ないという傾向がみられる。土器が出土した遺構はSK50、SD17、Pit10、Pit39、Pit52であり、このうちSK50、Pit39、Pit52が最集中区の3B-2G15に隣接する3B-2G14・19に近接して存在する。本発掘調査区は試掘・確認調査8・9・11・12・14Tの南に近接しており、試掘・確認調査での遺物出土状況と合致している。

**出土土器群の特徴と年代的位置づけ** 今回出土した土器群は、ほとんどが包含層出土であり、出土状況から資料体の同時性を検討することはできないが、蒲原郡域の古代土器の編年については春日真実氏の研究〔春日1999・2015など〕があり、また近年西蒲区では新道遺跡〔相田2015〕、下新田遺跡〔龍田ほか2015〕、島瀬遺跡〔遠藤ほか2016〕、仲歩切遺跡〔龍田2016〕、秋葉区では沖ノ羽遺跡〔遠藤・臨本ほか2016〕など7～8世紀代の土器の出土例が増えている。それらとの対比で今回出土した土器群の年代について考えてみたい。

図版22-2の須恵器無台杯は厚手で丸底のもので、類例を知らないが、金属器模倣の流れで理解できるものとすれば7世紀のものである可能性もある。

底部周縁に方形の高台がつく図版22-5の須恵器有台杯の類例としては、沖ノ羽遺跡第24次調査の1396、図版22-8の須恵器杯蓋のように扁平に近い擬宝珠形つまみをもち径の大きいものも沖ノ羽遺跡第24次調査の896などに近く、これらはいずれも春日氏の中期（以下～期はすべて春日編年）に位置づけられている。8は沖ノ羽例よりさらに径が大きい18cmもあるものなのでさらに古い様相といえる。8については、つまみの作り方

に特徴があることを先述したが、上越市三角田遺跡（浜田・細井ほか2006）のC区下層SD113の1などもつまみの下端を深くえぐるようにしてあり、ある程度の分布をもつ可能性がある。今後注意深く見ていくことで特定の産地や時期の技法としてとらえうるかもしれない。

新しい時期のものでは、佐渡小泊窯産とみられる須恵器無台杯がV～VI期、図版22-6の深い有台杯も佐渡小泊窯産とみられ、VI期ごろであろう。

ロクロ不使用の土師器の杯は粘土紐の継ぎ目を残すものが多く、形態に多様性があり個体差も大きいのが特徴である。ロクロ不使用の土師器長甕にも多様な口縁形態がみられる。

〔春日2015〕では、西蒲原地域の土師器煮炊具について、古墳時代後期以来の伝統を受け継いだハケメ調整のA系、須恵器技法のB系、ハケメ調整を多用し口縁部に面をもつC系、外面にヘラケズリを行うもので、関東地方の影響を受けたと考えているD系、底部に木葉痕があるものや外面ヘラミガキを行うもの、頸部に段や沈線があるものなど東北地方の影響をうけたものを一括したE系、北陸以西の近江・畿内などの影響を受けたものを一括したF系に分類して、それらの消長を検討しており、8世紀初頭まではA系のみでB系がみられないこと、E・F系が確認できるのは8世紀前葉までで、それ以後は減少傾向にあること、D系も8世紀前葉までの例が多いが、量的には多くないながらもその後も散発的に出土しているようであることを指摘された。

赤鎧砂山遺跡で出土したロクロ不使用の土師器の調整技法をみるとハケメ調整のものが主体であるが、ヘラケズリのみのものも少なからず存在しており、「く」字状にシャープに屈曲する頸部をもつヘラケズリ調整の小甕（図版26-91）などはD系の例と言える。ヘラミガキを行うものや頸部に段や沈線をもつものはないが、木葉痕をもつ底部は存在するのでE系もある。ロクロ使用の煮炊具口縁部には8世紀代のB系があるかもしれないが、はつきりはしない。

さて、図版23-30の長甕は丸底となるものであるが、ハケメ調整を多用しつつ丸底化にはケズリを併用している点や、口縁部は長く外反して丸くおさめるのみで端部に面を持たない点で、「西古志型煮炊具」を含むC系の定義には含まれないものである。A系の技法と口縁部形態を残しつつ丸底の長甕を実現したものと言える。C系とは時間差または地域差があるということかもしれない。丸底形態をB系の影響と考えるならば、間接的にB系の存在を示すことになり、8世紀前葉以降のものと考えるべきであろう。いずれにせよ30が製作された当時、長甕においては丸底にすることが最も重要なポイントで、それがおかれた自然環境・社会的環境のなかで可能な方法でそれを実現していたということではないだろうか。春日氏が指摘するようにB系・C系がともに須恵器窯周辺で作られたと考えられる〔春日2015〕とすれば、当遺跡はB系・C系を出土する遺跡に比べて須恵器窯からは遠い地域であった、または住民が須恵器生産との接点が少ない集団であったということを示す可能性がある。

ロクロ使用の食膳具では、図版24-52の無台椀がVI-2・3期か。図版24-53もVI～VII期とみられる。

ロクロ使用の土師器煮炊具にも口縁端部の作りには単純に外反するもの、つまり出しが明瞭なものがあり、V～VI期にかけてある程度の時期幅はありそうである。当遺跡でいつから須恵器技法の煮炊具が出現するのか気になるところであるが、その点については今後良好な資料の出土を期待したい。

### 第3節 赤鎧砂山遺跡の様相について

赤鎧砂山遺跡は、調査面積の制約から掘立柱建物は1棟の検出にとどまるが、調査面積に対して遺構数が定量あり、土器の出土も多いことなどから、古代・中世の集落の一部であったと考えられる。土器の考察（第Ⅶ章第2節参照）から、本発掘調査区内での遺跡の存続時期は、古代では、飛鳥・奈良時代（7世紀後半から8世紀前半）、平安時代（9世紀代）の概ね2時期に分離できる。また、検出された遺構は考察（第Ⅶ章第1節参照）のとおり、平安時代の掘立柱建物（SB56）が烟（SN55）を切ることからさらに細分される。Pit52に残る柱根の年代測定は、

中世（15～16世紀）の年代値を示している。確認調査で出土した土器には珠洲焼の甕・鉢なども出土しており、遺跡の存続時期は中世まで続くことが確実である。それ以降の土地利用は、断面の土層観察から、近隣を流れる西川由来の洪流水堆積物が、幾層も確認でき荒地となっていた時期を経て、近世に再度、圃場として開発され、現代にいたるまで、水田・畑など耕作地に利用されていたようである。

古代と考えられる畠（SN55 および SD12）の花粉分析（第VI章第3節参照）の結果、アブラナ科（アブラナ・ダイコン・カブなど）の植物が栽培されていたと推定されている。また、植物珪酸体分析（第VI章第2節参照）の結果、陸稲栽培の可能性もあるが、近隣で水稻栽培が行われた可能性が指摘されている。

遺跡周辺の環境も花粉分析・植物珪酸体分析から明らかになっている。コナラ・クリ・ハンノキなどの広葉樹とスギなどの針葉樹が周辺に分布し、ハンノキなどの湿地性の樹木が確認できることから、旧河道や渓谷などが周辺に存在した可能性がある。

遺跡周辺では近年、複数の発掘調査が行われており、約1km北に位置する新道遺跡〔相田2015〕では、8世紀前半の遺跡が確認されている。約3km北東の旧鎧潟北岸に位置する大島橋遺跡では7世紀後半の遺物が出土している〔山口・前山1984〕。約4km東の旧鎧潟南岸に位置する島瀬遺跡では7世紀代後半から8世紀前半の遺物が出土している〔遠藤・臨本ほか2016〕。8世紀前半と9世紀後半の複数の時期が確認されている集落跡とされる下新田遺跡〔龍田ほか2015〕が、約5km東にあり、東に奈良から平安時代の8世紀後半から9世紀後半の複数時期が確認され、「川井の庄」莊園関連と考えられる林付遺跡〔相田ほか2012〕などの調査成果がある。

飛鳥から平安時代にかけての遺跡が自然堤防上に点々と分布している。特に注目されるのは、この地域では、7世紀後半から8世紀前半の飛鳥時代から奈良時代の遺跡が増加傾向にあることが、確認されていることである〔春日2014〕。同じ遺跡密集地帯の秋葉区沖ノ羽・細池寺道上遺跡群〔遠藤・澤野ほか2016、立木・奈良ほか2017〕などは、複数年の発掘調査を続けてきたが、当該期の遺跡は、ほとんど発見されていない。遺跡立地的な違いの問題も考えられるが、極端な現象である。当期は、文献史学の成果などを参考にすると「渟足櫓」が機能していた時期にあたる〔小林2010〕。前代の古墳時代後期の遺跡数も極端に少ない。沖積平野側に当期の人々が開発・進出をおもむいたのは、この社会的な変化が大きいと考えられる。また、十分に解明されていないが、他地域からの移民を養うための開発や、古代の官道がこの地域にありそこを中心に開発が進んだ側面も考えられようか。内水面交通網も潟湖や小河川が交通手段として用いられていることなども考慮に入れると赤館砂山遺跡は当時の交通の要所的な場所であったのかもしれない。今後、大規模な遺跡調査などで様相が明らかになることを期待したい。

## 引用・参考文献

- ア 相田泰臣 2015 「II 2 (4) 新道遺跡 第1次調査」『新潟市文化財センター年報』第2号 新潟市文化財センター  
相田泰臣ほか 2012 「林付遺跡 第2次調査－新潟市立鶴東南小学校体育館建設工事に伴う林付遺跡第2次発掘調査報告書－」新潟市教育委員会  
相田泰臣・渡邊朋和ほか 2014 「史跡 古津八幡山遺跡発掘調査報告書－第15・16・17・18・19次調査－」新潟市教育委員会  
相田泰臣・前山精明 2003 「菖蒲塚古墳・隼人塚古墳－2002年度確認調査の概要」卷町教育委員会  
相田泰臣・前山精明 2005 「菖蒲塚古墳・隼人塚古墳II－2003年度確認調査の概要」卷町教育委員会  
甘粕 健・小野 朝ほか 1993 「越後山谷古墳」卷町教育委員会  
ウ 宇野隆夫 1991 「律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として」桂書房  
宇野隆夫 1992 「食器量の意義と方法」『国歴立民民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館  
エ 江口友子・小濱 亨ほか 2000 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第100集 北陸自動車道黒崎パーキングエリア改良工事関係発掘調査報告書 祐迦堂遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
遠藤恭雄・臨本博康ほか 2016 「島瀬瀬遺跡 第5次調査－県営は場整備事業（経営体育成型）卷東町地区に伴う島瀬瀬遺跡第5次発掘調査報告書－」新潟市教育委員会  
カ 植田祐司 2001 「須恵器の引き目から」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会  
春日真実 1991 「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学談話会』第8号 新潟考古学談話会  
春日真実 1995 「古代集落の展開」『研究紀要』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
春日真実 1997a 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会  
春日真実 1997b 「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会  
春日真実 1998 「中組遺跡出土の縁輪陶器について」『町史研究 よしだ』第2号 吉田町教育委員会  
春日真実 1999 「第IV章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院  
春日真実 2000 「考古編 第5章 まとめ」『吉田町史 資料編1 考古・古代・中世』吉田町  
春日真実 2003 「消費遺跡出土佐渡小泊産須恵器のロクロ回転方向－越後出土の資料を中心に」『研究紀要』第4号 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について－今池編年・下ノ西編年・山三賀編年」の検討を中心に－』『新潟考古』第16号 新潟県考古学会  
春日真実 2006 「越後における7世紀の土器編年」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会  
春日真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号 新潟県考古学会  
春日真実 2009 「越後における古代掘立柱建物」『新潟県の考古学II』新潟県考古学会  
春日真実 2013 「古代集落の動態－越後を事例として－」『新潟考古学談話会 2013 Summer Meeting』資料 新潟考古学談話会  
春日真実 2014 「古代遺跡の動態－西蒲原地域を事例として－」『郷土史燕』第7号 燕市教育委員会・燕市郷土史研究会連合会  
春日真実 2015 「古代西蒲原地域の土器削産炊具」『郷土史燕』第8号 燕市教育委員会・燕市郷土史研究会連合会  
春日真実・笠澤正史 1999 「越後・佐渡の様相」『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会  
春日真実ほか 2004 「越後阿賀北地域の古代土器様相」新潟県古代土器研究会  
加藤 学・荒川隆史 1999 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
金子拓男ほか 1983 「緒立遺跡発掘調査報告書」黒崎町教育委員会  
川上貞雄 1997 「和納館遺跡」岩室町教育委員会  
川上貞雄・木村宗文・鈴木敏夫 1989 「新津市史 資料編第1巻 原始・古代・中世」新津市  
川上貞雄ほか 1991 「葦神村文化財調査報告書8 発久遺跡発掘調査報告書」葦神村教育委員会  
川村浩司 2000 「上越市古墳時代土器の変遷－閑川右岸下流域を中心に－」『上越市史研究』第5号 上越市  
川村 尚 2002 「佐渡郡羽茂町小泊塚跡」新潟県考古学会第14回大会 研究発表会発表要旨 新潟県考古学会  
キ 北野博司 1999 「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会  
木村宗文 1989 「資料解説－古代越後国と蒲原郡」『新津市史 資料編 第1巻 原始・古代・中世』新津市

- タ 桑原正史 1994 「第二編 第一章 古代の蒲原地方」『卷町 史通編上』 卷町
- コ 小池邦明・藤塚 明 1993 「新潟市の場跡の場上地区画整理事業用地内発掘調査報告書」 新潟市教育委員会
- 小林昌二 2010 「古代越後の蒲原・沼垂郡-新潟市西区の四十石遺跡にふれてー」『新潟史学』63号 新潟史学会
- 小林 存 1952 「新津市誌」 新潟市
- 古保近建 1989 「ありし日の鉢湯」 新潟県教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 1967 「新版 標準土色帖」 農林水産省農林水産技術會議事務局・財團法人日本色彩研究所監修
- サ 斎藤順作 1967 『三潟水抜一件<前>』 卷町双書 第7集 卷町役場
- 斎藤順作 1968 『三潟水抜一件<後>』 卷町双書 第17集 卷町役場
- 斎藤義信 1986 「新津市」『日本歴史地名大系 15 新潟県の地名』 平凡社
- 坂井秀弥 1988 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通-8~10世紀を中心としてー」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』 報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 坂井秀弥 1989 「北陸型土師器長甕の製作技法」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥 1994 「序と館、集落と屋敷-東国古代遺跡における館の形成ー」『城と館を掘る、読む-古代から中世へ』 山川出版社
- 坂井秀弥 1996 「水辺の古代官衛遺跡-越後平の内水面・舟運・漁業」『越と古代の北陸』 名著出版
- 坂井秀弥 1999 「第IV章 古代 第1節 総論」『新潟県の考古学』 高志書院
- 坂井秀弥 2008 「古代地域社会の考古学」 同成社
- 坂井秀弥ほか 1984 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1986 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ 一之口遺跡西地区」 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡」 新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局新潟県国道工事事務所
- 坂井秀弥・鶴間昭正・春日真実 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 坂上有紀 2003 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第118集 烏賀自動車道関係発掘調査報告書 上浦遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 筒澤正史 1999 「第4章 古代 第4節 生産と流通 第2項 窯業」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 筒澤正史 2001 「須恵器瓶類の口縁頭部接合痕跡」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
- 筒澤正史 2003 「第5章 古代 第1節 時代概説」『上越市史 資料編2 考古』 上越市
- 筒澤正史 2004 「第IV章 各論 1 須恵器生産の概要」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
- 佐藤友子ほか 2008 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第187集 一般国道7号線万代橋下流橋関係発掘調査報告書 近世新潟町跡広小路堀地点」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 澤野慶子 2018 「赤鉛山跡遺跡」『平成29年度 新潟市遺跡発掘調査速報会 最新調査成果が語る新潟市の歴史』 新潟市文化財センター
- タ 高橋与右門 1984 「須恵器大甕にみられる「放射状当て具痕」について」『紀要』IV (財)岩手県埋蔵文化財センター・武田健次郎・青山 晃・内田亞紀子 1999 「越中における須恵器貯蔵具の様相」『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年輪の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』 報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 龍田優子 2016 「II 2 (10) 仲歩切遺跡 第3次調査及び工事立会」『新潟市文化財センター年報』第3号 新潟市文化財センター
- 龍田優子ほか 2015 「下新田遺跡 第6・8・9次調査-県営は整備事業(経営体育成基盤整備型)道上地区に伴う第3・5・6次発掘調査報告書ー」 新潟市教育委員会
- ツ 立木宏明・伊比博和ほか 2013 「峰岡城山遺跡 第2次調査-城山屋内体育施設造成工事に伴う峰岡城山遺跡第2次発掘調査報告書ー」 新潟市教育委員会
- チ 出越茂和 1999 「北加賀・能登地方の古代須恵器貯蔵具」『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
- 寺村光晴 1960 「越後六地山遺跡」『上代文化』30 国学院大学考古学会
- 寺崎裕介・高瀬信行ほか 2000 「味方排水機場遺跡調査報告書」『味方村誌 通史編』 味方村

- ナ 中村孝三郎 1960 「西蒲原郡中野小屋村曾和弥生式六地山遺跡」『日本考古学年報』9 日本考古学協会
- 奈良文化財研究所 2010 「第V章 道構の発掘 第9節 生産関連道構3 農業関連道構 A畠」『発掘調査の一びき－集落遺跡発掘編－』 同成社
- ニ 新潟県 1983 『新潟県史 資料編4 中世二 文書編IV』
- 新潟県 1984 『新潟県史 資料編5 中世三 文書編IV』
- 新潟県教育委員会・巻町教育委員会 1966 『鉛湯：鉛湯干拓地域民俗資料緊急調査報告書』
- 新潟古砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡－新潟砂丘の形成史－」『第四紀研究』13-2 日本第四紀学会
- 新潟市国際文化部歴史文化課 2007 『新潟市歴史双書2 新潟市の遺跡』 新潟市
- 新潟市史編さん原始古代中世会 1994 『新潟市史 資料編1 原始 古代 中世』 新潟市
- フ 藤塚 明・小池邦明・渡邊朋和 1987 『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』 新潟市教育委員会
- ホ 北陸農政局鉛湯干拓建設事業所 1968a 『鉛湯干拓技術誌』
- 北陸農政局鉛湯干拓建設事業所 1968b 『鉛湯干拓図集』
- 細井佳浩 2014 「新潟県における古代の「軌状小溝」(畠)について－越後国域の検出事例から－」『三面川流域の考古学』 第12号 奥三面を考える会
- 細野高伯・伊比博和ほか 2012 「大沢谷内遺跡II 第7・9・11・12・14次調査－一般国道403号小須戸田上バイパス整備工事に伴う大沢谷内遺跡II 第2・4・6・7・9・9次発掘調査報告書－』 新潟市教育委員会
- マ 前山精明 1994 『御戸井遺跡』『巻町史 資料編1 考古』巻町
- 前山精明・相田泰臣 2002 『南赤坂遺跡－縄文時代前期～中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査－』巻町教育委員会
- 前山精明・相田泰臣 2003 『御戸井遺跡I－2002年度確認調査の概要－』巻町教育委員会
- 前山精明・相田泰臣 2004 『御戸井遺跡II－2003年度確認調査の概要－』巻町教育委員会
- 前山精明ほか 2015 『峰岡町遺跡 第3次調査－国道460号線改良工事に伴う峰岡上町遺跡第3次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会
- 前山精明・山口栄一 1985 『城願寺跡・坊ヶ入墳墓』巻町教育委員会
- モ 望月精司 1997 『第2章 各地域の土師器生産と土師器焼成遺構 第4節 北陸』『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社
- ヤ 山口栄一 1994 『II 考古資料 2 各時代の概観 5 中世』『巻町史 資料編1 考古』巻町
- 山口栄一・前山精明 1984 『西川町の遺跡 3. 大島橋遺跡』『西川町史考』その12「史料・民具の紹介と古老子話」西川町教育委員会
- 横山勝栄・竹田和夫ほか 1987 『新潟県中世城跡等分布調査報告書』新潟県教育委員会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉岡弘文館
- 吉田町 2000 『第2章 中世資料』『吉田町史 資料編1 考古 古代 中世』
- 米沢 康 1965 「大化前代における越の史的位置」『信濃』17-1 信濃史学会
- 米沢 康 1980 「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』32-6 信濃史学会
- ワ 渡邊ますみ 1993 『縁立A 遺跡確認調査報告書』黒崎町教育委員会
- 渡邊ますみほか 1994 『縁立C 遺跡発掘調査報告書』黒崎町教育委員会
- 渡邊ますみ 1998 『第二章 原始・古代一縁立遺跡－第三節 出土遺物 第三項 奈良・平安時代の遺物』『黒崎町史資料編1 原始・古代・中世』黒崎町
- 渡邊ますみほか 2009 『駒首湯遺跡第3・4次調査－大型小売店舗建設に伴う駒首湯遺跡第3・4次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会
- 渡邊ますみ・奈良貴史ほか 2012 『四十石遺跡 第2調査－(仮称)新赤塚埋立処分地整備工事に伴う四十石遺跡第2次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会

## 第VI章 自然科学分析参考文献

- イ 伊東隆夫・山田昌久 2012 『木の考古学』 雄山閣 p.449
- カ 金子清俊・谷口博一 1987 『線形動物・彌形動物』『医動物学 新版臨床検査講座』8 医歯薬出版 p.9-55
- 金原正明 1993 『花粉分析法による古環境復原』『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』 角川書店 p.248-262
- 金原正明 1999 『寄生虫』『考古学と動物学 考古学と自然科学2』 同成社 p.151-158

- 金原正明・金原正子 1992 「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構－藤原京 7 条 1 坊－』 奈良国立文化財研究所 p.14-15
- 金原正明・金原正子 1993 「石棺内の花粉分析および消化管内残渣の分析」『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』 奈良県立橿原考古学研究所 p.18-26
- 金原正明・金原正子・松井 章 2012 「寛永寺徳川將軍親族遺体に由来する環境考古学的分析」『東叡山寛永寺徳川將軍家御裏方塗廬第三分冊』 寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編 吉川弘文館 p.428-440
- 金原正明・金原正子 2015 「堆積物と植物遺体の総合的研究」『日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集』 p.146-147
- サ 佐伯 浩・原田 浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』 文永堂出版 p.20-48  
佐伯 浩・原田 浩 1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』 文永堂出版 p.49-100
- シ 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科學博物館收藏目録第5集』 60p
- 島地 謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣 p.296
- ス 杉山真二 2000 「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』 同成社 p.189-213  
杉山真二・松田隆二・藤原宏志 1988 「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－」『考古学と自然科学』20 p.81-92
- 鈴木三男・小川とみ・能城修一 2004 「青田遺跡出土木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書V 青田遺跡 関連諸科学・写真図版編』 新潟県教育委員会 p.53-70
- ナ 中村 純 1967 「花粉分析」 古今書院 p.82-102
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として」『第四紀研究』13 p.187-193
- 中村 純 1977 「稻作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 p.21-30
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標微」『大阪自然史博物館收藏目録第13集』 91p
- ハ バリノ・サーヴェイ 2002 「蕨ノ坪遺跡から出土した木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集 一般国道7号中条黒川バイパス関係発掘調査報告書 蕨ノ坪遺跡』 新潟県教育委員会 p.45-59・80-83
- フ 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9 p.15-29
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17 p.73-85.
- ヤ 山田昌久 1993 『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 植生史研究特別第1号』 植生史研究会 p.242
- B Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- P Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard 1992 Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils, *Journal of Archaeological Science*,19, p.231-245.
- R Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887
- S Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion : Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

別 表

別表1 遺構計測表

回数 No.	写真 No.	区 域	遺構 種類 番号	グリッド	時代	標高 m	下端方位	規模 (m)			形状		地盤 高さ (m)	地盤 平面	地盤 断面	遺物		遺物 の 種類 番号 No.	
								上端		下端	底面	底面	底面			底面	底面		
								幅	長	幅	長	幅	長			底面	底面		
13 - 16 5	1 SK	1	3B-2H14 - 20	古代	W	N-81°-W	2.42	(1.23)	2.03	(1.02)	(0.25)	2.10	楕円形	-	4				
14 - 17 5	1 SK	4	3B-2H16	古代	W	N-36°-E	0.80	0.59	0.58	0.26	0.11	2.24	楕円形	弧状	1	>SD16, Pt3D			
13 - 17 5	1 SK	49	3B-2H16	古代	W	N-88°-E	(1.04)	(0.55)	(0.40)	0.12	2.24	楕円形	弧状	1					
13 - 17 6	1 SK	50	3B-2G14	古代	W	N-64°-E	(1.08)	(0.28)	(0.64)	(0.18)	0.16	2.15	楕円形	弧状	1		○	黑色上部斜面輪・ 上部斜面直線	22
13 - 17 6	1 SK	2	3B-2H16 - 8° - 11 - 12	古代	W	N-49°-W	(-0.25)	2.75	(3.98)	(1.72)	0.07	2.30	不規則	弧状	1	>SD3, Pt20 - 36			
13 - 14 6	1 SD	3	3B-2H17 - 8°	古代	W	N-42°-W	(2.10)	0.40	(2.10)	0.22	0.05	2.31	-	弧状	1	>Pt19, <SX2		SN55	
14 - 18 6 - 7	1 SD	5	3B-2H19 - 14° - 15	古代	W	N-35°-W	(3.37)	0.49	(3.37)	0.26	0.25	2.17	-	弧状	2	>Pt10		SN55	
14 - 18 6 - 7	1 SD	6	3B-2H19 - 15° - 22 - 11	古代	W	N-46°-W	(3.41)	0.50	(3.41)	0.25	0.18	2.30	-	弧状	2	>Pt13		SN55	
14 - 18 7	1 SD	11	3B-2H19 - 15° - 22 - 11	古代	W	N-45°-W	(3.36)	0.52	(3.30)	0.40	0.26	2.24	-	弧状	2			SN55	
14 - 18 7	1 SD	12	3B-2H17 - 12° - 13	古代	W	N-37°-W	(2.47)	0.50	(2.47)	0.35	0.20	2.30	-	弧状	2			SN55	
14 - 18 7	1 SD	15	3B-2H17 - 8° - 13	古代	W	N-35°-W	(1.96)	0.44	(1.96)	0.29	0.20	2.30	-	椭圆	2			SN55	
14 - 18 6	1 SD	16	3B-2H18 - 13°	古代	W	N-38°-W	(3.46)	0.33	(3.46)	0.22	0.14	2.26	-	椭圆	2	<SK4		SN55	
14 - 18 7 - 8	1 SD	17	3B-2H18 - 9° - 14	古代	W	N-24°-W	(1.37)	0.67	(1.37)	0.55	0.16	2.32	-	弧状	2		○	上部斜面直線	SN55
14 - 18 7 - 8	1 SD	18	3B-2H19 - 10	古代	W	N-27°-W	(1.16)	0.36	(1.16)	0.26	0.22	2.25	-	椭圆	2			SN55	
13 - 17 8	1 SD	37	3B-2H18 - 9°	古代	W	N-50°-W	(0.90)	0.30	(0.79)	0.14	0.31	2.23	-	半円弧	2				
13 - 18 9	1 P	7	3B-2H12	古代	W	N-29°-E	0.29	0.28	0.11	0.09	0.12	2.26	楕円形	圓錐状	1				
13 - 18 10	1 P	8	3B-2H12	古代	W	N-72°-E	0.34	0.22	0.11	0.11	0.30	2.08	扇形	圓錐状	1				
13 - 19 10	1 P	9	3B-2H17	古代	W	N-7°-E	0.23	0.21	0.11	0.11	0.10	2.26	扇形	半円弧	1				
14 - 20 9	1 P	10	3B-2H14 + 15	古代	W	N-48°-W	0.31	0.30	0.16	0.14	0.22	2.12	円形	U字形	1	>SD5	○	上部斜面直線	SN56
14 - 20 9	1 P	13	3B-2H10	古代	W	N-66°-E	0.27	0.28	0.14	0.11	0.10	2.26	楕円形	圓錐	1	>SD6		SN56	
13 - 18 10	1 P	14	3B-2H13	古代	W	N-25°-E	(0.27)	0.23	0.19	0.12	0.24	2.11	楕円形	U字形	1				
14 - 20 9	1 P	19	3B-2H13	古代	W	N-5°-W	-0.25	0.23	-0.14	0.12	0.26	2.09	-	円形	U字形	2	>SD3		SN56
13 - 17 6	1 P	20	3B-2H17	古代	W	N-52°-W	(0.25)	0.24	0.11	0.10	0.16	2.30	円形	半円弧	3	<SK2			
13 - 18 11	1 P	21	3B-2H15	古代	W	N-22°-W	0.21	0.18	0.12	0.09	0.09	2.32	円形	圓錐	1				
13 - 18 11	1 P	23	3B-2H15, 2011	古代	W	N-23°-W	0.14	0.14	0.08	0.07	0.13	2.24	円形	U字形	1				
13 - 18 11	1 P	24	3B-2H15, 2011	古代	W	N-25°-W	-0.25	0.23	0.12	0.11	0.12	2.22	円形	半円弧	1				
13 - 18 11 - 12	1 P	25	3B-2H11	古代	W	N-65°-W	0.25	0.26	0.14	0.10	0.08	2.36	楕円形	半円弧	1				
13 - 18 11 - 12	1 P	26	3B-2H16 - 11	古代	W	N-77°-E	0.22	0.17	0.12	0.10	0.08	2.28	扇形	半円弧	1	>Pt25			
13 - 19 12	1 P	27	3B-2H11	古代	W	N-65°-E	0.29	0.18	0.09	0.07	0.08	2.30	円形	圓錐	1	>Pt26			
13 - 19 12	1 P	28	3B-2H11	古代	W	N-9°-E	0.30	0.23	0.13	0.11	0.13	2.24	楕円形	半円弧	2	>Pt27			
13 - 19 12	1 P	29	3B-2H11	古代	W	N-10°-W	0.18	0.17	0.09	0.07	0.07	2.32	円形	圓錐	1				
14 - 20 5 - 9	1 P	30	3B-2H18	古代	W	N-66°-W	0.23	0.22	0.12	0.08	0.28	1.96	円形	U字形	1	>SK4		SN56	
13 - 19 10	1 P	31	3B-2H13	古代	W	N-15°-W	0.18	0.16	0.09	0.09	0.09	2.27	円形	半円弧	1				
13 - 19 10	1 P	33	3B-2H14	古代	W	N-67°-E	0.20	0.17	0.11	0.09	0.04	2.32	楕円形	圓錐	1				
13 - 19 12	1 P	34	3B-2H14	古代	W	N-11°-W	0.23	0.21	0.11	0.10	0.13	2.23	円形	U字形	1				
13 - 19 12	1 P	34	3B-2H16	古代	W	N-49°-W	0.17	0.15	0.10	0.08	0.12	2.24	円形	半円弧	1				
13 - 19 13	1 P	35	3B-2H17	古代	W	N-6°-W	0.20	0.20	0.10	0.09	0.11	2.25	円形	圓錐	1				
13 - 17 6	1 P	36	3B-2H16	古代	W	N-45°-W	(0.16)	(0.24)	(0.10)	(0.17)	0.15	2.18	円形	圓錐	1	<SK2			
13 - 19 15	1 P	38	3B-2G13	古代	W	N-46°-W	(0.32)	0.25	0.17	0.14	0.38	1.86	楕円形	半円弧	2				
13 - 19 15	1 P	39	3B-2G14 + 19	古代	W	N-10°-E	0.22	0.22	0.14	0.11	0.10	2.20	扇形	半円弧	1				
13 - 19 15	1 P	40	3B-2G14 + 19	古代	W	N-9°-E	0.14	0.13	0.09	0.07	0.05	2.26	円形	圓錐	1				
13 - 19 14	1 P	41	3B-2G19 + 20	古代	W	N-85°-W	0.22	0.20	0.14	0.14	0.10	2.20	円形	半円弧	1				
13 - 19 14	1 P	42	3B-2G15	古代	W	N-4°-E	0.10	0.09	0.06	0.04	0.09	2.19	円形	半円弧	1				
13 - 19 14	1 P	43	3B-2G20	古代	W	N-50°-E	0.15	0.14	0.06	0.06	0.05	2.24	円形	圓錐	1				
13 - 19 14	1 P	44	3B-2G20	古代	W	N-38°-E	0.15	0.13	0.08	0.08	0.04	2.24	円形	圓錐	1				
13 - 19 14	1 P	45	3B-2G20	古代	W	N-60°-W	0.16	0.15	0.07	0.06	0.03	2.25	円形	圓錐	1				
13 - 19 15	1 P	46	3B-2G15	古代	W	N-1°-E	0.24	0.22	0.15	0.12	0.18	2.15	扇形	半円弧	2				
13 - 16 15	1 P	47	3B-2H10	古代	W	N-7°-W	(0.16)	(0.21)	(0.11)	(0.13)	0.13	2.24	円形	半円弧	1				
14 - 19 15	1 P	48	3B-2H8 - 9	古代	W	N-3°-E	0.24	0.20	0.12	0.10	0.08	2.24	円形	半円弧	1				
12 - 19 15	1 P	51	3B-2G12	古代	W	N-23°-W	0.31	0.28	0.10	0.09	0.11	2.10	円形	圓錐	1		○	石製品	
13 - 19 15 - 16	1 P	52	3B-2G19	古代	W	N-10°-W	(0.41)	(0.32)	(0.15)	(0.13)	0.30	2.14	楕円形	U字形	2	○	上部斜面直線・ 左側斜面直線		
13 - 19 16	1 P	53	3B-2G18	古代	W	N-51°-W	0.20	0.19	0.10	0.08	0.07	2.18	円形	圓錐	1				
13 - 19 16	1 P	54	3B-2H12	古代	W	N-12°-W	0.28	0.23	0.11	0.12	0.23	円形	半円弧	1					
15 - 21 16	2 SK	1	3C-1C8 - 9	古代	W	N-85°-E	(5.33)	(0.98)	(4.90)	(0.78)	0.20	2.34	不規則	弧状	1				
15 - 21 19	2 P	2	3C-1C11	古代	W	N-10°-W	0.17	0.16	0.09	0.07	0.07	2.30	円形	半円弧	1				

別表2 据立柱建物計測表

回数 No.	写真 No.	区 域	グリッド	標高 m	時期	構造方	下端方位	底面	梁行 (m)	軸行 (m)	梁面 幅 (m)	梁面 高 (m)	梁間柱 (m)		軸行柱 (m)				
													計測P点名	計測面名	計測P点名	計測面名			
SB06	14 - 20	8 - 9	1	3B-2B8 ~ 10 - 13 - 15	古代	W	南北	N-25°-E	偏南	(2.70)	(3.64)	0.83	9.83	Pt3D-Pt10	2.70	Pt13-Pt10	2.11	Pt20-Pt19	1.67

表3 土器・陶器類觀察表

測定 No.	報告 No.	出土位置 区	通鑑名 グリッド	層位	種類	分類	法量(cm)			径高 比	底径 指数	形状 状態	土色 含有可能物	产地	色調		手法			進存率(%)			付着物		時代	時期・年代	備考		
							口径	底径	高さ						外面	内面	焼成	表面	工具痕	内面	工具痕	底部	内面	底部	全体	内面	底部		
22 20 1 1	SK50	3B-2G14	I	墨色土器	無台形	一	-	-	-	-	-	端	石英・白色灰陶	7.5YR4/2 N5/0	N3/0 焼成	難	ロクナナ ロクロケズリ セラミック又は ナマコ	ミガキ			-	-	1			平安	奈良V期前	内面墨色地	
22 20 2 1	3B-2G18	V	墨色器	無台形	A	13.4	4.4	5.0	-	-	端	白色灰陶片・削 痕剥離	D 2.5Y7/2 N5/0	2.5Y7/2 N5/0	難	ロクナナ ロクロケズリ セラミック+ナマ コ	ロクロナナ	ツギリ→ナマ	19	36	20				飛鳥～奈良J-I期 会員	奈良、唐土器			
22 20 3 1	3B-2H12	V	墨色器	無台形		14.0	-	-	-	-	-	直	青石・チャート 青石・白色灰陶	C+ 10YR7/2 N5/0	2.5Y5/2 N5/0	難	ロクナナ			9	-	3				平安	奈良V期後		
22 20 4 1	3B-2G17	V	墨色器	無台形		11.8	-	-	-	-	-	端	石英・白色灰陶 石英	B+ 2.5Y6/1	10YR7/3 N5/0	難	ロクナナ			2	-	1				平安	奈良V期後	焼き付いた小口	
22 20 5 1	3B-2F19	V	墨色器	有台形	A	-	10.2	-	-	-	-	端	白色灰陶	D N7/0	N5/0	難	ロクナナ ロクロケズリ	ロクロナナ	ヘラ切り彫ナ マ	不明	-	13	6				平安	奈良V期後	
22 20 6 1	3B-2G18	V	墨色器	有台形	B	14.7	7.7	6.6	-	-	-	直	白色灰陶	B N7/0	N5/0	難	ロクナナ ロクロナナ	ロクロナナ	回転ヘラ切 り彫ナマ	2	23	10				平安	奈良V期後		
22 20 7 1	3B-2G16	V	墨色器	直		-	-	-	-	-	-	直	白色灰陶	B+ N5/0	N5/0	難	ロクナナ ロクロナナ	ロクロナナ	回転内円具	D	-	-	1			平安	奈良V-J期		
22 20 8 1	3B-2G25	V	墨色器	杯		18.0	-	3.7	-	-	-	直	石英・白石・白 色灰陶	D 2.5Y5/1	N7/0	白	難	ロクナナ ロクロケズリ		右	4	-	8				奈良J期	内面墨色地 つまみ(3.0cm), 内面丸み大き い形跡,内側に 凹形跡	
22 20 9 1	3B-2G25	V	土器器	無台形	A	10.3	-	-	-	-	-	直	青石	10YR7/3 N5/0	10YR8/3 N5/0	難	ロコハマ ヨコハマ			3	-	2				飛鳥～ 奈良J期			
22 20 10 1	3B-3G25	V	土器器	(無台)	B	-	-	-	-	-	-	直	青石・長石・ チャート	10YR8/2 N5/0	2.5Y5/2 N5/0	難	ロコナナ	ロコナナ	ハマ	-	-	2			奈良J-J期	新田			
22 20 11 1	3B-2G25	V	土器器	無台形	C	-	6.4	-	-	-	-	直	長石	C 2.5Y7/2	10YR8/2 N5/0	難	ロコハマ			-	7	3				飛鳥～ 奈良J期			
22 20 12 1	3B-2G20	V	土器器	無台形	C	-	-	-	-	-	-	端	石英・白色灰陶	10YR7/2 N5/0	2.5Y3/2 N5/0	難	ロコハマ	ロコハマ	ハマ	ハマ→木葉 ナマ	-	-	1			飛鳥～ 奈良J期	新田		
22 20 13 1	3B-2G16	V	土器器	(無台)・ 棒付高柄	C	-	-	-	-	-	-	直	青石・チャート・ 白色灰陶	10YR7/2 N5/0	10YR7/3 N5/0	難	ロコナナ ロコナナリ	ロコナナ		5	-	5				飛鳥～ 奈良J-J期			
22 21 14 1	3B-2G22	V	土器器	(無台) 棒	C	8.8	-	-	-	-	-	直	石英・雲母・ チャート	2.5Y8/2	2.5Y8/2 N5/0	難	ヨコナナ ヨコナナリ	ヨコナナ ヨコナナリ		2	-	1				奈良J-J期	新田		
22 21 15 1	3B-2F16	V	土器器	(無台) 棒	C	10.3	-	-	-	-	-	直	青石・白色灰陶	5YR6/4 N5/0	10YR7/3 N5/0	難	ロコナナ ロコナナリ	ロコナナ ロコナナリ	ハマ	ロコナナ ロコナナリ	3	-	2				奈良J-J期	新田	
22 21 16 1	3B-2G24	V	土器器	棒		18.2	-	-	-	-	-	直	青石・長石・ 雲母・チャート	10YR8/2 N5/0	2.5Y7/2 N5/0	難	ロコナナ	ロコナナ	ハマ	ロコナナ	4	-	2				飛鳥～ 奈良J-J期	新田	
22 21 17 1	3B-2G24	V	土器器	不明		14.0	-	-	-	-	-	直	青石・チャート・ 白色灰陶	10YR8/2 N5/0	2.5Y7/2 N5/0	難	ロコナナ ロコナナリ	ロコナナ	ハマ	ハマ	7	-	2				飛鳥～ 奈良J-J期	新田	
22 21 18 1	3B-2G20	V	土器器	不明		16.2	-	-	-	-	-	直	青石・雲母・ チャート	10YR8/2 N5/0	10YR7/3 N5/0	難	ロコナナ ロコナナリ	ロコナナ ロコナナリ	ハマ	ロコナナ ロコナナリ	2	-	1				飛鳥～ 奈良J-J期	新田	
22 21 19 1	3B-2G20	V	土器器	瓶		20.0	-	-	-	-	-	直	青石・長石・ 雲母・チャート	10YR8/2 N5/0	10YR8/2 N5/0	難	ロコナナ	ロコナナ	ハマ	ロコナナ	3	-	1				飛鳥～ 奈良J-J期	新田	
22 21 20 1	3B-2G16	V	土器器	瓶		19.5	-	-	-	-	-	直	青石・白色灰陶	2.5Y7/2 N5/0	10YR7/3 N5/0	難	ロコナナ ロコナナリ	ロコナナ ロコナナリ	ハマ	ロコナナ ロコナナリ	4	-	1				飛鳥～ 奈良J-J期	新田	
22 21 21 1	3B-2G16	V	土器器	小瓶	B	14.0	-	-	-	-	-	直	青石・白色灰陶	10YR8/2 N5/0	2.5Y7/2 N5/0	難	ロコナナ ロコナナリ	ロコナナ ロコナナリ	ハマ	ロコナナ ロコナナリ	3	-	1				飛鳥～ 奈良J-J期	新田	
22 21 22 1	3B-2G25	V	土器器	小瓶	B	15.2	-	-	-	-	-	直	青石・雲母・ チャート	2.5Y7/2 N5/0	10YR7/3 N5/0	難	ロコナナ ロコナナリ	ロコナナ ロコナナリ	ハマ	ロコナナ ロコナナリ	3 (18)	-	1				飛鳥～ 奈良J-J期	新田	
22 21 23 1	3B-2G24	V	土器器	不明		11.0	-	-	-	-	-	直	青石・雲母・ 白色灰陶	10YR8/2 N5/0	10YR7/3 N5/0	難	ロコナナ ロコナナリ	ロコナナ ロコナナリ	ハマ	ロコナナ ロコナナリ	2	-	2				飛鳥～ 奈良J-J期	新田	
23 21 24 1	3B-2G15	V	土器器	小瓶	B	14.0	-	-	-	-	-	直	青石・長石・白 色灰陶	10YR8/2 N5/0	10YR8/2 N5/0	難	ロコナナ ロコナナリ	ロコナナ ロコナナリ	ハマ	ロコナナ ロコナナリ	4	-	2	スル			飛鳥～ 奈良J-J期	新田	
23 21 25 1	3B-2G20	V	土器器	小瓶	B	13.2	-	-	-	-	-	直	青石・チャート・ 白色灰陶	10YR8/2 N5/0	10YR8/2 N5/0	難	ロコナナ ロコナナリ	ロコナナ ロコナナリ	ハマ	ロコナナ ロコナナリ	3	-	1				飛鳥～ 奈良J-J期	新田	
23 21 26 1	3B-2G25	V	土器器	小瓶	B	13.0	-	-	-	-	-	直	青石	10YR8/2 N5/0	10YR8/2 N5/0	難	ロコナナ	ロコナナ	ハマ	ロコナナ	2	-	1				飛鳥～ 奈良J-J期	新田	

No.	写真 No.	写真 撮影 組合 No.	出土位置		種類	種類	分類	法面 (cm)		付高 和数	底盤 形状	加工面	加工部		手法				進歩率 (%)		付着物		時代	時代・年代	備考			
			横幅	高さ				幅	厚さ				工具板	内面	工具板	底部	工具板	内面	工具板	底部	工具板	内面	付着物	付着物				
23	21	27	1	-	3B-2B20	VII	土師器	小瓶	C	16	-	-	-	普通	良石・チャート	10YH7/2 にぶ・直槽	10YH7/2 にぶ・直槽	無	ナフテ	ナフテ	ナフテ	2	-	1	平安	平安	昔ロクロ?	
23	21	28	1	-	3B-2B19	VII	土師器	長瓶	B	17.6	-	-	-	普通	良石・直石・ チャート	10YH8/2 良白	10YH8/2 良白	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	7	-	2	平安	平安	昔ロクロ?	
23	21	29	1	-	3B-2G17	VII	土師器	小瓶か	A	15.2	-	-	-	普通	良石・チャート	10YH8/2 良白	10YH8/2 良白	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	3	-	1	江戸	江戸～江戸	昔ロクロ?	
23	22	30	1	-	3B-2G15 3B-2G14	VII	土師器	長瓶	A	24.4	-	30.8	-	普通	良石・チャート・ 白色酸灰石	10YH6/3 にぶ・直槽	10YH6/3 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	内面へラケズ り	12	36	30	江戸	江戸	昔ロクロ?
23	23	31	1	-	3B-2E25	VII	土師器	長瓶	A	24.3	-	-	-	普通	良石・直石・ 白色酸灰石	10YH7/2 にぶ・直槽	10YH7/2 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	2	-	1	平安	平安	昔ロクロ?	
23	23	32	1	-	3B-2G17	VII	土師器	長瓶か	-	-	-	-	普通	良石・直石・ 直縫	2.5YH2	2.5YH2	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	江戸	江戸～江戸	昔ロクロ?		
23	23	33	1	-	3B-2F30	VII	土師器	長瓶	-	-	-	-	普通	良石・直縫・ チャート	2.5YH2	10YH7/2 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	オゴダ	江戸	昔ロクロ?		
23	23	34	1	-	3B-2E25	VII	土師器	小瓶	-	-	-	-	普通	良石・チャート	10YH6/4 にぶ・直槽	10YH6/4 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	2	江戸	江戸	昔ロクロ?		
23	23	35	1	-	3B-2B25	付上	土師器	長瓶	-	-	-	-	普通	良石・チャート	10YH8/2 良白	10YH8/2 良白	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	2	江戸	江戸	昔ロクロ?		
23	23	36	1	-	3B-2G16	VII	土師器	小瓶	-	-	-	-	普通	良石・直縫・ チャート・焼土	10YH7/2 にぶ・直槽	10YH6/2 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	奈良	奈良	昔ロクロ?		
23	23	37	1	-	3B-2B24	VII	土師器	長瓶	-	-	-	-	普通	良石・直石・直縫	10YH7/2 良白	10YH7/2 良白	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	奈良	奈良	昔ロクロ?		
23	23	38	1	-	3B-2F18	VII	土師器	長瓶	-	-	-	-	普通	良石・直石・直縫	10YH7/2 良白	10YH7/2 良白	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	奈良	奈良	昔ロクロ?		
24	23	39	1	-	3B-2G17	VII	土師器	長瓶	-	-	-	-	普通	良石・直石・ 直縫	10YH7/2 にぶ・直槽	10YH7/2 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	奈良	奈良	昔ロクロ?		
24	23	40	1	-	3B-2G17	VII	土師器	長瓶	-	-	-	-	普通	良石・直縫・ チャート・白色 酸灰石	10YH6/2 良白	10YH6/2 良白	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	奈良	奈良	昔ロクロ?		
24	23	41	1	-	3B-2F23	VII	土師器	長瓶	-	-	-	-	普通	良石・直石・直縫	10YH7/2 良白	10YH7/2 良白	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	2	奈良	奈良	昔ロクロ?		
24	23	42	1	-	3B-2G16	VII	土師器	小瓶か	-	-	-	-	普通	良石・白色酸灰 石	2.5YH2	2.5YH2	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	奈良	奈良	昔ロクロ?		
24	23	43	1	-	3B-2F19	VII	土師器	小瓶	-	5.0	-	-	普通	良石・直石・ チャート	10YH6/4 にぶ・直槽	10YH6/4 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	奈良	奈良	昔ロクロ?		
24	23	44	1	-	3B-2G17	VII	土師器	小瓶	-	8.3	-	-	普通	良石・直石・直縫	10YH7/2 にぶ・直槽	10YH7/2 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	2	奈良	奈良	昔ロクロ?		
24	24	45	1	-	3B-2G18	VII	土師器	長瓶か	-	9.2	-	-	普通	良石・直石・直縫	10YH7/2 にぶ・直槽	10YH7/2 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	奈良	奈良	平安		
24	24	46	1	-	3B-2G25	VII	土師器	長瓶	-	9.0	-	-	普通	良石・直石・直縫	10YH6/4 にぶ・直槽	10YH6/4 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	2	奈良	奈良	昔ロクロ?		
24	24	47	1	-	3B-2F21	VII	土師器	小瓶か	-	7.6	-	-	普通	良石・直石・直縫	10YH6/4 にぶ・直槽	10YH6/4 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	奈良	奈良	昔ロクロ?		
24	24	48	1	-	3B-2F25	VII	土師器	長瓶	-	5.8	-	-	普通	良石・直石・直縫	10YH7/2 にぶ・直槽	10YH7/2 にぶ・直槽	無	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	ヨコナナニ・ ナマハケ	-	-	1	奈良	奈良	昔ロクロ?		
24	24	49	1	-	3B-2F25	VII	土師器	小瓶	-	5.6	-	-	普通	良石・直石・直縫	10YH6/3 にぶ・直槽	10YH6/3 にぶ・直槽	無	ナフテ	ナフテ	ナフテ	-	-	18	平安	平安	昔ロクロ?		
24	24	50	1	-	3B-2F16	VII	土師器	長瓶	-	10.2	-	-	普通	良石・白色酸灰 石	10YH6/4 にぶ・直槽	10YH6/4 にぶ・直槽	無	ナフテ	ナフテ	ナフテ	-	-	4	平安	平安	昔ロクロ?		
24	24	51	1	-	3B-2G17	VII	土師器	長瓶	-	10.0	-	-	普通	良石・直石・海綿状 鉱物	10YH7/2 にぶ・直槽	10YH7/2 にぶ・直槽	無	ナフテ	ナフテ	ナフテ	-	-	2	奈良	奈良	昔ロクロ?		
24	24	52	1	-	3B-2J6	VII	土師器	無台輪	-	13.0	-	-	精	良石・直石・海綿状 鉱物	7.5YH7/4 にぶ・直槽	7.5YH7/4 にぶ・直槽	無	ロクロナナ	ロクロナナ	ロクロナナ	-	-	1	平安	平安	昔ロクロ?		
24	24	53	1	-	3B-2G14	VII	土師器	無台輪	-	6.4	-	-	精	良石・白色酸灰 石	10YH6/4 にぶ・直槽	10YH6/4 にぶ・直槽	無	ロクロナナ	ロクロナナ	ロクロナナ	-	-	1	平安	平安	昔ロクロ?		
24	24	54	1	-	3B-2J6	VII	土師器	無台輪	-	8.8	-	-	精	良石・直石・白色 酸灰石	2.5YH6/4 にぶ・直槽	2.5YH6/4 にぶ・直槽	無	ロクロナナ	ロクロナナ	ロクロナナ	-	-	17	4	赤群?	平安		
24	24	55	1	-	3B-2H12	VII	土師器	小瓶	D	12.0	-	-	精	良石・直石・ 白色酸灰石	7.5YH8/4 にぶ・直槽	7.5YH8/4 にぶ・直槽	無	ロクロナナ	ロクロナナ	ロクロナナ	-	-	1	平安	平安	昔ロクロ?		

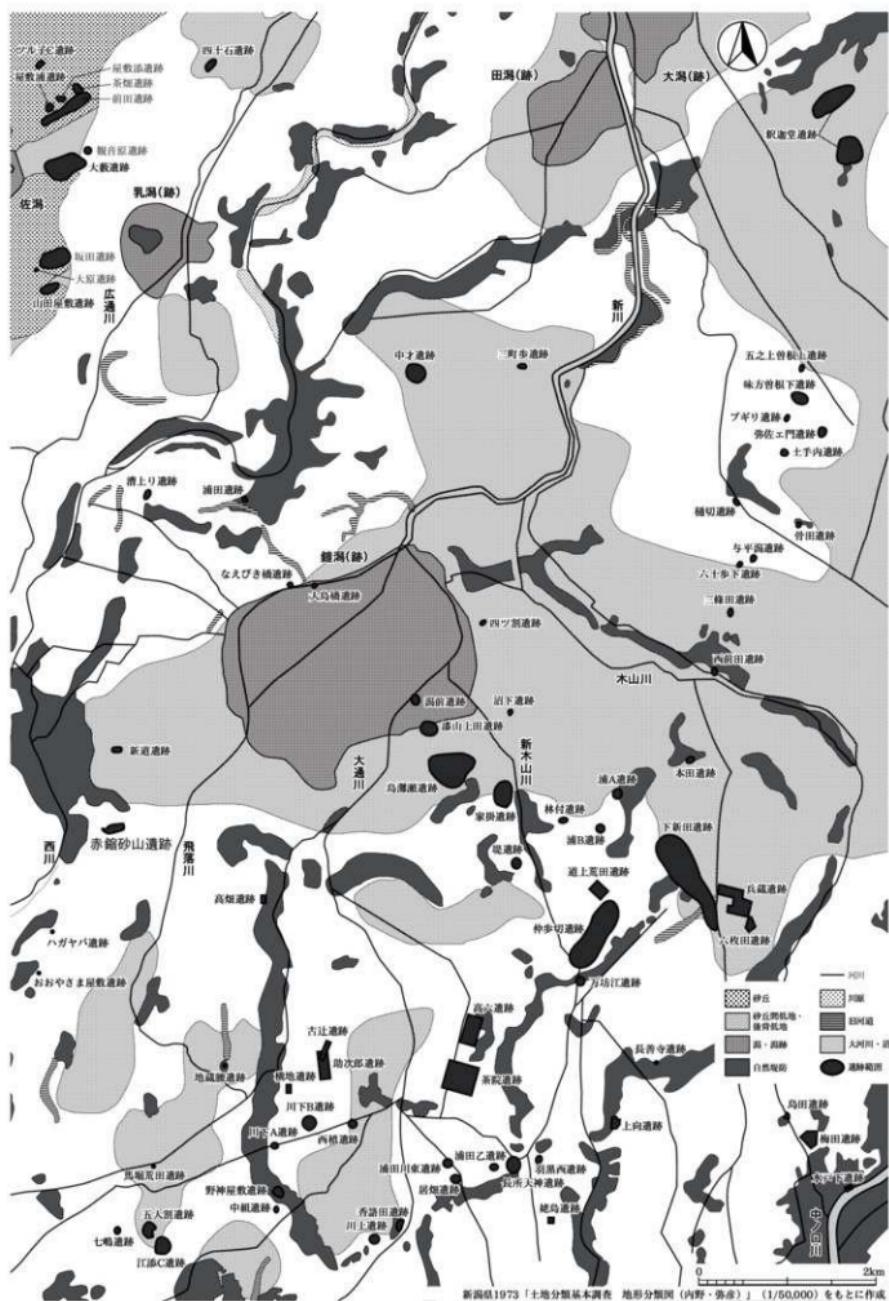
No.	写真 No.	組合 No.	出土地段 No.	層位 No.	種別 No.	種類 No.	分類 No.	法面 (cm)		付高 付高 付高	底標 底標 底標	地上 地上 地上	堆積 堆積 堆積	色調 色調 色調	手法			進歩率 (%)		付着物 付着物 付着物	時代 時代 時代	時期・年代 時期・年代 時期・年代	備考			
								上	下						工具鉄	工具鉄	内部	工具鉄	内部	工具鉄	底部					
24	24	56	1	-	3B-2G16	VII	土師器	小便	D	12.2	-	-	-	精	長石・白色頸灰 に点状・斑状	5.5YR6/6 に5.5YR7/3	5.5YR6/6 に5.5YR7/3	擦除	ロクロナヂ メタリズム	ロクロナヂ	3	-	1	平安	寺内VII期か	
24	24	57	1	-	3B-2F16	VII	土師器	長便	-	-	-	-	精	普通・長石	5.5YR7/6 に5.5YR7/3	5.5YR6/6 に5.5YR7/3	擦除	ロクロナヂ メタリズム	ロクロナヂ	-	-	1	平安			
24	24	58	1	-	3B-2G20	VII	土師器	長便	C	21.3	-	-	-	精	普通・長石・ 灰岩・チャート	5.5YR7/7 に5.5YR7/6	5.5YR7/7 に5.5YR7/6	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	1	-	1	平安	寺内IV期か	ロクロナヂ
24	24	59	1	-	3B-2G25	VII	土師器	長便	C	20	-	-	-	精	普通・長石・ 灰岩・チャート	5.5YR6/7 に5.5YR6/6	5.5YR6/7 に5.5YR6/6	擦除	ロクロナヂ メタリズム	ロクロナヂ	2	-	1	平安	寺内IV期か	
24	24	60	1	-	3B-2G16	VII	土師器	細	-	-	-	-	精	普通・長石・ 灰岩・チャート・白色 灰岩	5.5YR6/6 に5.5YR6/4	5.5YR6/6 に5.5YR6/4	擦除	平行タキ ヒケテ	H	-	-	1	スヌ	平安	寺内VII期か	
25	25	61	2T	-	Ⅲ	縁石	圓	(10.2)	-	-	-	-	精	10Y7/1 黄 10Y7/1 灰	10Y7/1 黄 10Y7/1 灰	10Y7/1 黄 10Y7/1 灰	擦除	ツバ付	ツバ付	2	-	1	近世			
25	25	62	2T	-	Ⅲ	縁石	圓	-	-	-	-	-	精	7.5GY8/7	7.5GY8/1	7.5GY8/7	擦除	-	ツバ付	-	1	1	サビ?	近世		
25	25	63	2T	-	Ⅲ	縁石	直	(16.0)	-	-	-	-	精	5GY8/1 に5.5YR6/1	7.5GY8/1 に5.5YR6/1	5GY8/1 に5.5YR6/1	擦除	梁材	梁材	2	-	1	近世			
25	25	64	2T	-	Ⅲ	陶器	瓶	(21.6)	-	-	-	-	精	5GY8/1 に5.5YR6/1	5GY8/1 に5.5YR6/1	5GY8/1 に5.5YR6/1	擦除	ツバ付	ツバ付	1	-	1	近世		内燃鉄	
25	25	65	9T	-	VII	土師器	長便	D	17.8	-	-	-	精	相 石英・長石・ チャート	2.5YR7/3 に5.5YR6/1	2.5YR7/3 に5.5YR6/1	擦除	タガタエ アリ	ロクロナヂ	4	-	2	古代			
25	25	66	9T	-	VII	土師器	小便	C	12.8	-	-	-	精	相 石英・長石・ チャート	10YR6/2 に5.5YR6/1	10YR6/2 に5.5YR6/1	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	4	-	2	スヌ	古代		
25	25	67	9T	-	VII	土師器	長便	D	(22.2)	-	-	-	精	相 石英・長石・赤 色粘土	5.5YR7/4 に5.5YR6/1	10YR7/4 に5.5YR6/1	擦除	カキメ	カキメ	1	-	2	古代			
25	25	68	9T	-	VII	土師器	長便	-	-	-	-	-	精	相 石英・長石・赤 色粘土	10YR7/4 に5.5YR6/1	10YR7/4 に5.5YR6/1	擦除	上半 上半 上半	上半 上半 上半	-	-	3	古代			
25	25	69	11T	-	VII	土師器	無台形	B	12.0	-	-	-	精	2.5YR7/6 に5.5YR6/1	2.5YR7/6 に5.5YR6/1	2.5YR7/6 に5.5YR6/1	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6	-	2	平安			
25	25	70	11T	-	VII	土師器	無台形	B	-	8.6	-	-	精	2.5YR7/6 に5.5YR6/1	N5/0 黑	N4/0 黑	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	-	4	2	平安	後丹山城丘陵		
25	25	71	11T	-	VII	土師器	無台形	B	-	7.0	-	-	精	長石	10YR6/1 黄 10YR6/1 黄	10YR6/1 黄 10YR6/1 黄	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	-	7	7	平安			
25	25	72	11T	-	VII	陶器	片口杯	30.2	-	-	-	-	精	長石・海綿骨針	N5/0 黑	N5/0 黑	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	3	-	1	中世	古河II期か	鐵石に板用	
25	25	73	11T	-	VII	陶器	瓶	-	-	-	-	-	精	長石	2.5YR4/1 に5.5YR6/1	2.5YR4/1 に5.5YR6/1	擦除	タガタエ アリ	-	-	1	1	中世			
25	25	74	11T	-	VII	陶器	壺	-	-	-	-	-	精	海綿骨針	5.5Y6/1 に5.5Y5/1	5.5Y6/1 に5.5Y5/1	擦除	鐵石にタガタエ 上部タガタエ	-	-	2	中世				
25	25	75	12T	-	VII	陶器	無台形	B	(13.0)	-	-	-	精	普通・石英・長石	B+D に5.5YR6/1	5.5Y7/3 黄 に5.5YR6/1	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	1	-	1	平安			
25	25	76	12T	-	VII	土師器	小便	-	6.3	-	-	-	精	普通・長石	2.5Y7/3 に5.5YR6/1	2.5Y7/3 に5.5YR6/1	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	-	5	1	平安			
25	25	77	13T	-	VII	土師器	小便	C	15.0	-	-	-	精	長石・チャート	10YR7/4 に5.5YR6/3	10YR7/4 に5.5YR6/3	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	3	-	1	平安			
25	25	78	13T	-	Ⅲ	縁石	圓	8.0	-	-	-	-	精	長石	10YR8/1 黄 10YR8/1 黄	10YR8/1 黄 10YR8/1 黄	擦除	ツバ付	ツバ付	3	-	1	近世			
25	25	79	13T	-	VII	土師器	小便	C	14.0	-	-	-	精	長石・チャート	2.5YR7/4 に5.5YR6/3	2.5YR7/4 に5.5YR6/3	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	4	-	1	平安			
25	25	80	13T	-	Ⅲ	縁石	直	-	-	-	-	-	精	5GY8/0 リーブ	GY6/3 オ リーブ	GY6/3 オ リーブ	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	-	-	1	近世			
25	25	81	13T	-	VII	陶器	壺	-	-	-	-	-	精	長石・白色頸灰 に5.5YR6/1	2.5YR7/3 に5.5YR6/1	2.5YR7/3 に5.5YR6/1	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	-	12	6	平安			
25	25	82	23T	-	VII	陶器	壺	-	-	-	-	-	精	長石	B に5.5YR6/1	SYV-1 黑	擦除	ロクロナヂ	ロクロナヂ	-	-	1	自然物	古代		
25	25	83	23T	-	VII	陶器	壺	-	-	-	-	-	精	石英・長石・白 色頸灰	A 10Y5/1 黑	10Y5/1 黑	擦除	カキメ(平打) カキメ(平打)	Hc 当て具縫	N	-	-	2	自然物	古代	
25	25	84	23T	-	VII	陶器	壺	-	-	-	-	-	精	長石・白色頸灰	A N5/0 黑	N5/0 黑	擦除	タガタエ アリ	当て具縫	N	-	-	1	古代		
25	25	85	23T	-	VII	陶器	壺	-	-	-	-	-	精	普通・白色頸灰	B N4/0 黑	N4/0 黑	擦除	カキメ(平打) カキメ(平打)	当て具縫	H	-	-	1	古代		
25	25	86	23T	-	VII	陶器	壺	-	-	-	-	-	精	普通・白色頸灰	D 5.5Y6/1 黄	5.5Y6/1 黄	擦除	カキメ(平打)	当て具縫	D	-	-	1	古代		



図 版

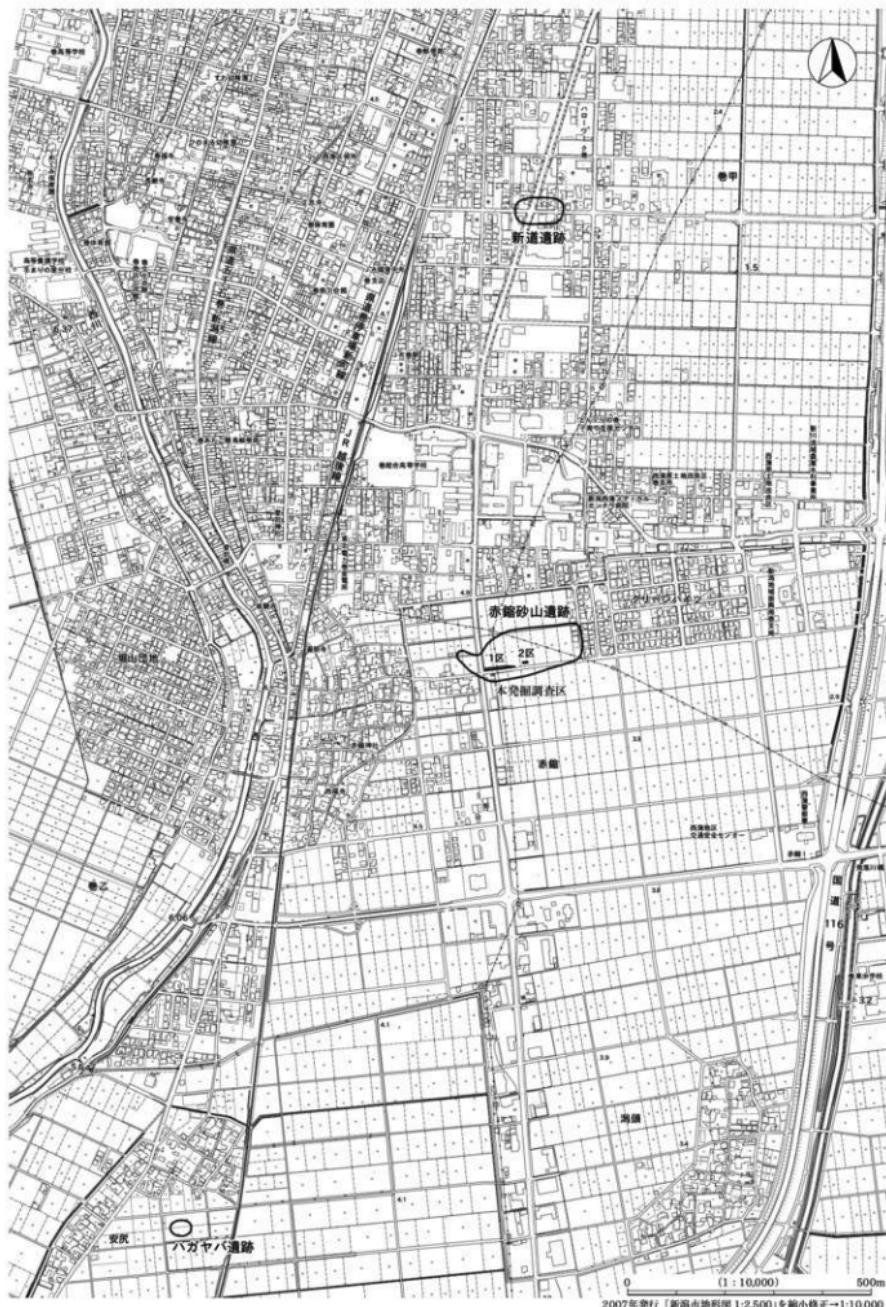






図版 4

赤館砂山遺跡と周辺の遺跡 (1/10,000)



2007年発行「新潟市地形図 1:2,500」を縮小修正 1:10,000



図版 6

赤鉛砂山遺跡調査区 (1/5,000)



2007年発行「新潟市地形図 1:2,500」を縮小修正→1:5,000



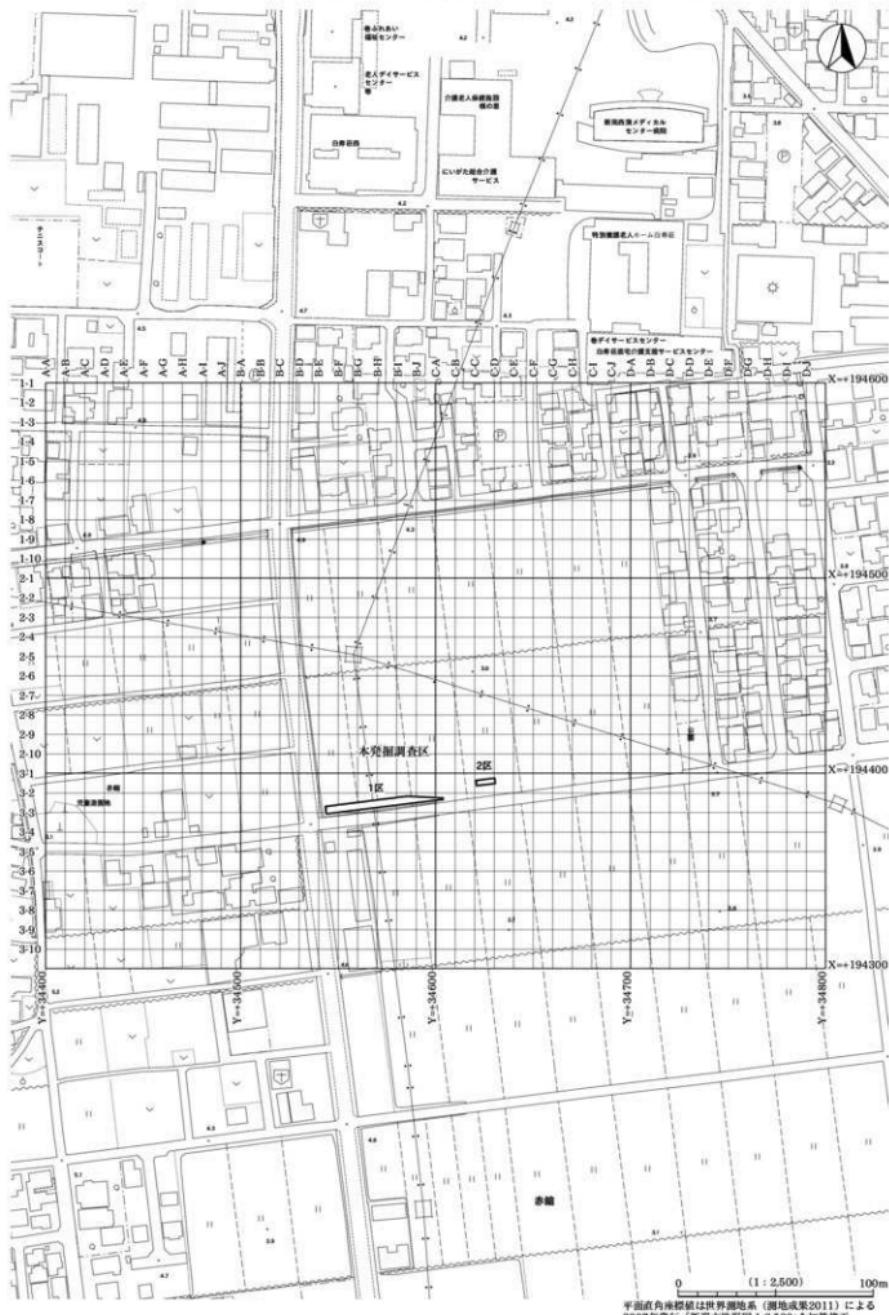
平面直角座標値は世界地図系(測地成果2011)による  
2007年発行「新潟市地形図(1:2,500)」を縮小修正E→1:10,000

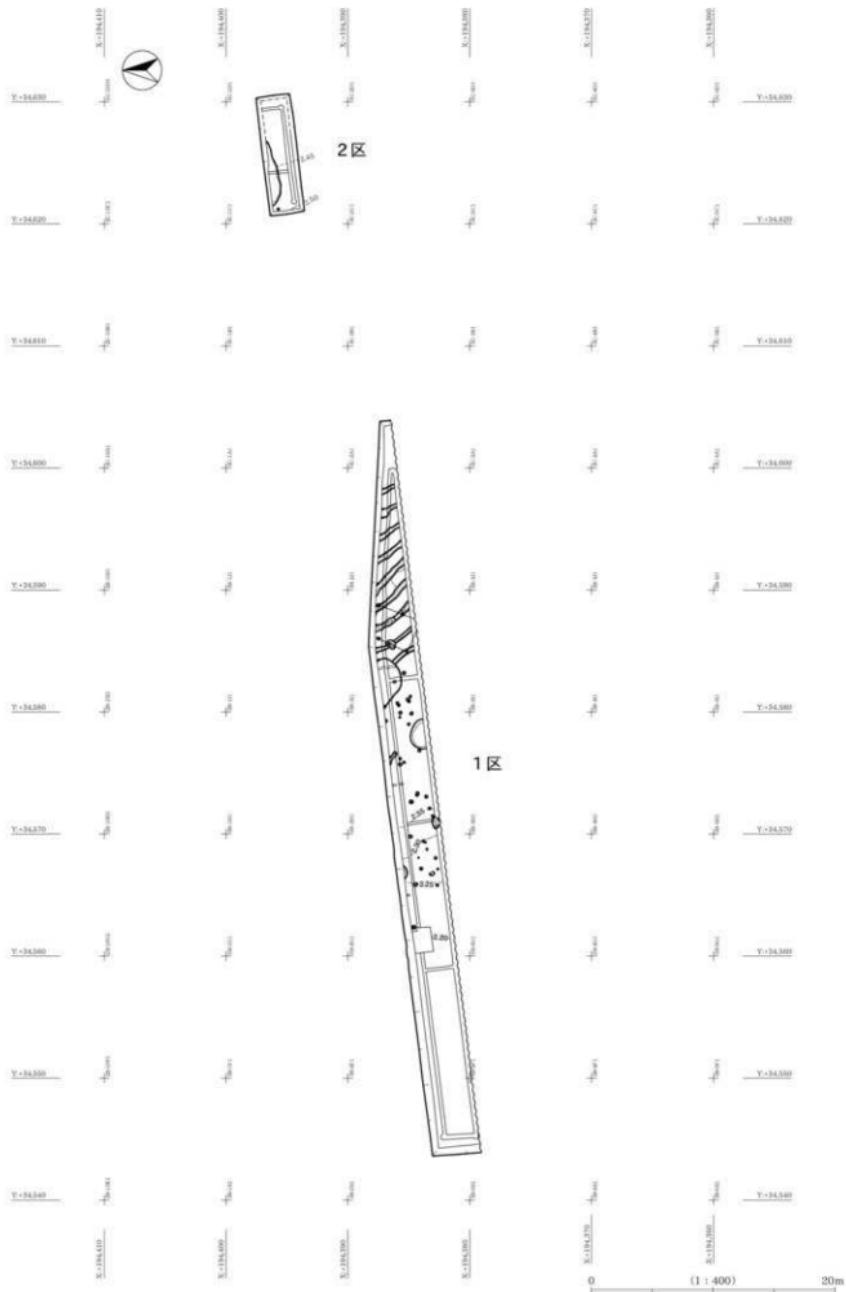
図版 8

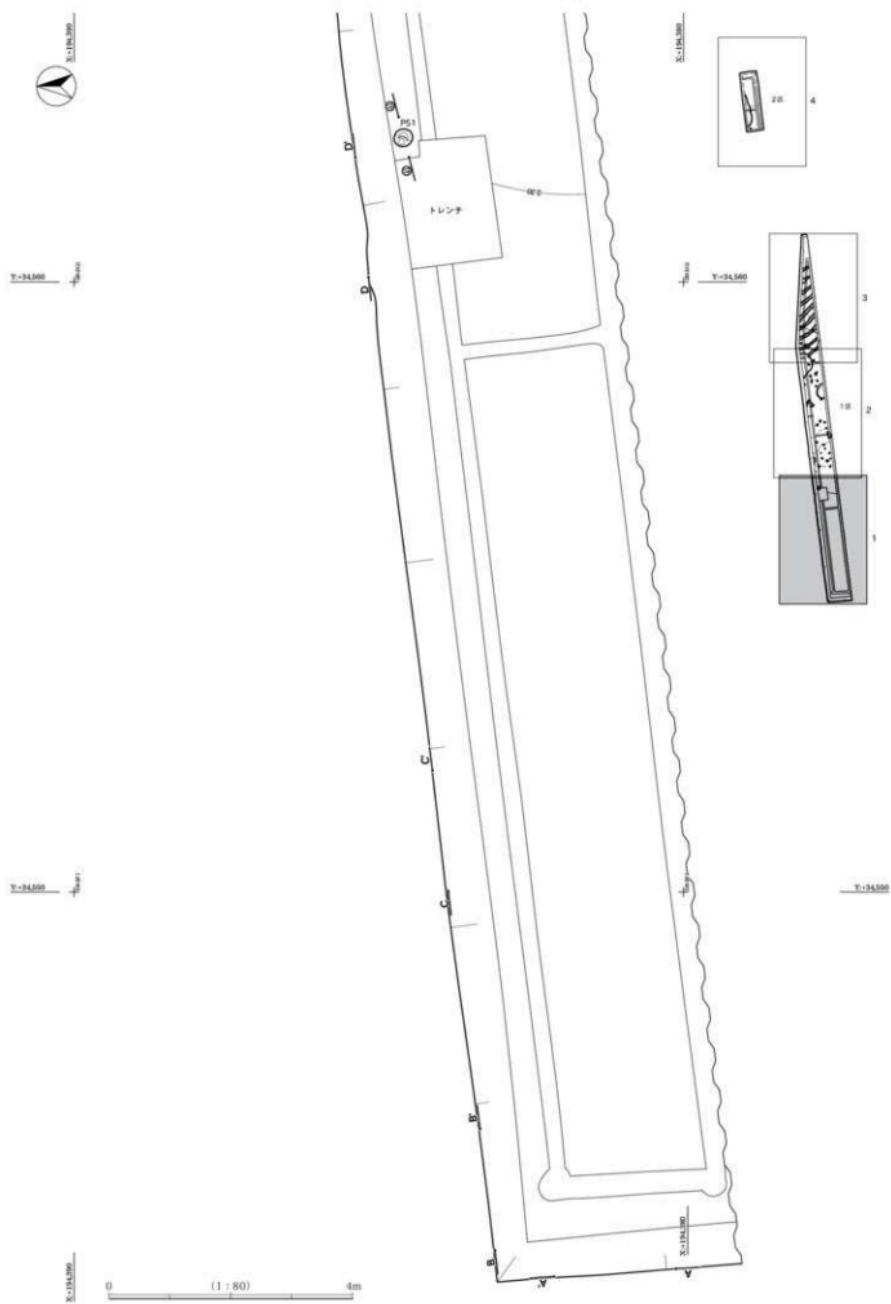
赤館砂山遺跡調査区とグリッド設定図(2)(1/5,000)

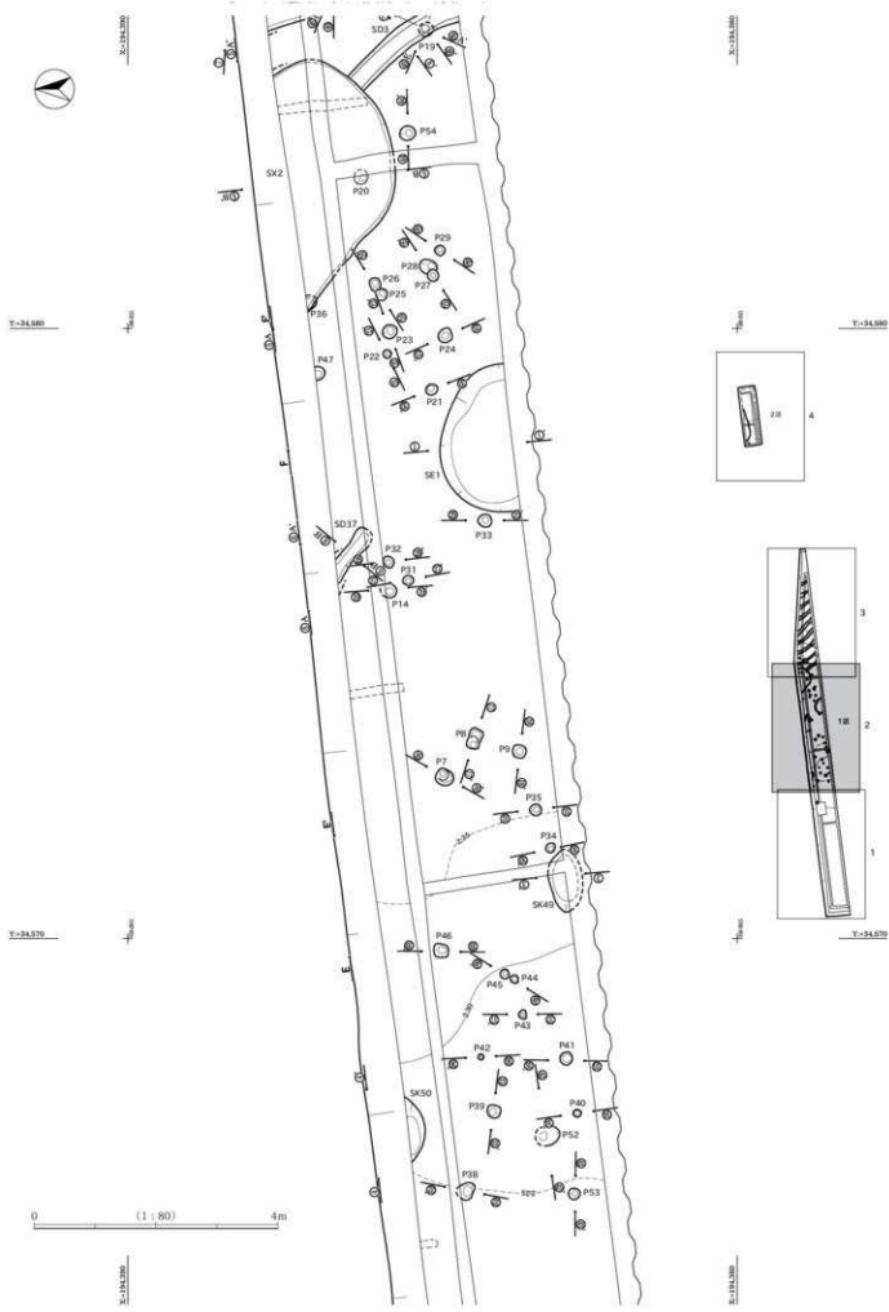


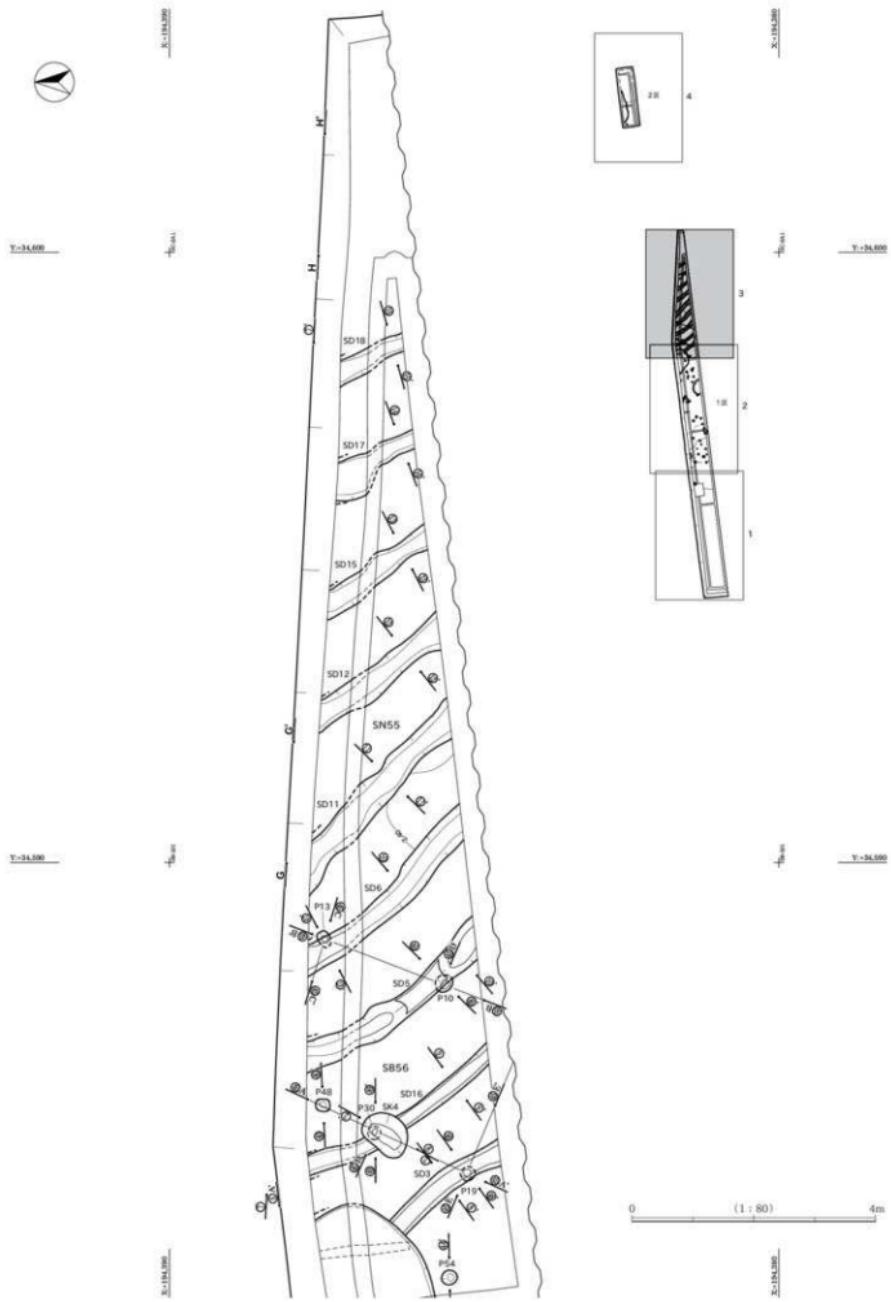
平面直角座標値は世界地図典(測地成果2011)による  
2007年発行「新潟市地形図1:2,500」を縮小移正→1:5,000

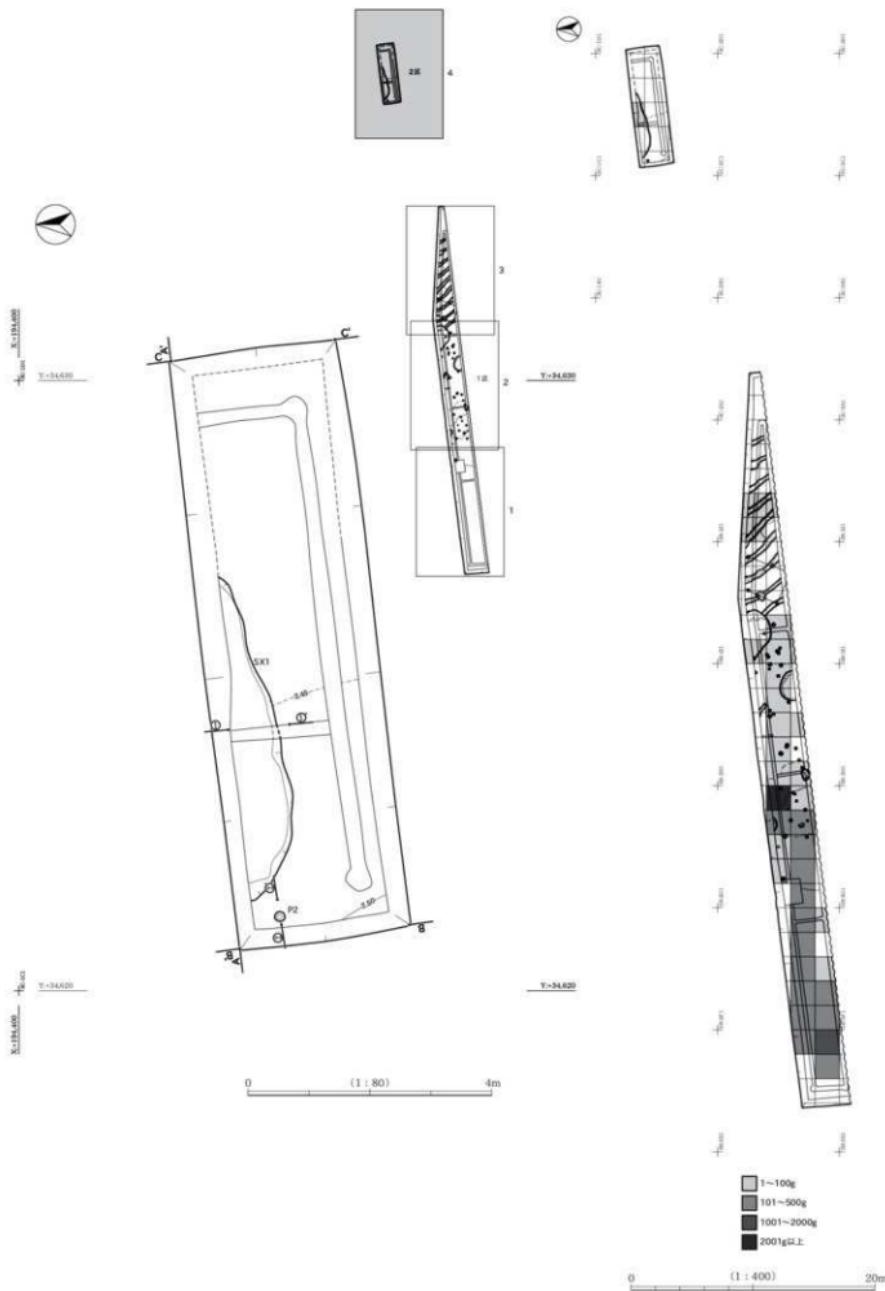




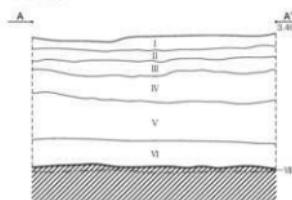




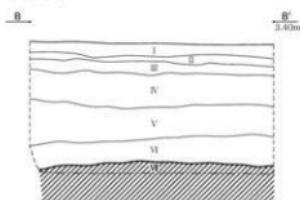




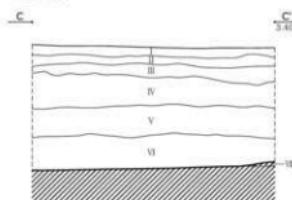
1区基本層序A



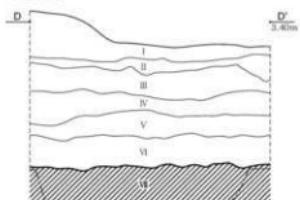
1区基本層序B



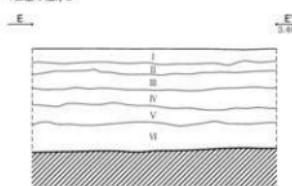
1区基本層序C



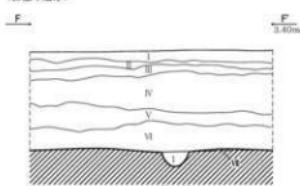
1区基本層序D



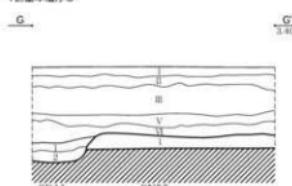
1区基本層序E



1区基本層序F

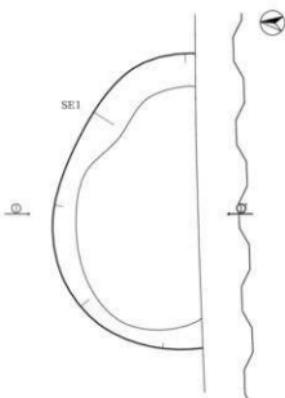


1区基本層序G

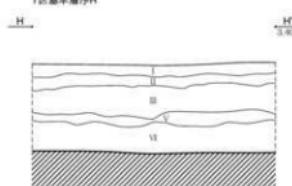


Pit47  
1 黄灰砂質 (SY4/1) シルト 剛性低い しまりあり  $\phi 1\sim2mm$ の礫物混じる

SE1



1区基本層序H

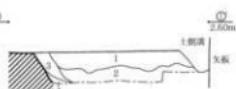


## 基本層序

- 1 黄灰黄色 (2SY4/2) シルト 剛性低い しまりあり 浅褐色粘子じむ 表土
- 2 黄灰黄色 (2SY4/2) シルト 剛性低い しまりあり 浅褐色粘子じむ
- 3 黄色 (10YR2/2) シルト 剛性低い しまりあり 浅褐色粘子じむ
- 4 黄色 (SY4/1) シルト 剛性低い しまりあり 浅褐色粘子じむ
- 5 黄オーブー (7SY4/1) シルト 剌性低い しまりあり  $\phi 1\sim2mm$ の礫物少量混じる 白母層
- 6 黄灰色 (2SY4/1) シルト 剌性あり しまり低い 黄灰色シルトがブロック状に少量混じる 基母層

SE1

- 1 黄灰黄色 (10YR4/1) シルト 剌性低い しまりあり 浅褐色粘子じむ
- 2 黄色 (7SY4/1) シルト 剌性低い しまりあり
- 3 オリーブ黑色 (10Y3/1) シルト 剌性低い しまりあり 黑色シルトがブロック状に混じる
- 4 黄灰色 (2SY5/1) シルト 剌性低い しまりあり  $\phi 1mm$ の礫物少量混じる

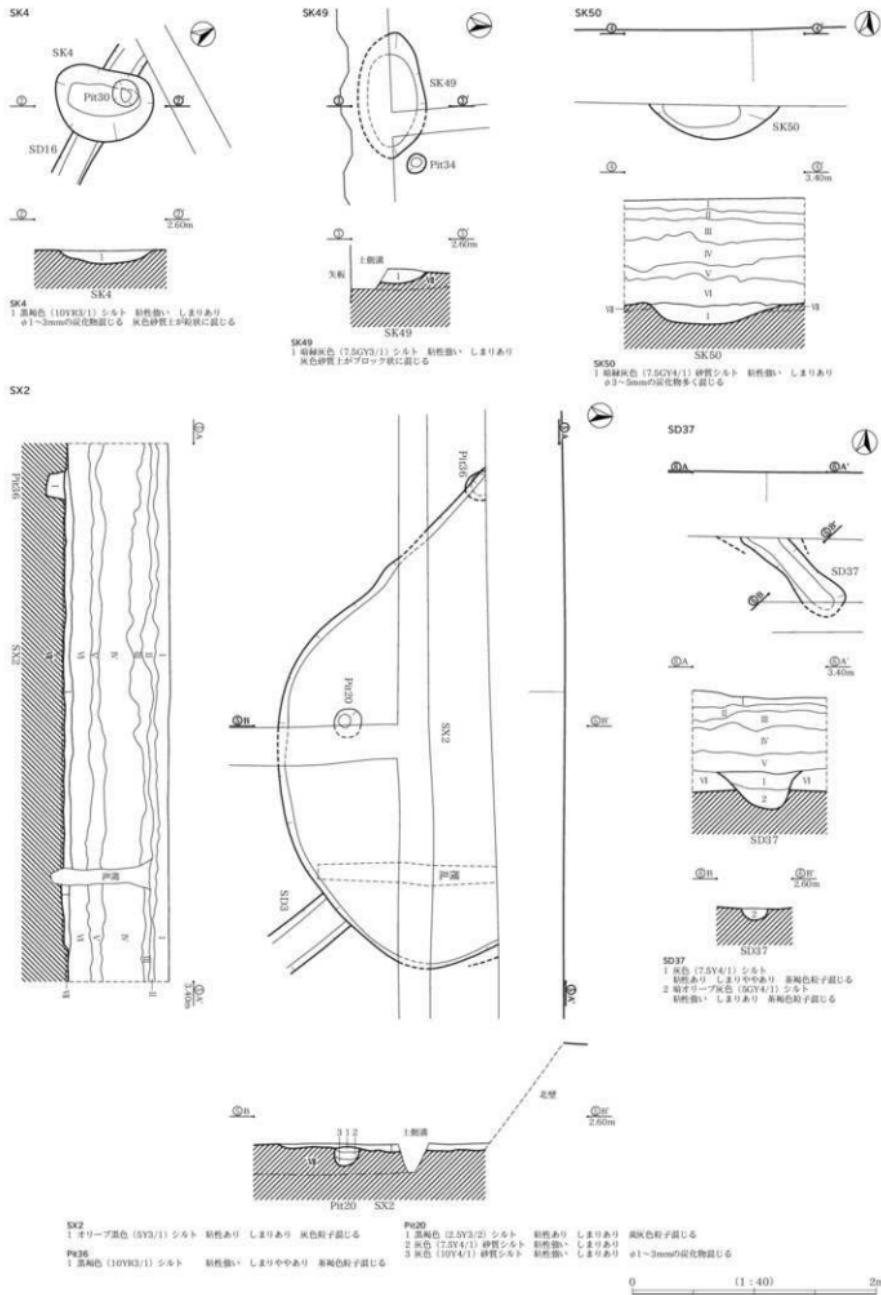


1 : 40

2m

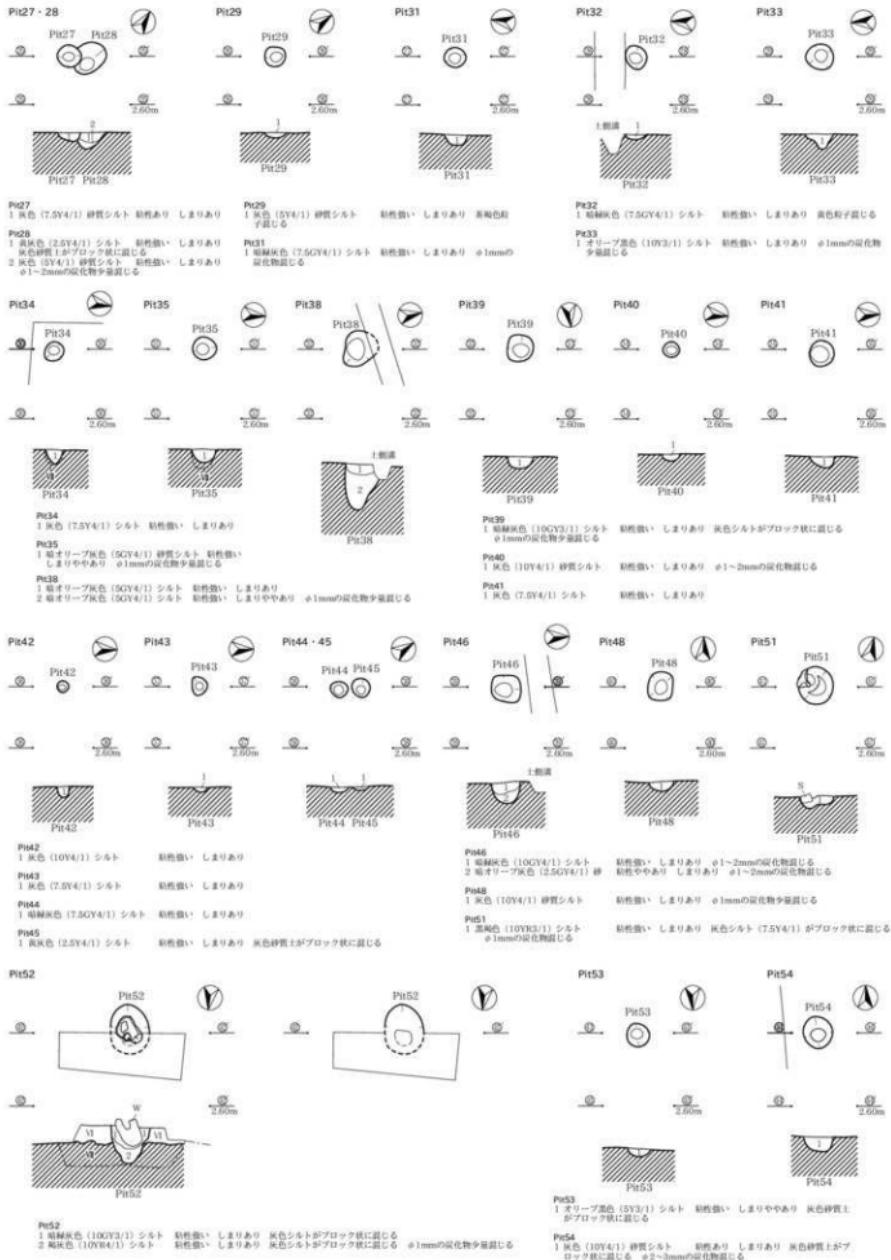
図版 17

1 区 SK4・49・50・SX2・SD37、Pit20・36 実測図 (1/40)



1区 Pit27～29・31～35・38～46・48・51～54実測図(1/40)

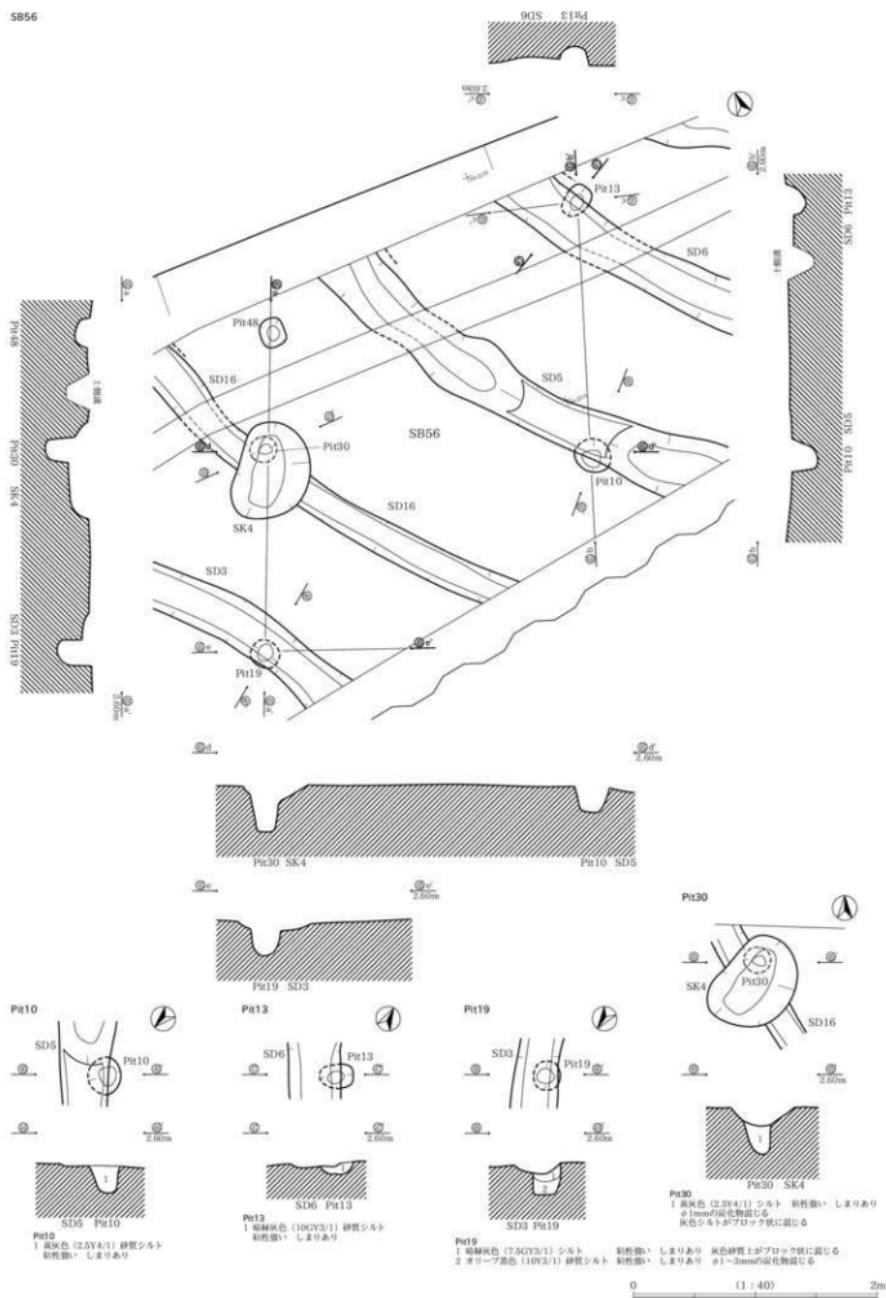
図版 19

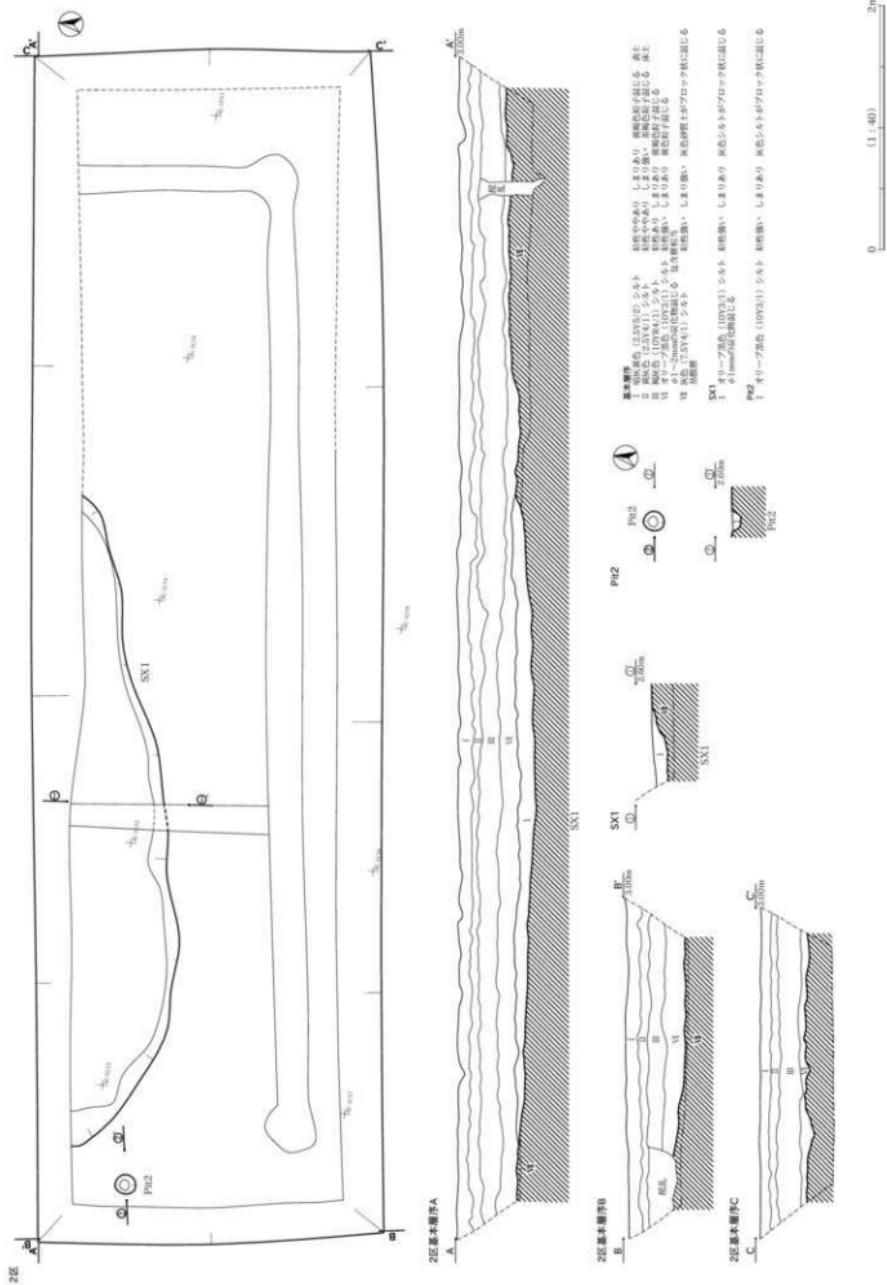


図版 20

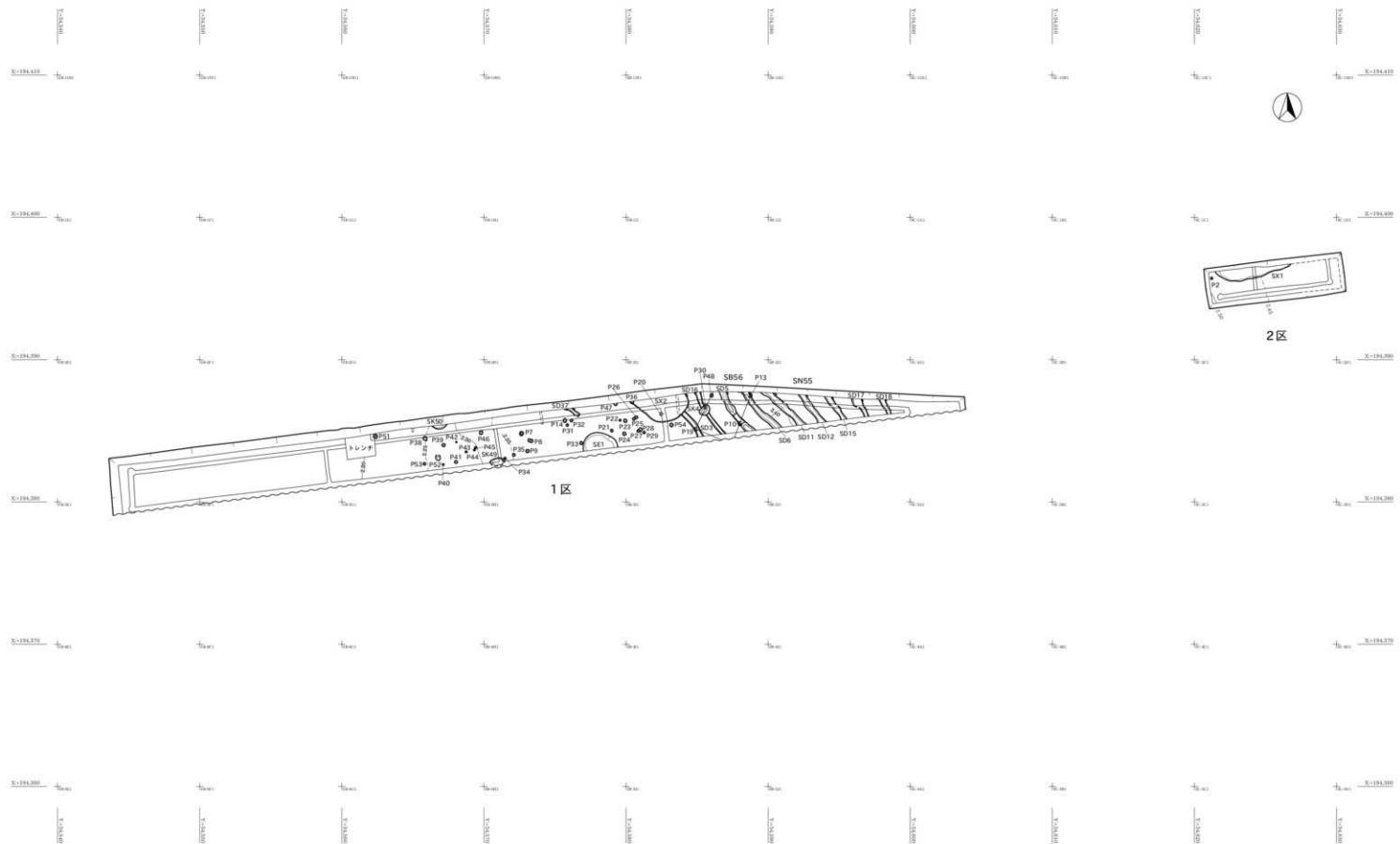
1区 SB56 (Pit10・13・19・30) 実測図 (1/40)

SB56

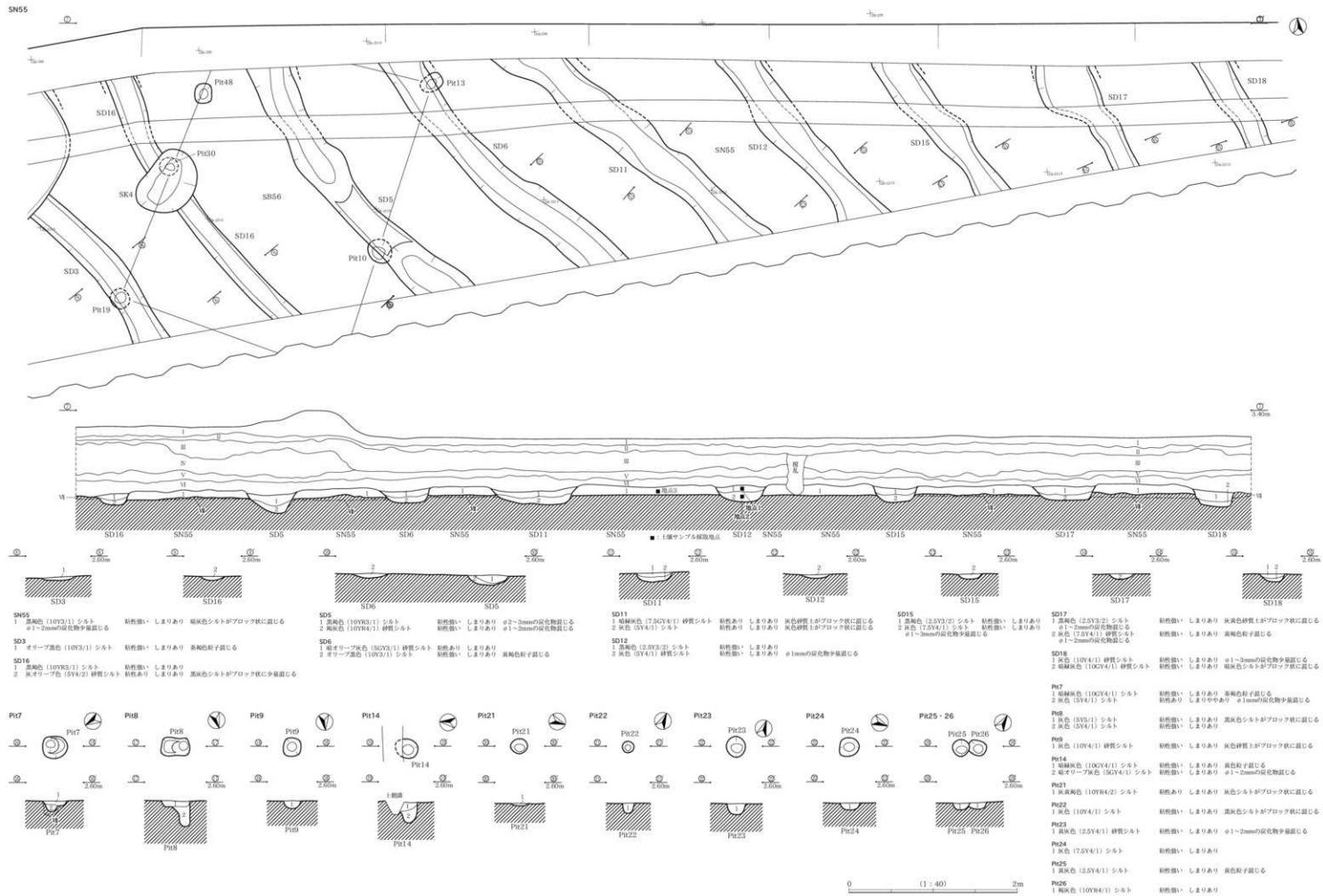




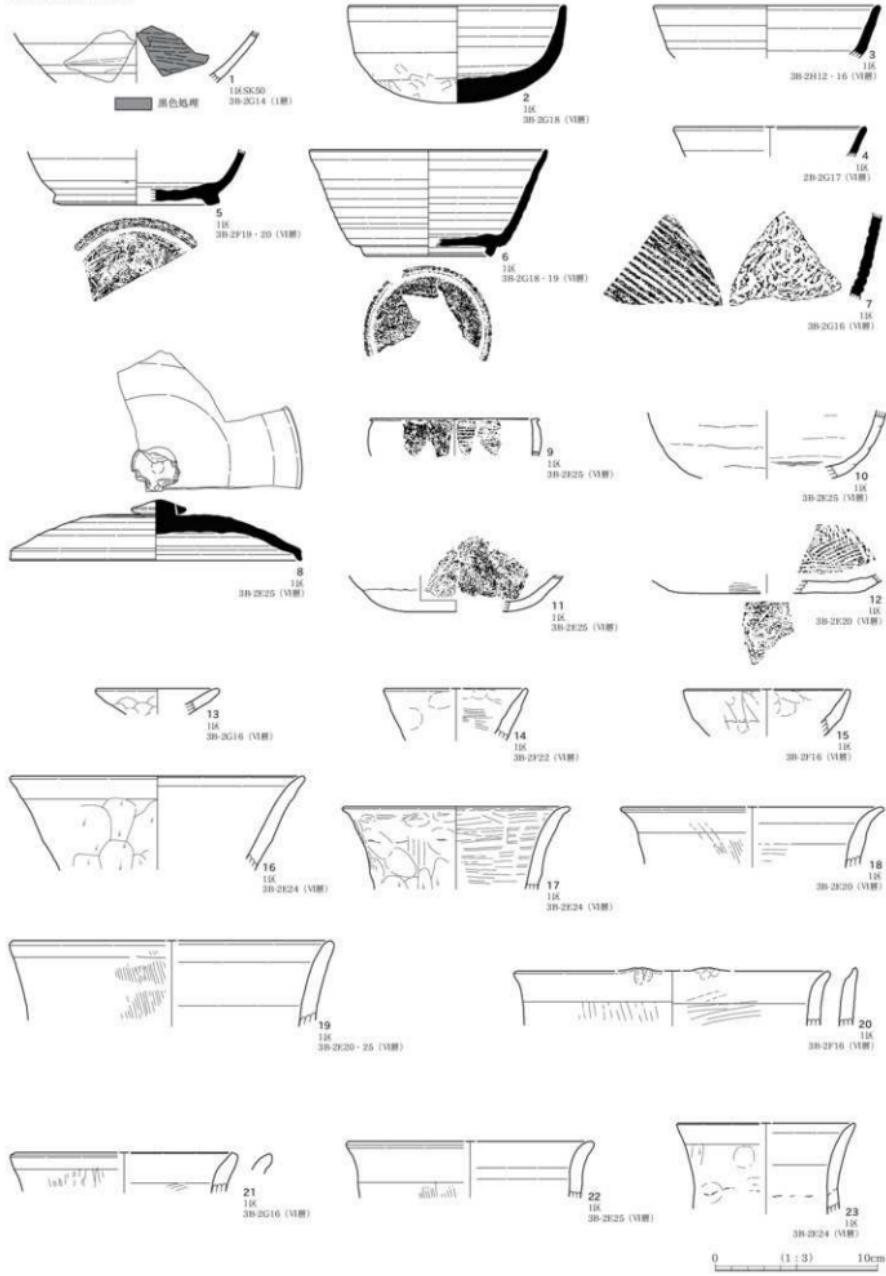
遺構全体図 (1/250)

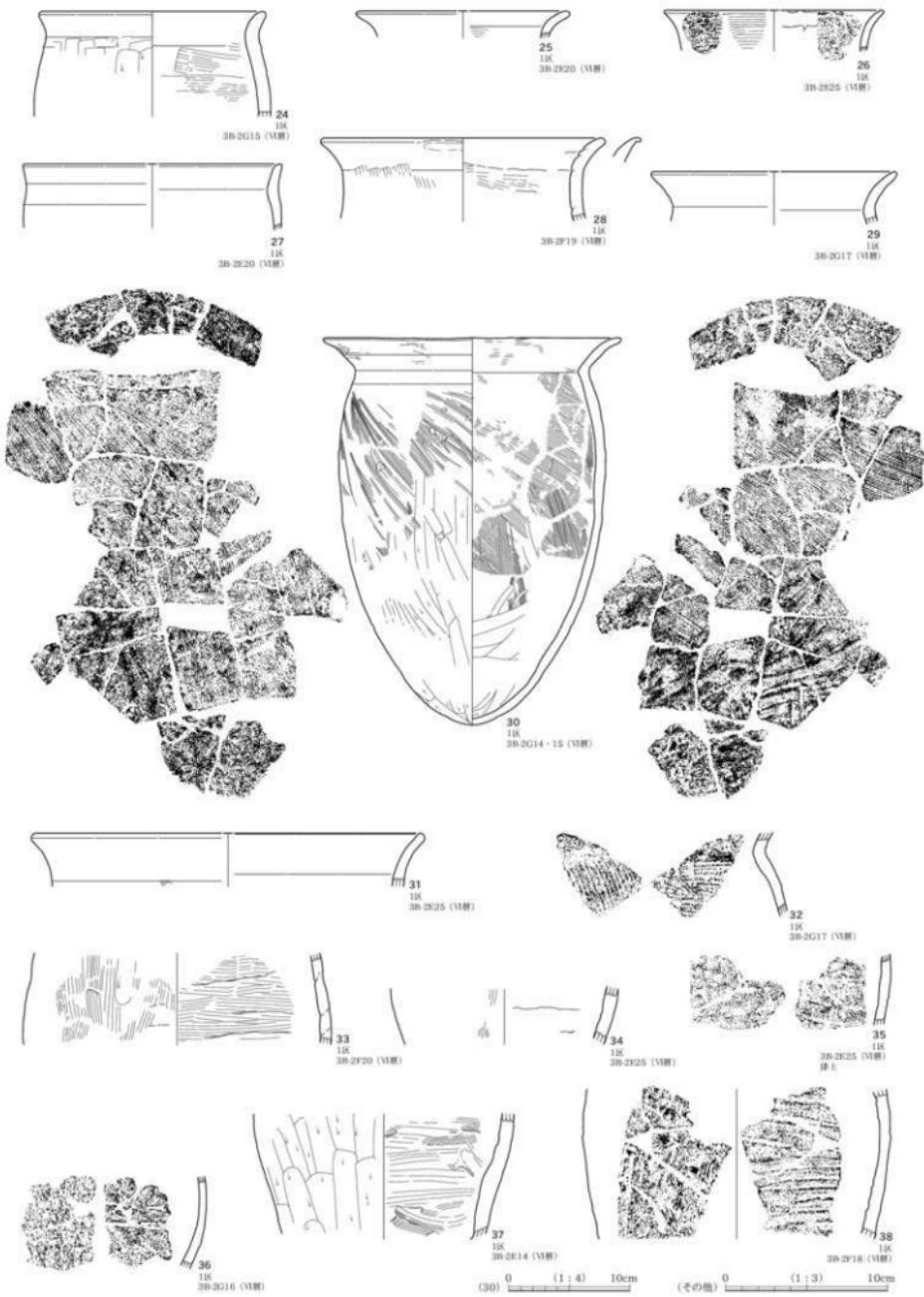


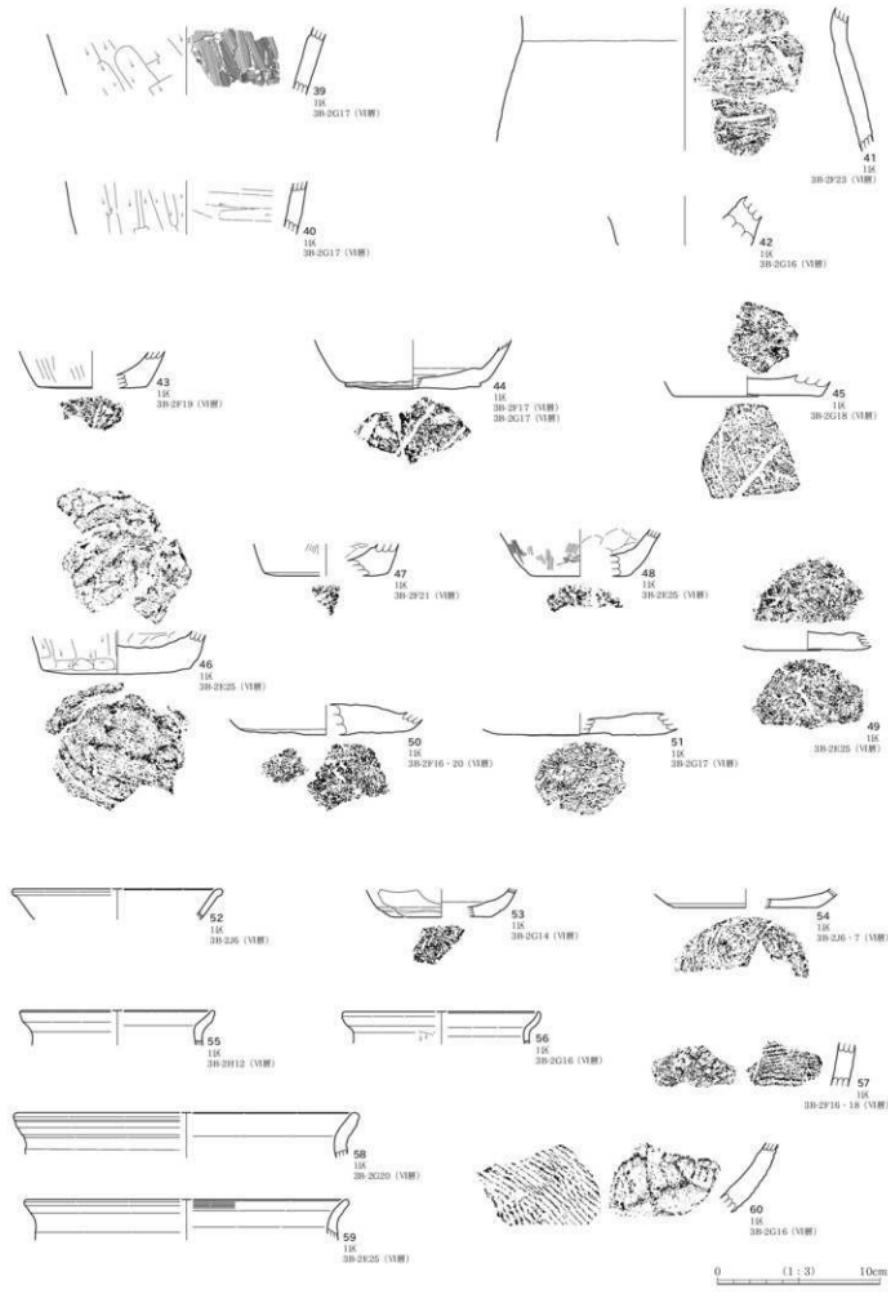
1 区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18), Pit7～9・14・21～26 実測図 (1/40)



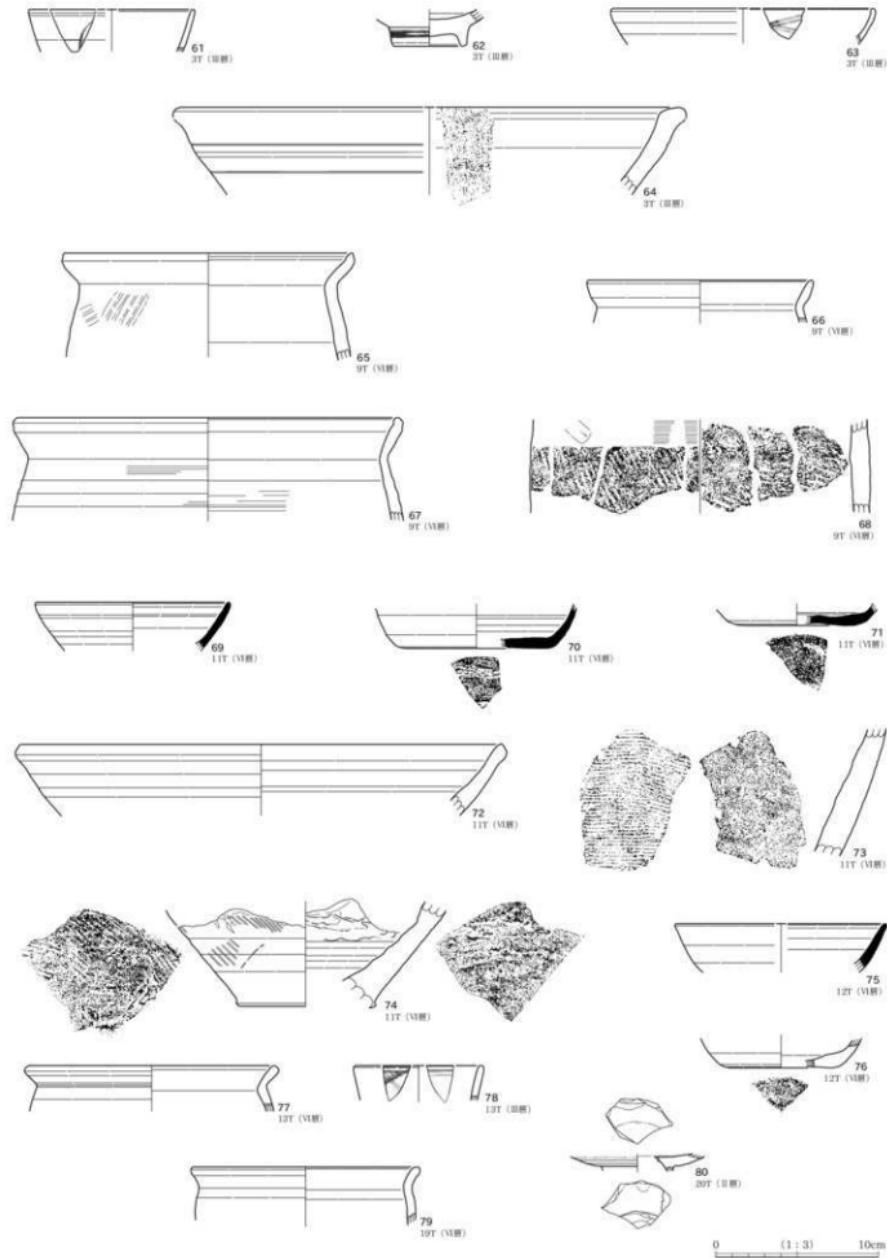
本发掘调查出土土器

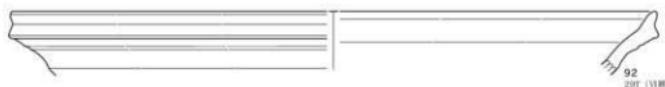
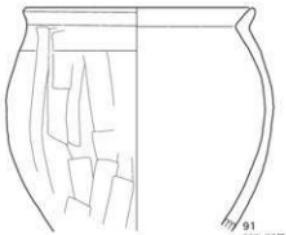
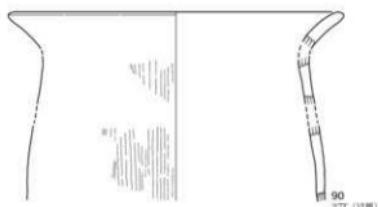
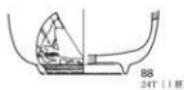
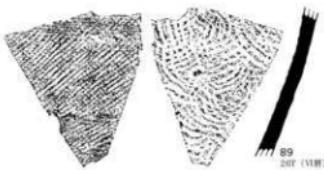
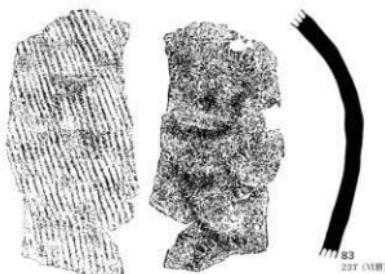
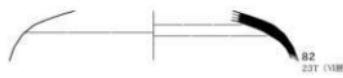
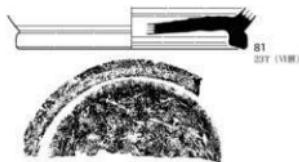




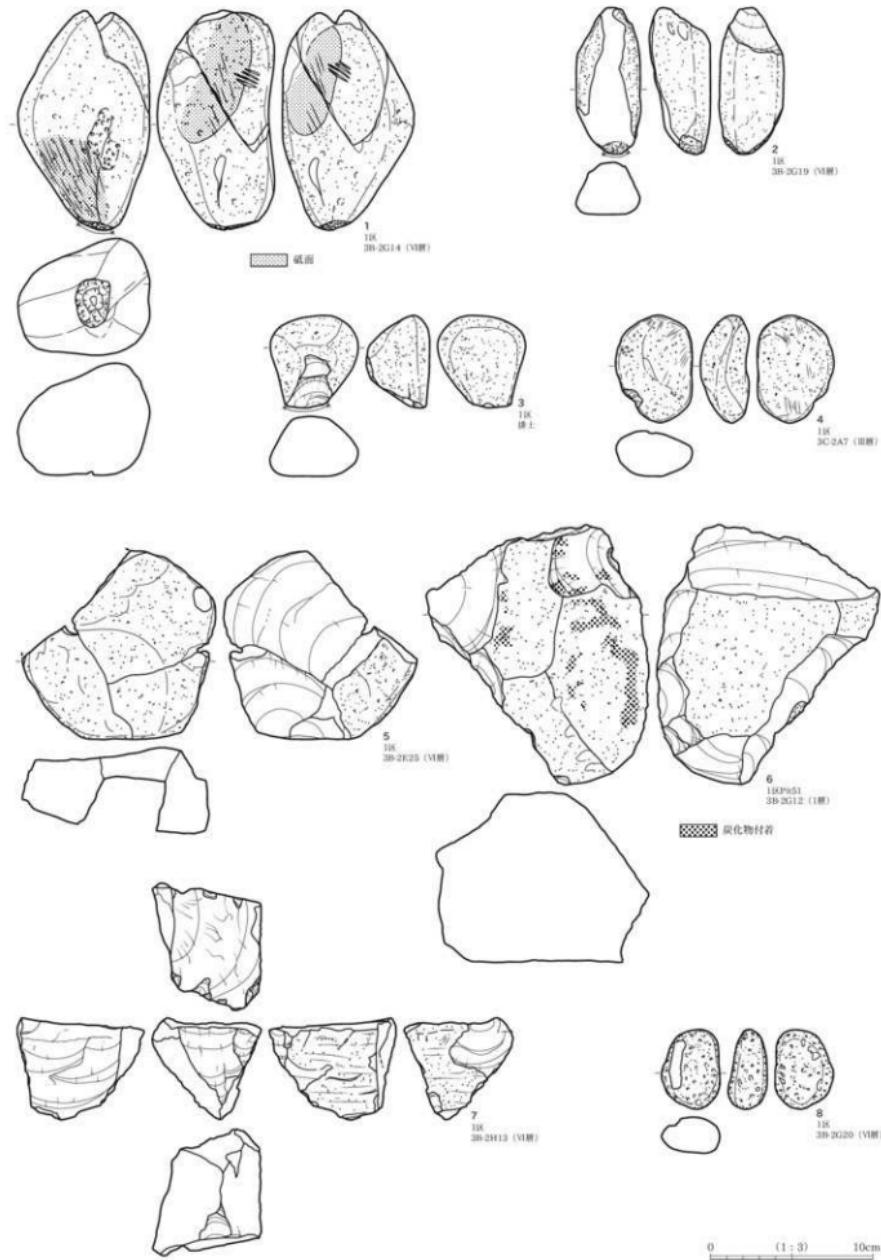


確認調査出土土器

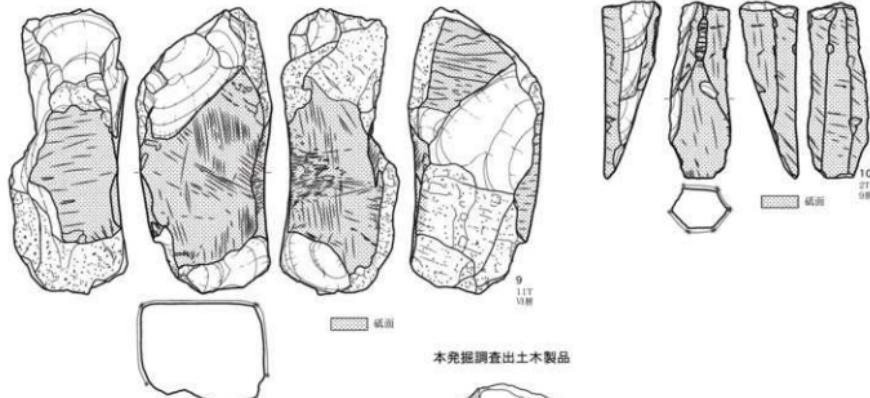




## 本发掘調査出土石製品

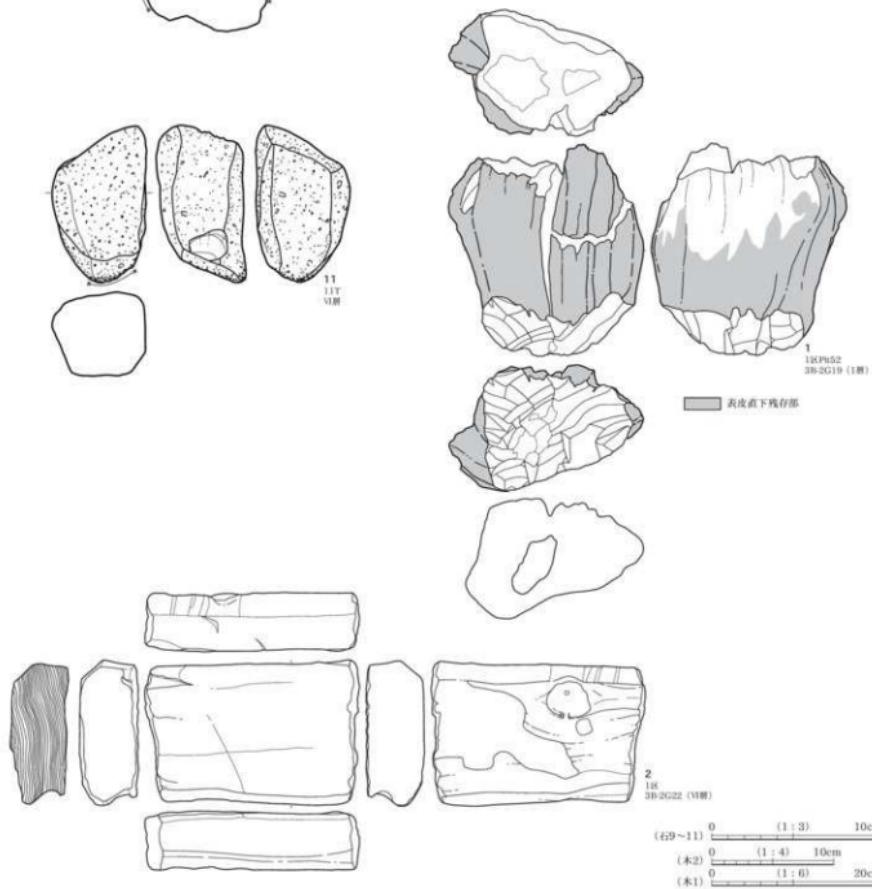


## 確認調査出土石製品



■ 砥面

## 本免掘調査出土木製品



(石9～11) 0 (1 : 3) 10cm  
 (木2) 0 (1 : 4) 10cm  
 (木1) 0 (1 : 6) 20cm

赤館砂山遺跡



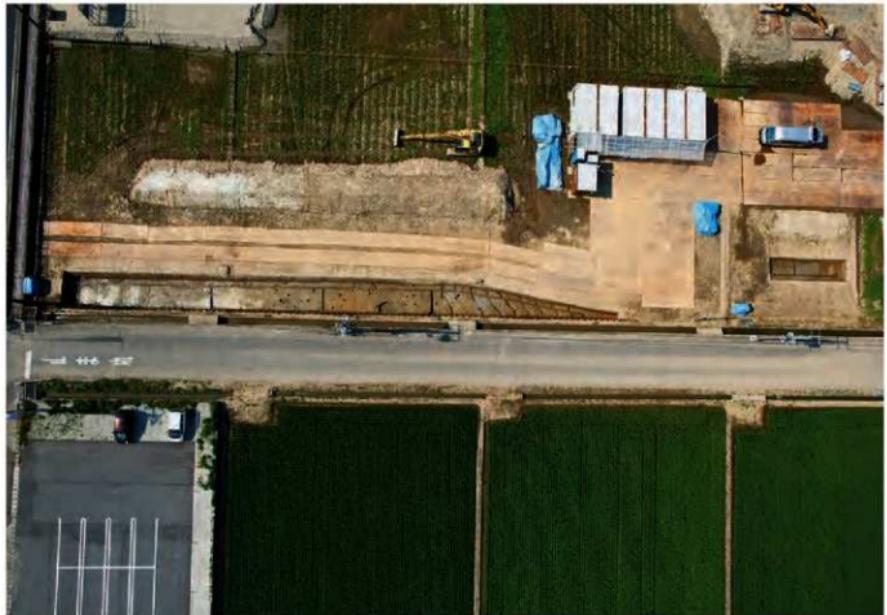
赤鉢砂山遺跡遠景（東から）



1・2区 空中写真 1（北東から）



1・2区 空中写真 2(北西から)



1・2区 空中写真 3(南から)



1区 調査前現況（西から）



1区 調査前現況（東から）



1区 基本層序 A（東から）



1区 基本層序 B（南から）



1区 基本層序 C（南から）



1区 基本層序 D（南から）



1区 基本層序 E（南から）



1区 基本層序 F（南から）



1区 基本層序 G (南から)



1区 基本層序 H (南から)



1区 SE1 土層断面 (西から)



1区 SE1 完掘状況 (西から)



1区 SK4 土層断面 (南東から)



1区 SK4・Pit30 完掘状況 (南東から)



1区 SK49 土層断面 (東から)



1区 SK49 完掘状況 (東から)



2区 調査前現況（東から）



2区 調査前現況（西から）



2区 基本層序 A（南から）



2区 基本層序 B（東から）



2区 基本層序 C（西から）



2区 SX1 土層断面（西から）



2区 SX1 土層断面（南から）



2区 SX1 完掘状況（南から）



1区 SK50 土層断面(南から)



1区 SK50 完掘状況(南から)



1区 SX2 · Pit20 土層断面(東から)



1区 SX2 · Pit36 土層断面・完掘状況(南から)



1区 SX2 · Pit20 完掘状況(東から)



1区 SD3 土層断面(北西から)



1区 SD16 土層断面(北西から)



1区 SD5 · 6 土層断面(北西から)



1区 SD5・16 土層断面(南から)



1区 SD11 土層断面(北西から)



1区 SD6・11 土層断面(南から)



1区 SD12 土層断面(北西から)



1区 SD15 土層断面(北西から)



1区 SD12・15 土層断面(南から)



1区 SD17 土層断面(北西から)



1区 SD18 土層断面(北西から)



1区 SD17・18 土層断面（南から）



1区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況（南西から）



1区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況（北西から）



1区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況（南から）



1区 SD37 土層断面 A（南から）



1区 SD37 土層断面 B（南東から）



1区 SD37 完掘状況（南東から）



1区 SB56 完掘状況（北東から）



1区 Pit10 (SB56) 完掘状況（北西から）



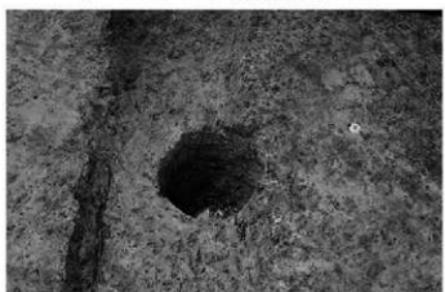
1区 Pit13 (SB56) 土層断面（南東から）



1区 Pit13 (SB56) 完掘状況（南東から）



1区 Pit19 (SB56) 土層断面（北西から）



1区 Pit19 (SB56) 完掘状況（北西から）



1区 Pit30 (SB56) 完掘状況（南東から）



1区 Pit7 土層断面（北西から）



1区 Pit7 完掘状況（北西から）



1区 Pit8 土層断面(北東から)



1区 Pit8 完掘状況(北東から)



1区 Pit9 土層断面(北から)



1区 Pit9 完掘状況(北から)



1区 Pit14 土層断面(西から)



1区 Pit31 土層断面(西から)



1区 Pit32 土層断面(西から)



1区 Pit14・31・32 完掘状況(西から)



1区 Pit21 土層断面（北東から）



1区 Pit21 完掘状況（北東から）



1区 Pit22 土層断面（南東から）



1区 Pit23 土層断面（南東から）



1区 Pit22・23 完掘状況（南から）



1区 Pit24 土層断面（北東から）



1区 Pit24 完掘状況（北東から）



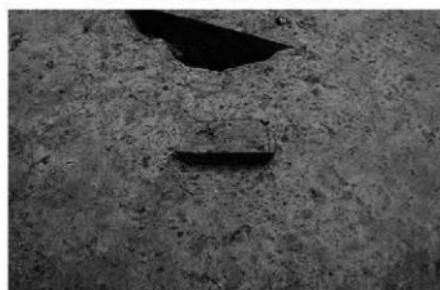
1区 Pit25・26 土層断面（南東から）



1区 Pit25・26 完掘状況（南東から）



1区 Pit27・28 土層断面（南東から）



1区 Pit29 土層断面（南東から）



1区 Pit27～29 完掘状況（南東から）



1区 Pit33 土層断面（西から）



1区 Pit33 完掘状況（西から）



1区 Pit34 土層断面（東から）



1区 Pit34 完掘状況（東から）



1区 Pit35 土層断面(東から)



1区 Pit35 完掘状況(東から)



1区 Pit38 土層断面(東から)



1区 Pit38 完掘状況(東から)



1区 Pit39 土層断面(北から)



1区 Pit39 完掘状況(北から)



1区 Pit40 土層断面(東から)



1区 Pit40 完掘状況(東から)



1区 Pit41 土層断面（東から）



1区 Pit41 完掘状況（東から）



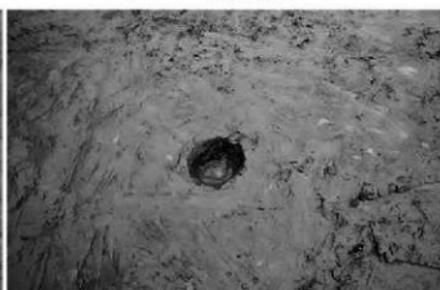
1区 Pit42 土層断面（東から）



1区 Pit42 完掘状況（東から）



1区 Pit43 土層断面（東から）



1区 Pit43 完掘状況（東から）



1区 Pit44・45 土層断面（南東から）



1区 Pit44・45 完掘状況（南東から）



1区 Pit46 土層断面(東から)



1区 Pit46 完掘状況(東から)



1区 Pit47 土層断面・完掘状況(南から)



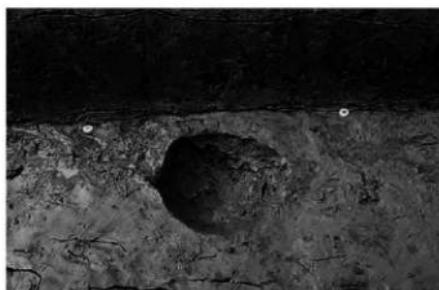
1区 Pit48 土層断面(南から)



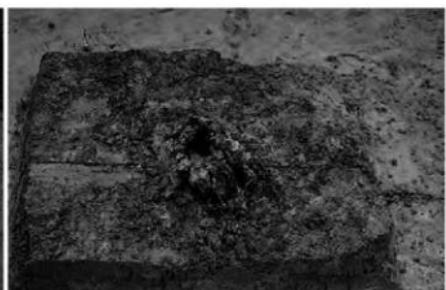
1区 Pit48 完掘状況(南から)



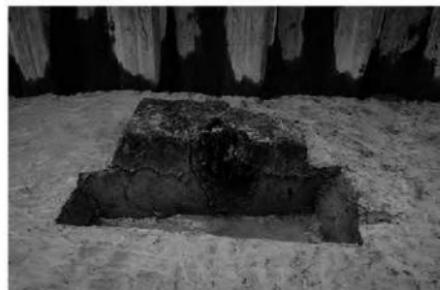
1区 Pit51 土層断面(南から)



1区 Pit51 完掘状況(南から)



1区 Pit52 柱根検出状況(北から)



1区 Pit52 土層断面(北から)



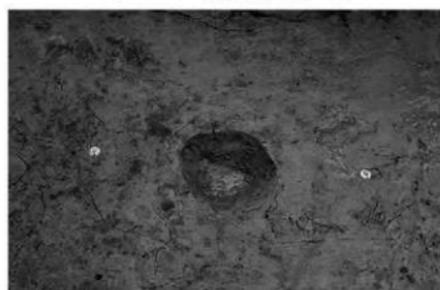
1区 Pit52 完掘状況1(北から)



1区 Pit52 完掘状況2(北から)



1区 Pit53 土層断面(北から)



1区 Pit53 完掘状況(北から)



1区 Pit54 土層断面(南から)



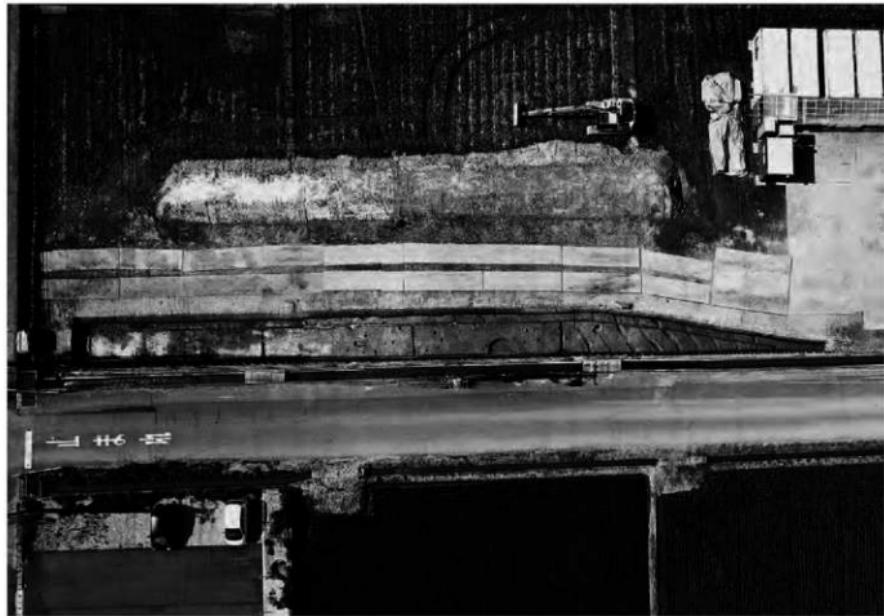
1区 Pit54 完掘状況(南から)



1区 木製品出土状況(北から)



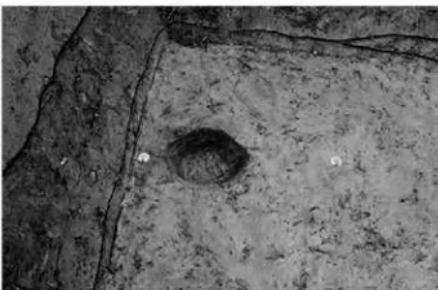
1区 完掘状況（東から）



1区 完掘状況（北が上）



2区 Pit2 土層断面(南から)



2区 Pit2 完掘状況(南から)



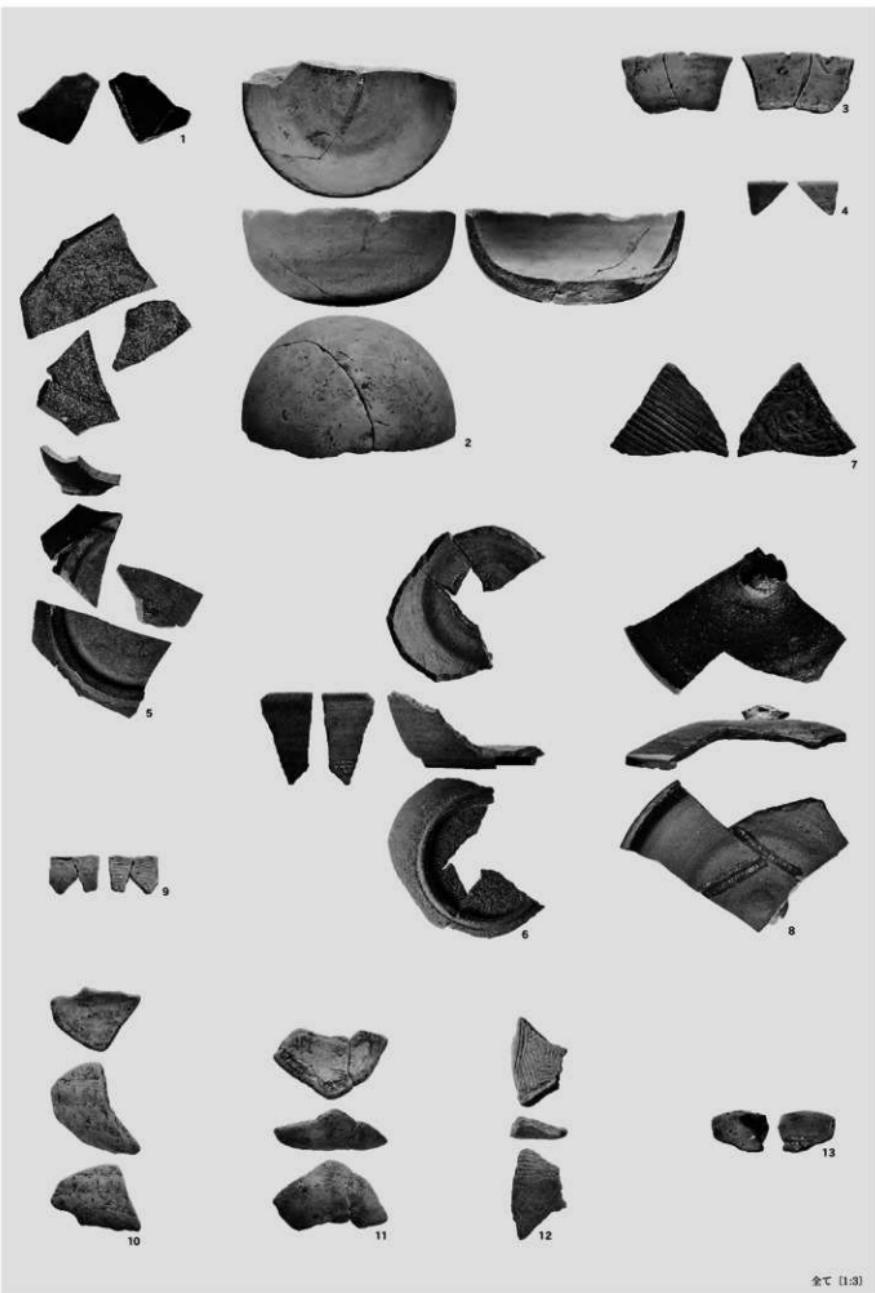
2区 完掘状況(北から)



2区 完掘状況(南西から)



2区 完掘状況(西から)

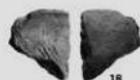




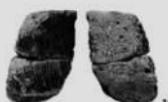
16



17



18



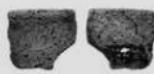
19



20



21



22



23



24



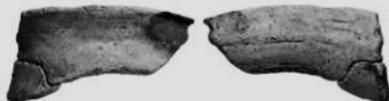
25



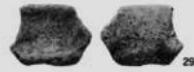
26



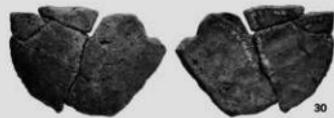
27



28

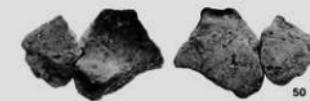


29



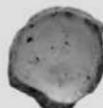
30







61



62



63



64



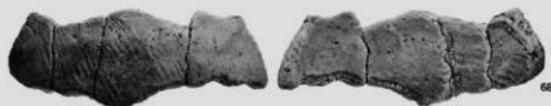
66



65



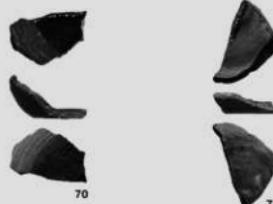
67



68



69



70



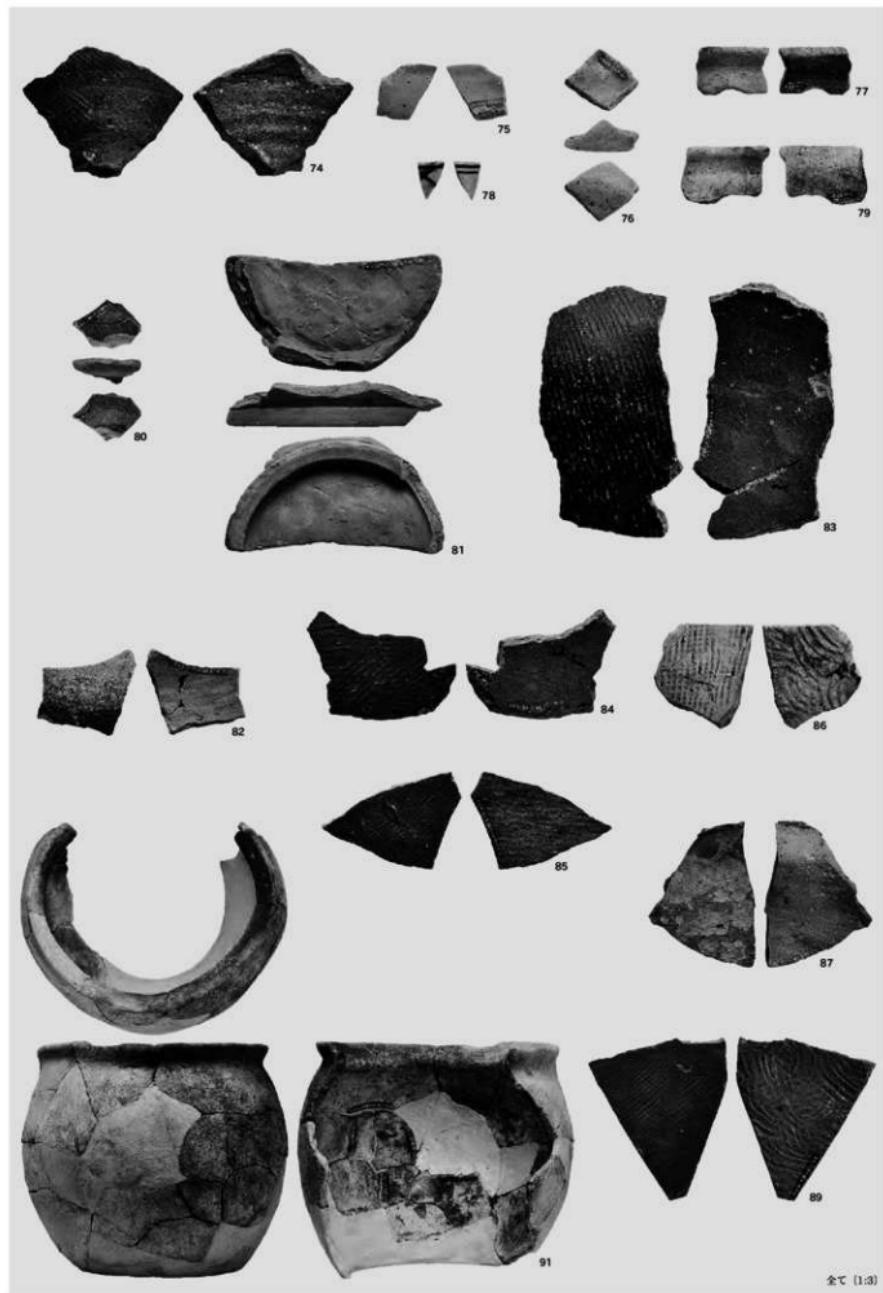
71



72

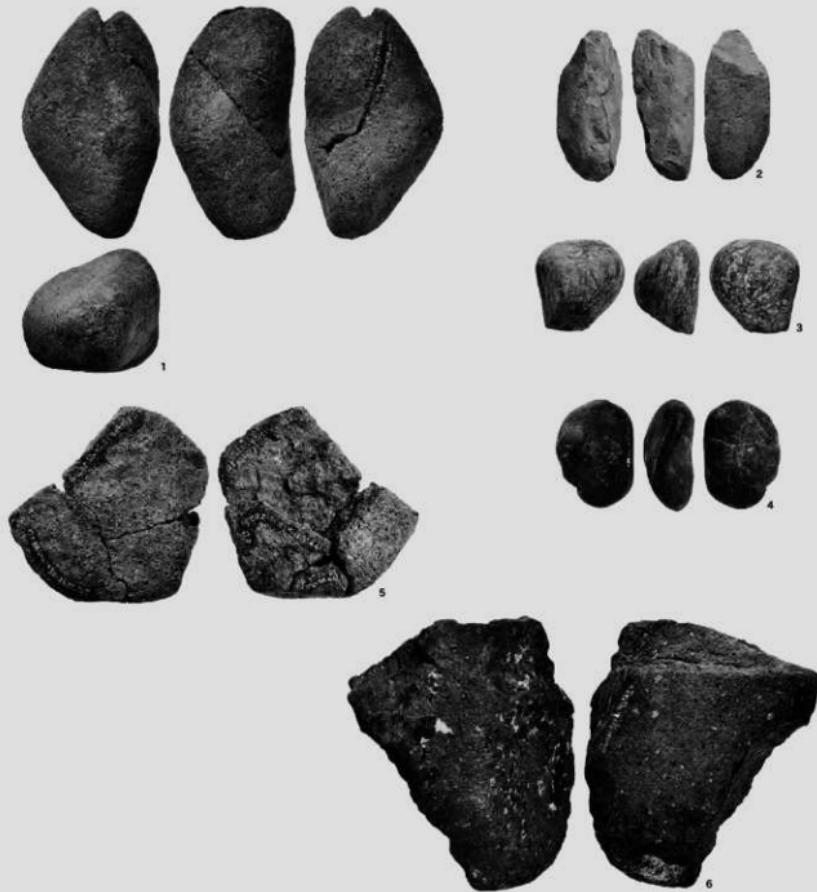


73

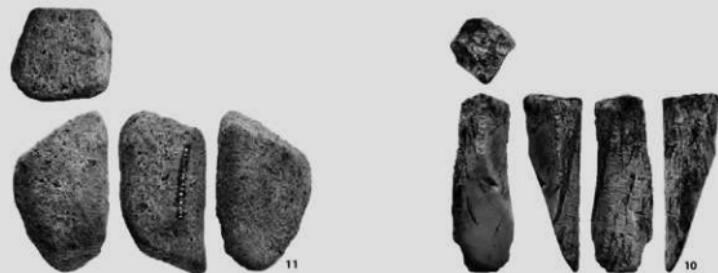
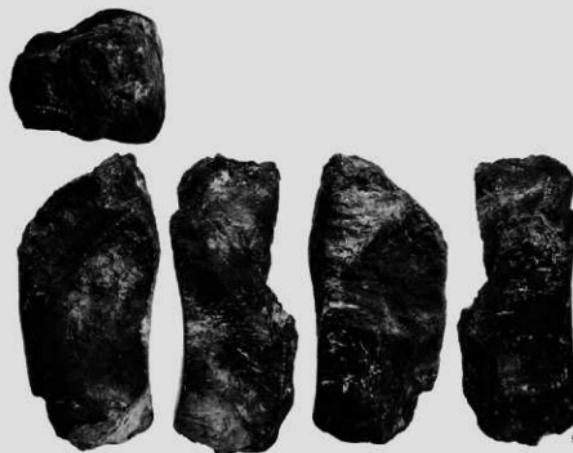


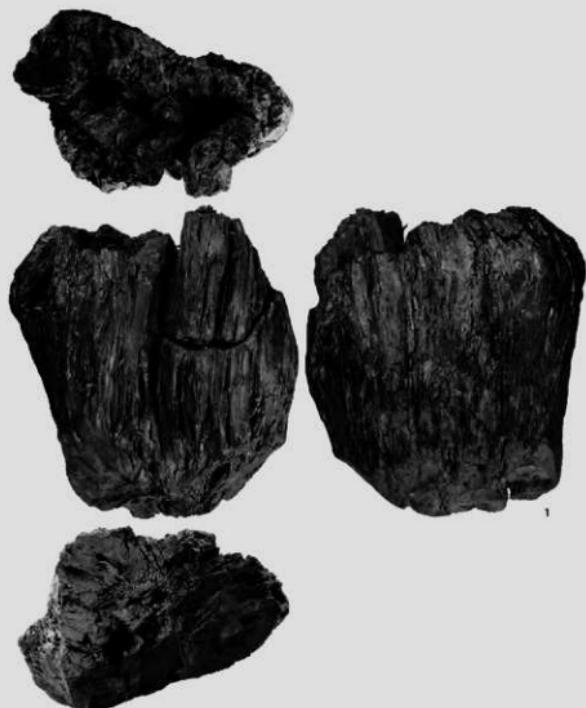


## 石製品



全て [1:3]





1 (1:4)  
2 (1:3)

## 報告書抄録

ふりがな	あかさびすなやまいせき だいごじちょうさ							
書名	赤鎧砂山遺跡 第5次調査							
副書名	商業施設建設に伴う赤鎧砂山遺跡第3次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	立木宏明・澤野慶子・奈良佳子(新潟市文化財センター)・株式会社古環境研究所・株式会社加速器分析研究所							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1 TEL.025-378-0480							
発行機関	新潟市教育委員会							
発行年月日	西暦 2019年3月8日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因	
赤鎧砂山遺跡	新潟県新潟市西蒲区 赤鎧字砂山 331-3 番地ほか	15108	778	37° 45° 04°	138° 53° 32°	20170601 ~ 20170815	240.64 m <sup>2</sup>	商業施設建設に 伴う本発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
赤鎧砂山遺跡	集落遺跡	飛鳥時代 奈良時代 平安時代	井戸 構・溝・小土坑 建物・煙跡	性格不明遺構 土坑・土師器・石製品・ 須恵器・土師器・石製品・ 木製品				
要約	<p>赤鎧砂山遺跡は西川右岸の自然堤防上に立地し、遺跡から約2km北東に「鉛潟」が1960年代まで広がっていた。現況は水田・畑である。推定遺跡範囲は、南北約100m、東西約250mで、約2.5ha程の広さである。本発掘調査地点は、遺跡範囲南端に位置する。出土遺物の大半は、奈良・平安時代の土師器・須恵器である。土器の時期は、8世紀前葉を前後する時期と9世紀代の概ね2時期に分かれる。1区東側に1間×2間程度の小型掘立柱建物を確認した。建物の廃絶後に烟が形成されている。また、小土坑群周辺に井戸が構築されている。</p> <p>遺跡の性格としては、8世紀前葉後に平野に進出し、9世紀代まで生活した集落跡の一部と考えられる。また、旧河岸などは確認されなかったが、潟湖やそこに流れ込む小河川を利用しての内水面交通の要衝的な性格を帯びた遺跡の可能性もある。</p>							

### 赤鎧砂山遺跡 第5次調査

－商業施設建設に伴う赤鎧砂山遺跡第3次発掘調査報告書－

2019年3月7日印刷

2019年3月8日発行

編集 新潟市歴史文化課文化財センター

〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1

TEL 025(378)0480

発行 新潟市教育委員会

〒951-8550 新潟市中央区学校町通一番町602番地1

TEL 025(228)1000

印刷・製本 株式会社ハイグラフ

〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号

TEL 025(233)0321

赤鎧砂山遺跡 第5次調査  
－商業施設建設に伴う赤鎧砂山遺跡第3次発掘調査報告書－  
正誤表

頁	行等	誤	正
22	下から5行目	〔坂井ほか1989a〕	〔坂井ほか1989〕
43	下から8行目	〔遠藤・脇本ほか2016〕	〔遠藤・澤野ほか2016〕
43	下から8～9行目	〔遠藤ほか2016〕	〔遠藤・脇本ほか2016〕
46	エの3行目に追加	遠藤恭雄・澤野慶子ほか、2016『沖ノ羽遺跡VI 第19・22・24次調査－県営ほ場整備事業(担い手育成型)満日地区に伴う沖ノ羽遺跡第12・15・17次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会	
47	ツの1行目に追加	立木宏明、2014「細池寺道上遺跡の軽石製石製品について」『細池寺道上遺跡III 第26次調査－県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う第12次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会	
47	ツの3行目に追加	立木宏明・奈良佳子ほか、2017『細池寺道上遺跡VI 第44次調査－県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う細池寺道上遺跡第19次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会 立木宏明・奈良佳子ほか、2018『細池寺道上遺跡VII 第46次調査－県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う細池寺道上遺跡第21次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会	
51	別表3 報告No.2～4の「焼成」の欄	酸化	還元
51	別表3 報告No.12の「遺存率・底部」の欄	二	3
図版28	10のキャプション	9層	Ⅲ層

2019年3月8日発行 新潟市教育委員会